

には緩やかな面取りがみられる。12世紀前・中葉のものが目立つが、1区出土遺物より時期幅が広く、13世紀に下るものもわずかに含む。前述の通り、第9a層からの踏み込み、耕作痕跡が第10a層まで多数及んでいることをはじめとして、1区に比べて層理面に著しい凹凸がみられることに起因していると思われる。

第7項 第11-1a層上面、第11-2a層上面（第11-1a層下面）

第11a層は、1区では、第11-1a層、第11-2a層の2層に分層し得た。1区では第11-1a層上面、第11-2a層上面で、2区では第11a層上面で、調査を行なった。

第11-1a層は、緑灰色粗砂～小礫を多く含む粘土～シルトで、厚さ数cmである。第11-2a層は、灰色シルト混じり細砂～粗砂・小礫で、厚さ約0.1mである。1区東西断面（図7）の中央東寄り部分では、厚さ約0.2mで、2～3層に分かれる。第11-2b層は、明褐色細砂～粗砂・小礫である。

第11-1a層上面（1区）はT.P.11.4～11.6m、第11a層上面（2区）はT.P.11.7mである。第11-2a層上面は、T.P.11.3～11.5mである。上位の遺構面に比べて、東西の高低差が顕著である。北側に接する（その8）調査区の第11-1a層上面、11-2a層上面（第11-1a層下面）にそれぞれ対応する。

第11-1a層上面・第11a層上面の遺構（図8・34・37・38 図版10・11）

第10a層を除去した、第11-1a層及び第11a層上面である。第10b層は、1区で部分的に認められるが、面的には遺存していない。第10a層段階の耕作に伴う攪拌により、遺構面の遺存状況は良くないが、一部で畦畔を検出した。

1区中央の坪境にあたる箇所は、上面の溝が攪乱として残っていたが、部分的に南北方向の286畦畔を検出した。幅約1.3mで、周囲の遺構面よりも約0.1m高い。坪境畦畔と思われる。調査区中央北寄りでは、第7a層上面の溝で削られてはいるものの、西側が拡張して幅が広がっている。第11-2b層が厚く堆積している箇所にあたっており、その影響と思われる。

287畦畔は、286畦畔（坪境）の東側で検出した、東西方向の畦畔である。畦畔肩部分にわずかに遺存していた第10b層極細砂～細砂により認識し得た。西部には第10b層が遺存しておらず、作土層と畦畔部分の土質の違いにより痕跡を検出している。幅約0.6m、高さ3cmである。なお、畦畔頂部は、第10b層に被覆されていないため削平を受けており、基部を検出したと思われる。1区において検出した、上位の遺構面の東西畦畔を、東側に延長した箇所にあたる。

288・289擬似畦畔は、第11-1a層上に、第10b層が東西方向の帯状に遺存していたものである。第10b層は浅黄色極細砂～細砂でシルトの薄層を含み、厚さ4cm未満である。約0.3mの幅で遺存していた。複数箇所を断ち割って行なった断面観察では、第10b層直下の第11-1a層上面は、ほぼ水平であった。第11-1a層上面の畦畔肩部分に第10b層が遺存しているのであれば、肩部の立ち上がりがあるはずであるが、認められなかった。また、溝状に窪んでもいない。第10a層段階の耕作に伴う攪拌が周囲と同じ深さまで及ばず、第10b層が遺存したと考え、ここに第10a層段階に畦畔があったことを示している可能性がある。上位の遺構面の東西畦畔の位置をほぼ踏襲している287畦畔との位置関係は、288擬似畦畔は北に約6.2m、289擬似畦畔は南に約4.3mである。

2区では、東西方向の1007擬似畦畔を検出した。東西方向の帯状に、第11a層よりもシルト質の強い部分がみられた。1区において検出した287畦畔を、東側に延長した箇所にあたる。第10a層上

面で1006 擬似畦畔を検出した箇所にもあたる。図34では、第11 a層(図34-3層)及び第12 a層(図34-4層)が畦畔状に盛り上がっているのが確認できる。第11 a層上面を検出する際に、周囲の遺構面と同じ高さまで掘削した結果、第12 a層が露出したと思われる。第11 a層段階に、ここに畦畔があったことを示している可能性がある。

2区の南東部では、足跡(牛含む)や耕作痕跡が目立つ。第9 b層細砂～中砂と、第9 a層または第10 a層とみられる作土層が落ち込んでいる。断面観察の結果、その多くは第9 a層からのものと確認している。

第11-1 a層下面の遺構と遺物(図39～41)

第11-1 a層を除去した第11-2 a層上面において、第11-1 a層下面の遺構群を検出した。主に1区中央部の坪境周辺において、溝群を検出したほか、ピットもみられる。いずれも埋土が第11-1 a層に酷似しており、第11-1 a層段階に掘削されたものと判断できる。第11-2 a層灰色シルト混じり細砂～粗砂・小礫の上面で、第11-1 a層緑灰色粗砂～小礫を多く含む粘土～シルトを埋土とする遺構を検出しており、比較的認識しやすい状況であった。

291・292・296 溝は、坪境以東で検出した。291 溝は北東-南西方向で、幅約0.4 m、深さ約0.1 mである。南北方向の292・296 溝は、坪境箇所のすぐ東側に位置し、幅は0.4～0.8 m、深さは296 溝で一部0.1 m以上の箇所がみられるものの概ね0.1 m未満である。291 溝から土師器皿・煮炊具、須恵器、292 溝から土師器煮炊具、須恵器甕、296 溝から土師器杯、須恵器、瓦が出土している。

293・294 溝は、坪境箇所の西側に位置する。南北方向の293 溝は、坪境のすぐ西側に位置するが、調査区中央北寄り、一部が西側に湾曲している。この箇所は下層の第11-2 b層が厚く堆積して微高地となっており、その裾部に溝が掘削されている。幅約0.5 m、深さ約0.1 mである。294 溝は、北西-南東方向で、幅約0.3 m、深さ約0.1 mである。293 溝からは、土師器皿・煮炊具、黒色土器A類椀が出土している。黒色土器A類椀(123)は、見込みに暗紋を施した後、体部に圏線ミガキを施す。294 溝からは、土師器皿、須恵器が出土している。

290 ピットは、調査区西端部に位置し、径約0.3 m、深さ約0.1 mである。

なお、北側に接する(その8)調査区では、291 溝は191 溝、292 溝は189 溝、293 溝は188 溝、294 溝は187 溝である。

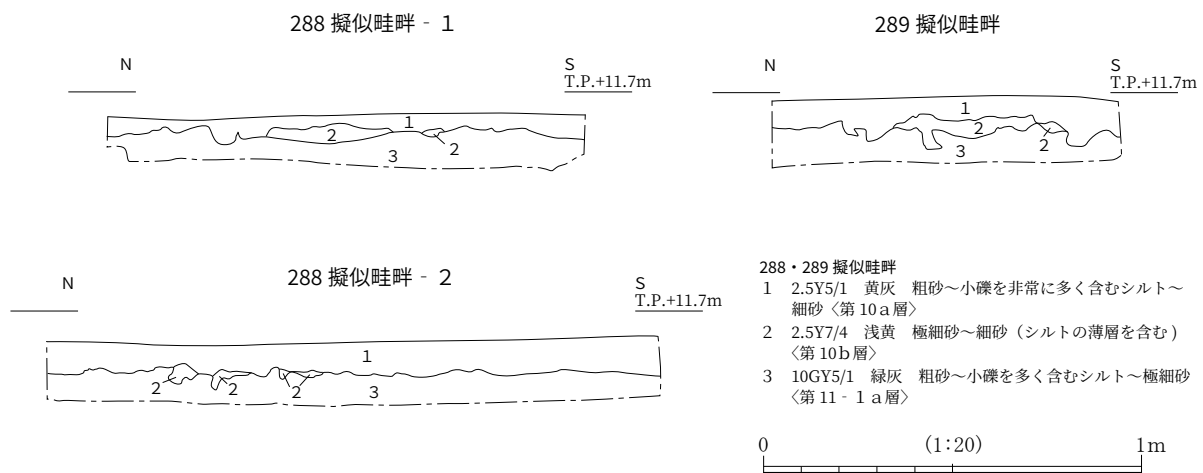
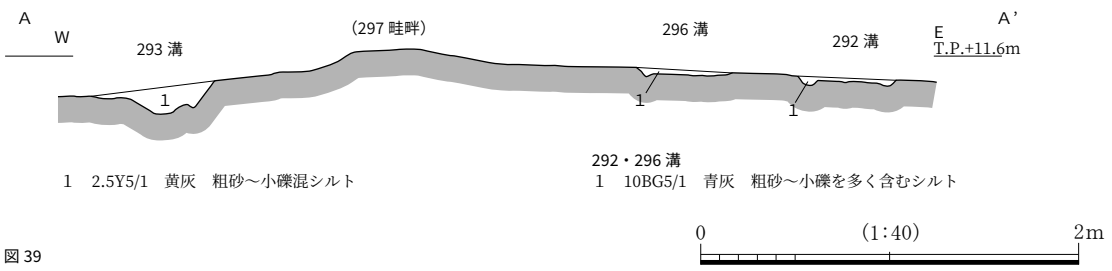
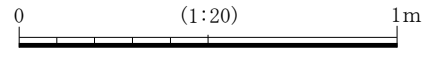
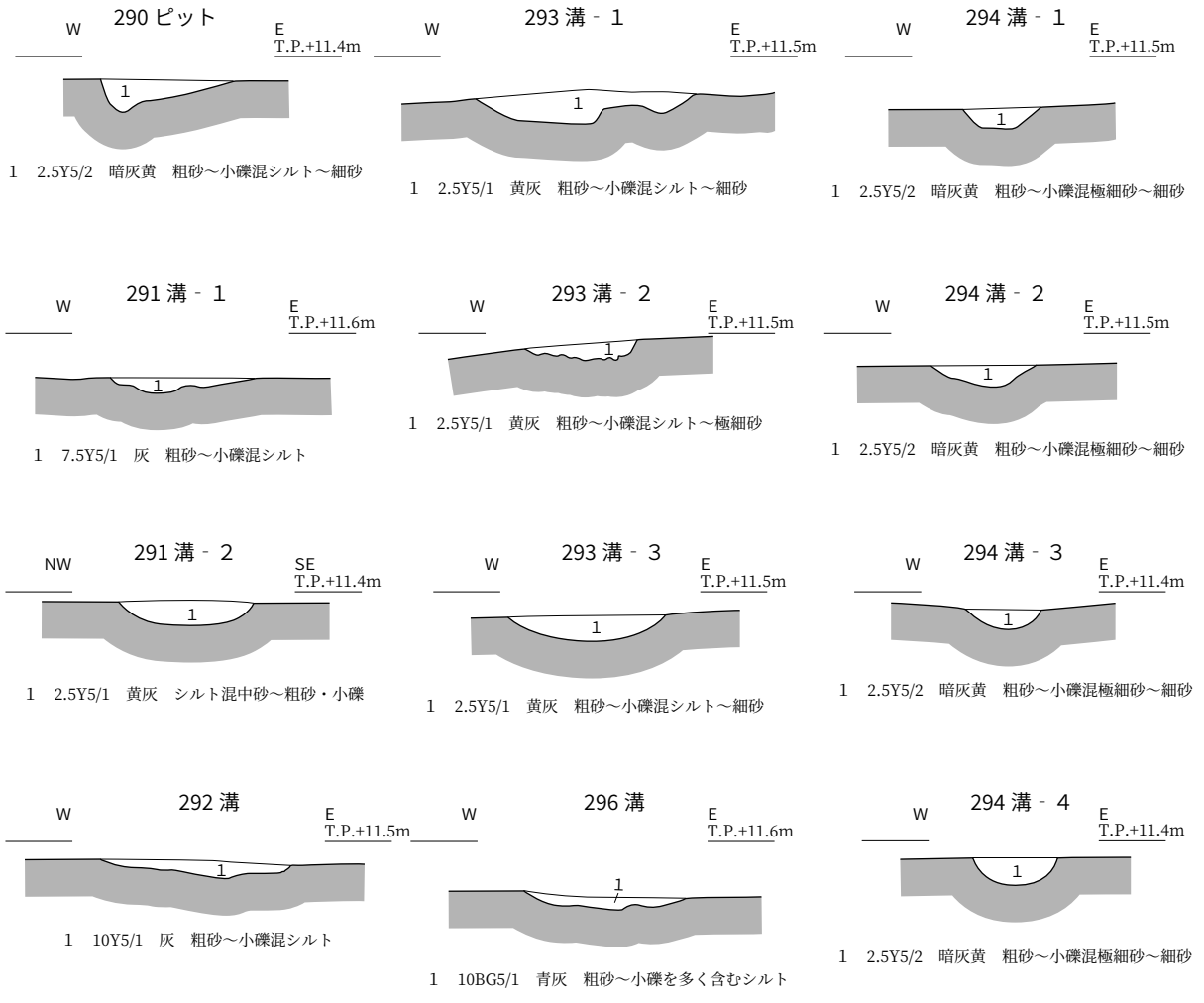


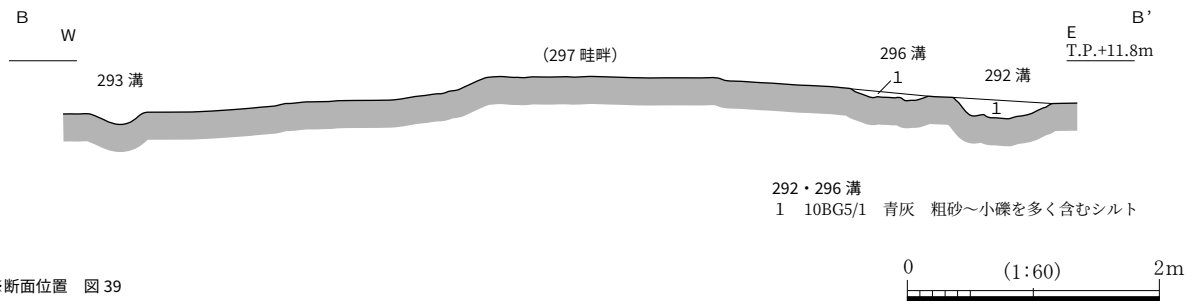
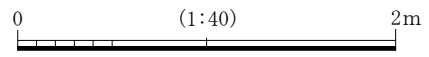
図38 第11-1 a層上面 擬似畦畔 断面図



図 39 第 11 - 1 a層下面、第 11 - 2 a層上面 平面図



※断面位置 図 39



※断面位置 図 39

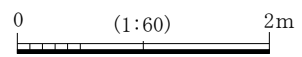


図 40 第 11 - 1 a 層下面 溝、ピット 断面図

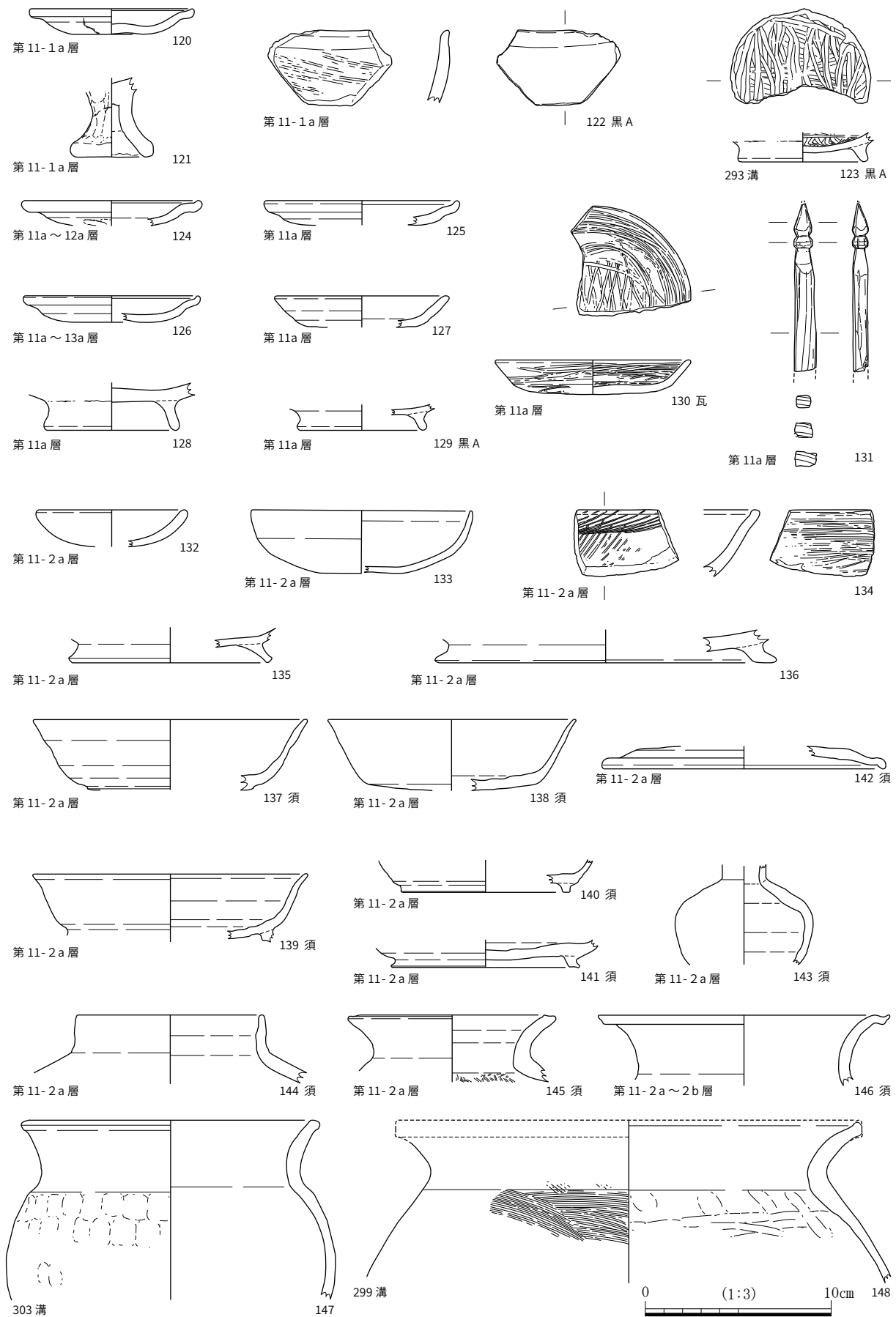


图41 第11 a層、第11-1 a層下面 293 溝、第11-2 a層下面 299・303 溝 出土遺物

第 11 - 1 a 層、第 11 a 層出土遺物 (図 41 図版 32)

1 区の第 11 - 1 a 層からは、土師器皿 (120)・脚 (121)・煮炊具、黒色土器 A 類椀、瓦器椀、須恵器杯・甕、弥生土器、瓦等が出土している。黒色土器 A 類椀 (122) は、器壁の厚いタイプである。全体として少量の細片ではあるが、瓦器椀はほとんど認められず、上位の層準に比べて古代のものが目立つ。そのなかで、ともに器壁の薄い、「て」字状口縁土師器皿と、口縁部が外反する土師器大皿がみられ、10 世紀を中心として 11 世紀の前・中葉までのものと思われる。黒色土器 A 類椀の出土ともあわせて、これらがこの層準の時期を示すものと考えるのが妥当であろう。

2 区の第 11 a 層からは、土師器皿 (124 ~ 127)、黒色土器 A 類椀 (129)、黒色土器 B 類椀、瓦器椀・皿、須恵器甕、木製品等が出土している。土師器 (128) は、鉢等の高台か。瓦器皿 (130) は、見込みに暗紋を施した後、体部に圏線ミガキを、底部外面にジグザグ状かと思われるミガキを施す。全体としてミガキは細めである。棒状の木製品 (131) は、先端を宝珠状に作り、もう一端は欠損する。幅の広い面が板目で、樹種同定の結果は、ヒノキである。「て」字状口縁土師器皿や瓦器椀がみられ、11 世紀後葉を中心とする時期のものである。1 区より新しいものが目立つが、前述したように、2 区では上層からの踏み込みや耕作痕跡が著しいことが原因であると思われる。散見される黒色土器片が、本来の時期を表すものと考えられる。

第 11 - 2 a 層上面の遺構 (図 8・39 図版 12・13)

第 11 - 1 a 層を除去した、第 11 - 2 a 層上面である。第 11 - 1 a 層段階の耕作に伴う攪拌により遺構面の遺存状況は良好ではないが、一部で畦畔を検出した。

1 区中央の坪境にあたる箇所は、上面の溝により削平されていたが、南北方向の 297 畦畔を検出し得た。幅約 1.4 m で、周囲の遺構面よりも約 0.1 m 高い。坪境畦畔と思われる。調査区中央北寄りでは、第 11 - 1 a 層上面と同様に第 7 a 層上面の溝で削られてはいるものの、西側に拡張して幅が広がっている。母材となる第 11 - 2 b 層が厚く堆積している箇所にあっており、その影響と思われる。

第 11 - 2 a 層出土遺物 (図 41)

土師器皿 (132)・杯 (133・134)・羽釜、黒色土器 A 類椀、須恵器杯 (137 ~ 141)・蓋 (142)・壺 (143・144)・甕 (145・146)、弥生土器、瓦等が出土している。特に土師器を中心に、摩耗した小細片が比較的多く出土している。古墳時代や 9 ~ 10 世紀代のものも少量含まれるが、7 世紀、8 世紀のものが多い印象である。

第 8 項 第 12 a 層上面 (第 11 - 2 a 層下面)

第 11 a 層を除去した、第 12 a 層上面である。第 11 a 層段階の耕作に伴う攪拌が及んでおり、遺構面の遺存状況は良好ではない。ただし、1 区中央部分では、第 11 - 2 b 層が比較的厚く遺存しており、それに被覆された遺構面を非常に良好な状態で検出し得た。

第 11 - 2 b 層は、明褐色細砂 ~ 粗砂・小礫である。層厚は、薄い箇所では数 cm、最も厚い箇所では約 0.4 m である。第 12 a 層は、青灰色粗砂混じりシルトである。厚さは約 0.2 m であるが、1 区中央部の第 13 - 1 a 層上面溝群の直上にあたる箇所では、数 cm と薄く、砂質が強い。

第 12 a 層の上面は、1 区で T.P. 11.2 ~ 11.4 m、2 区で T.P. 11.6 m と、東に向かって高くなる。北側に接する (その 8) 調査区の第 12 a 層上面に対応する。

第 11 - 2 a 層下面の遺構と遺物 (図 41 ~ 44 図版 32)

第 11 - 2 a 層を除去した第 12 a 層上面において、第 11 - 2 a 層下面の遺構群を検出した。埋土が第 11 - 2 a 層に酷似しており、第 11 - 2 a 層段階に掘削されたと考えられる。第 12 a 層青灰色粗砂混じりシルト上面での、第 11 - 2 a 層灰色シルト混じり細砂～粗砂・小礫を埋土とする遺構の検出であり、認識しやすい状況であった。特に、1 区中央北寄りの第 11 - 2 b 層が厚く遺存している範囲では、埋土に第 11 - 2 b 層明褐色細砂～粗砂・小礫をより多く含む。また、第 12 a 層上面には、第 11 - 2 a 層及び第 11 - 2 b 層が充填している、鋤等のものと思われる平面長方形の耕作痕や足跡が非常に多くみられた。溝の肩部や底面を中心に、遺構内部にも鋤等のものと思われる掘削時の痕跡が明瞭に残されていた。

1 区西部において、溝のほか、土坑、ピットを検出した。

坪境周辺では、南北方向の溝を検出した。坪境西側には、303・304・327 (南北部分)・335 溝がある。303・335 溝は、幅約 0.4 m、深さ 0.1 m 未満である。第 11 - 2 a 層上面 297 畦畔 (坪境) の西裾部に沿って掘削されており、第 12 a 層上面の 339 畦畔 (坪境) を削平している。304 溝は、幅約 0.5 m、深さ約 0.1 m である。327 溝は、幅 0.7 ~ 1.2 m、深さ 0.1 m 未満である。304 溝は、南端部が 303 溝と重複しており、303 溝の方が新しい。303 溝から土師器甕 (147)、須恵器甕が、304 溝から土師器、須恵器蓋・甕、327 溝から土師器、須恵器が出土している。

坪境東側には、299・305・326・333 溝がある。299 溝は幅 0.7 ~ 0.9 m、深さ約 0.1 m、305 溝は幅約 0.5 m、深さ約 0.1 m である。299 溝と 305 溝は、南部で一部が重複しており、299 溝の方が新しい。299 溝は、第 12 a 層上面の 340 畦畔の東肩部を削平している。326 溝は幅約 0.3 m、深さ 0.1 m 未満である。333 溝は、幅約 1.0 m、深さ 0.1 m 未満である。299 溝から土師器杯・甕 (148)、須恵器甕、瓦が、305 溝から土師器煮炊具、326 溝から土師器が出土している。

そのほかの南北方向の溝として、坪境以西に 311・329・337 溝がある。311 溝は幅約 1.3 m、329 溝は幅 1.3 m 以上で、どちらも深さ 0.1 m 未満である。337 溝は、幅約 1.1 m、深さ 0.1 m 未満である。東西方向の 327・334 溝との新旧関係は不明である。311 溝から、土師器が出土している。

東西方向の溝は、坪境以西で 302・309・310・327 (東西部分)・336 溝を検出した。336 溝は幅約 0.5 m、327 溝は幅 0.4 ~ 1.1 m で、どちらも深さ 0.1 m 未満である。327 溝東部が北に湾曲しているのは、第 11 - 2 b 層の厚い堆積により第 11 - 2 a 層上面の 297 畦畔 (坪境) が西に拡張している箇所にあたっているためと考えられる。327 溝の西部は、第 12 a 層上面 341 畦畔と重複し、削平している。309 溝は幅 0.7 ~ 1.2 m、310 溝は幅約 0.9 m で、どちらも深さ 0.1 m 未満である。302 溝は、幅 2.0 ~ 2.5 m、深さ 0.1 m 未満である。いずれも上位の遺構面及び第 12 a 層上面において東西畦畔を検出した箇所と重なるか近接する位置にあたっている。334 溝は、坪境の両側で検出した。幅約 0.6 m、深さ 0.1 m 未満である。309 溝から土師器甕、須恵器、310 溝から土師器の小片が出土している。

調査区北部の坪境東側では、正方位ではない溝を検出した。332 溝は、調査区北端から南へ約 8.1 m の地点までは、やや湾曲しながらも坪境に沿って南北方向を指向しているが、その南端から北東方向へ V 字状に屈曲している。幅約 0.4 m、深さ 0.1 m 未満である。328 溝は、332 溝の北東 - 南西方向部分と重複しており、332 溝より新しい。幅約 0.5 m、深さ 0.1 m 未満である。331 溝は、328・332 溝の南東側に並行しており、幅約 0.7 m、深さ約 0.1 m である。328・332 溝と 331 溝間は約 1.5 m であり、遺構検出面である第 12 a 層の上面がやや高くなっていた。第 12 a 層上面の調査完了後に断面観察を

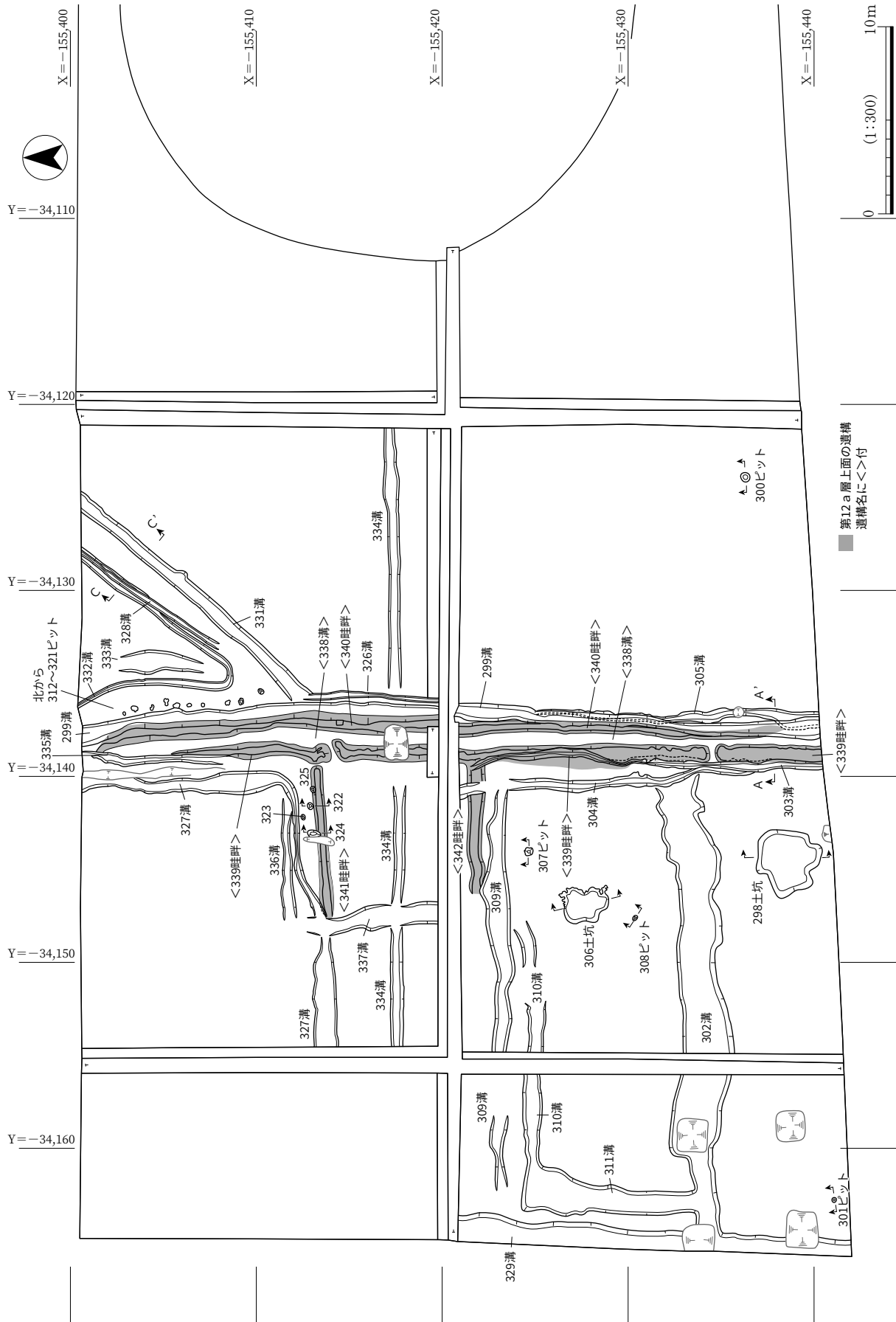


図 42 第 11 - 2 a 層下面 (第 12 a 層上面) 平面図

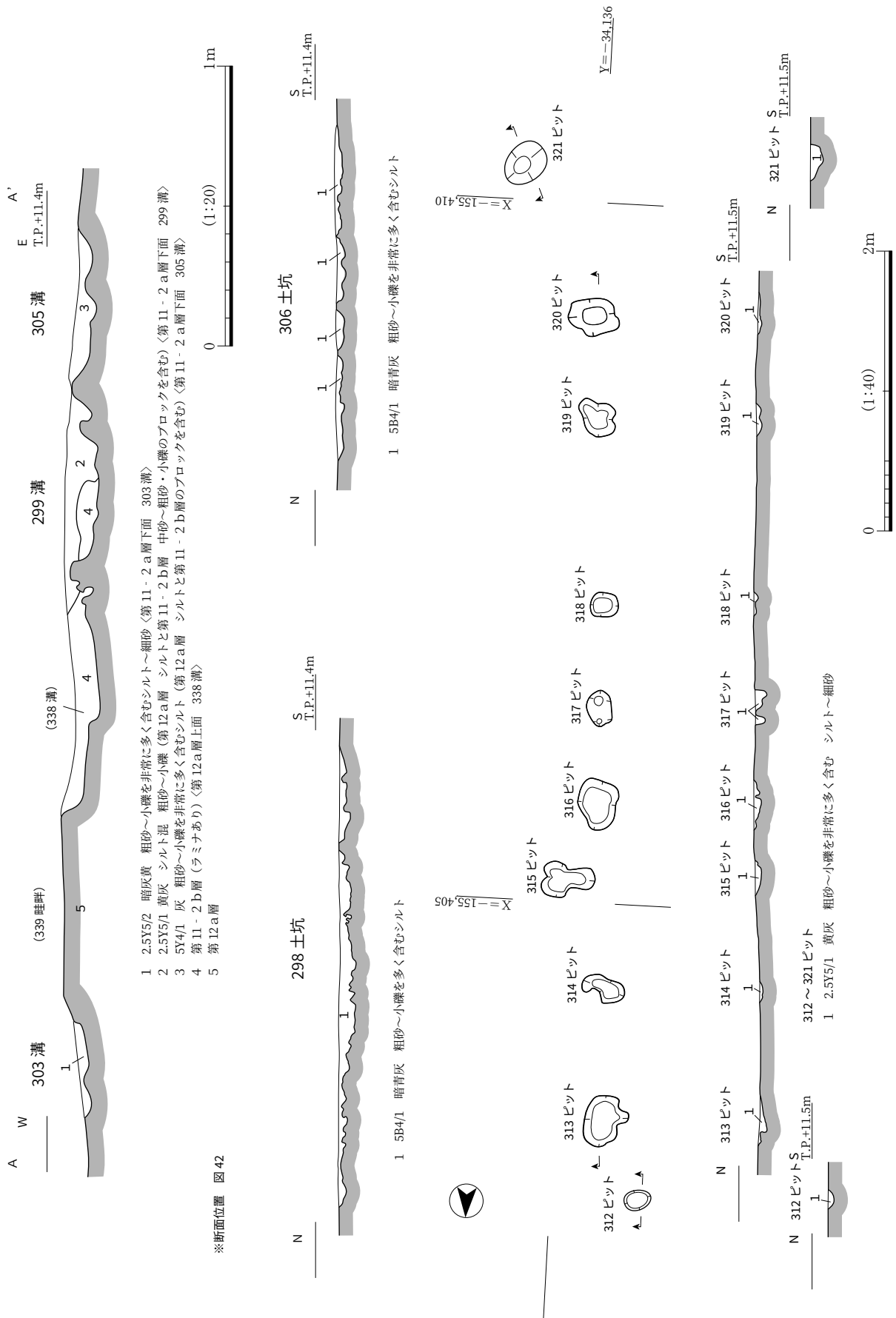


図 43 第 11 - 2 a層下面 溝、土坑、ピット列 平面・断面図

した結果については後述する。なお、これらの溝内には、掘削の際に使用されたとと思われる道具の痕跡が明瞭に残っていた。周囲の第12 a層上面には、平面長方形の痕跡が多数みられ、鋤等が使用されたと考えられる。主に第11 - 2 b層で充填されており、溝と同じ北東 - 南西方向に列状に並ぶ。328・332溝は、北側に接する（その8）調査区の198溝、331溝は（その8）調査区の199溝にあたる。328溝から、土師器杯、須恵器杯・甕が出土している。

298・306土坑は、調査区南部に位置する。不定形で、どちらも深さは0.1 m未満である。298土坑から、土師器、須恵器甕が出土している。306土坑から、土師器、須恵器杯・甕が出土している。

300・301・307・308ピットは、調査区南部に位置する。径0.2～0.5 m、深さ0.1～0.3 mである。312～321ピットは、299溝の東側に接する位置に、南北方向に並ぶ。長径0.2～0.4 mの不整な楕円形で、深さは0.1 m未満である。第7 a層上面79溝東部遺構群と同様なものである可能性がある。322～325ピットは、327溝が北側に湾曲している箇所南側で検出した。不整な楕円形または円形で、長径0.3～0.6 m、深さ約0.1 mである。300ピットから土師器、307ピットから須恵器蓋、312ピットから須恵器杯、315・316・321ピットから土師器が出土している。

なお、図39に位置を示したが、第12 a層上面の調査中に、長さ30 cm程度の石を検出した。断面観察の結果、第11 - 2 a層段階のものと判明している。

遺構出土遺物は少量の小片であり、詳細な時期は不明であるが、古代のものが含まれている。

第12 a層上面の遺構（図8・42・45～48 図版13～17）

1区中央北寄りには第11 - 2 b層が比較的厚く遺存しており、それに被覆された遺構面は非常に良好な状態であった。南北方向の畦畔2条と溝、東西方向の畦畔2条を検出した。

南北方向の339・340畦畔は、1区中央部で並行している。西側の339畦畔は幅約0.8～0.9 m、高さ約0.2 m、東側の340畦畔は幅約1.0 m、高さ約0.1 mである。両畦畔間は幅約1.0 mの溝状で、第11 - 2 b層に覆われている。その位置と規模から、坪境畦畔と水路であると思われる。水路部分を338溝とする。両畦畔ともに、338溝側ではない方の肩部分は、第11 - 2 a層下面の溝群により削平を受けている。また、畦畔の頂部は、調査区中央北寄りの第11 - 2 b層に被覆されている範囲以外では、第11 - 2 a層段階に削平を受けている。

338溝は、339・340畦畔（坪境）間の溝である。最下層は厚さ0.1 m未満の青灰色シルトと極細砂

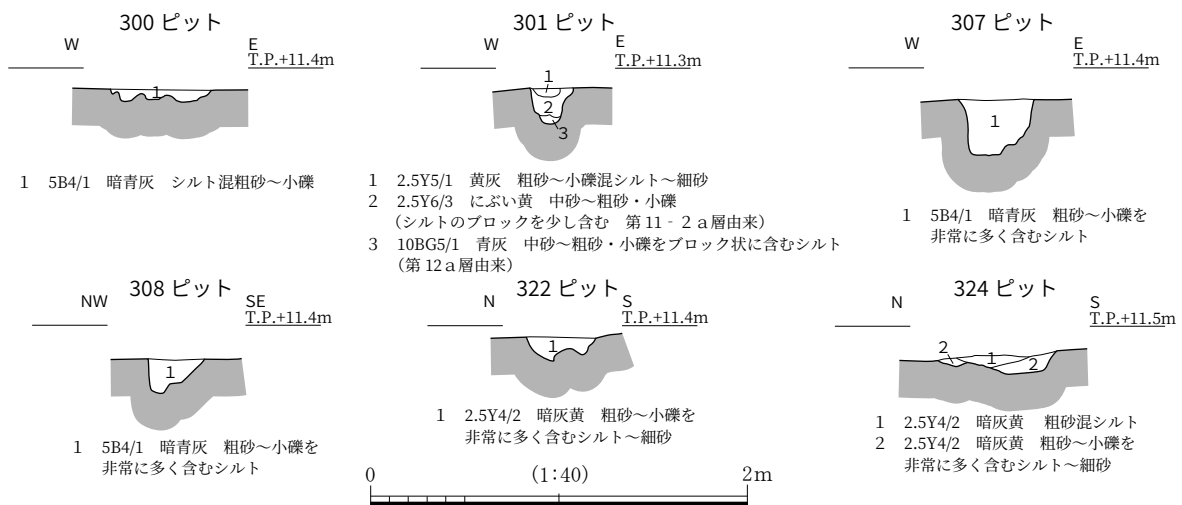


図44 第11 - 2 a層下面 ピット 断面図

～細砂の薄層の互層、それ以上は上方粗粒化する明褐色中砂～粗砂・小礫の、第11-2b層により埋没している。

東西方向の341・342畦畔は、坪境以西で検出した。幅約0.6m、高さ0.1m未満で、8.1～8.6mあけて並行しており、坪内を区画する畦畔であると思われる。検出長はそれぞれ約8.7m、約6.7mで、西側は第11-2b層が遺存しておらず、第11-2a層段階に削平を受けている。どちらの畦畔も、東端が339畦畔（坪境）に接続している。

畦畔の水口は、339畦畔（坪境）で2箇所、341畦畔で1箇所検出した。いずれも第11-2b層で被覆されていた。

339畦畔（坪境）の水口1は、341畦畔との接続箇所のすぐ南側である。上端の幅で約0.9m、畦畔頂部との比高は約0.2mで、水田面及び338溝底面とはほぼ同じ高さである。南部に位置する水口2は、上端の幅で約0.6m、畦畔頂部との比高は約0.1mで、水田面及び338溝とはほぼ同じ高さである。342畦畔から南に約12.7mであり、東西方向の畦畔がほぼ同じ間隔で設けられていたとすれば、そのやや南にあたる位置である。東側が高い地形であり、どちらの水口も坪境以西に水を供給していたと考えられる。

341畦畔の水口は、339畦畔（坪境）との接続箇所に設けられている。上端の幅で約0.5m、339畦畔（坪境）との比高は約0.2m、341畦畔との比高は数cmである。水口の中央に、比較的平らな面を上にして、石が据えられていた。石は、長さ約20cm、幅約10cm、厚さ約10cmで、上面から数cm以下は第12a層に埋まっていた。

調査区北部の坪境東側において、第11-2a層下面に帰属する、北東-南西方向の328・332溝と331溝（図42）を検出している。並行する両者の間は約1.5mであるが、遺構検出面である第12a層の上面が周囲に比べて数cm程高くなっていた。この部分を断ち割った断面図が、図47最下段の断面図である。第12a層は、上層が青灰色粗砂～小礫混じりシルト、下層が青灰色シルトに分けられるが、この溝間にのみ、両層の間に厚さ約0.1mの青灰色粗砂～小礫を非常に多く含むシルト層がみられた。断面観察のみで平面範囲等を確認しておらず、詳細を明らかにし得ないが、第12a層段階に盛土等が施された可能性が考えられる。第11-2a層段階に、その範囲と対応する位置に溝が掘削されていることは、その段階までその高まりの範囲が残っていたことを示している。

また、1区東西断面（図8）では、340畦畔（坪境）から東へ約7.1mの地点まで、第11-2b層が遺存している。つまりこの範囲の第12a層上面は第11-2b層に被覆され、第11-2a層段階の削平を受けていない。第12a層上面の高さは、畦畔東側でT.P.11.3m、第11-2b層遺存範囲東端でT.P.11.4mで、約5.8mの距離で約0.1mの比高がある。このことのみで判断することはできないが、坪境以東では水田は営まれていなかった可能性もある。なお、342畦畔の坪境を挟んだ東側には第11-2b層がみられ、上位の遺構面と同様にその延長上に同方向の畦畔があるのならば検出し得た状況であったが、認められなかった。

2区では、第11b層は遺存しておらず、第12a層上面に第11-2a層段階の耕作に伴う攪拌が及んでいる。調査区北部で1008擬似畦畔を、東部で1009擬似畦畔を検出した。第12a層青灰色粗砂～小礫を含むシルトの上面には、第11a層灰色粗砂混じりシルト～細砂の耕作痕や足跡がみられる。そのなかで、耕作痕等がみられないシルト質の強い範囲が幅0.3～0.5mの帯状に認められた。断面観察の結果、第11a層段階の攪拌が周囲と同じ深さまで及んでいない、擬似畦畔であることを確認した。

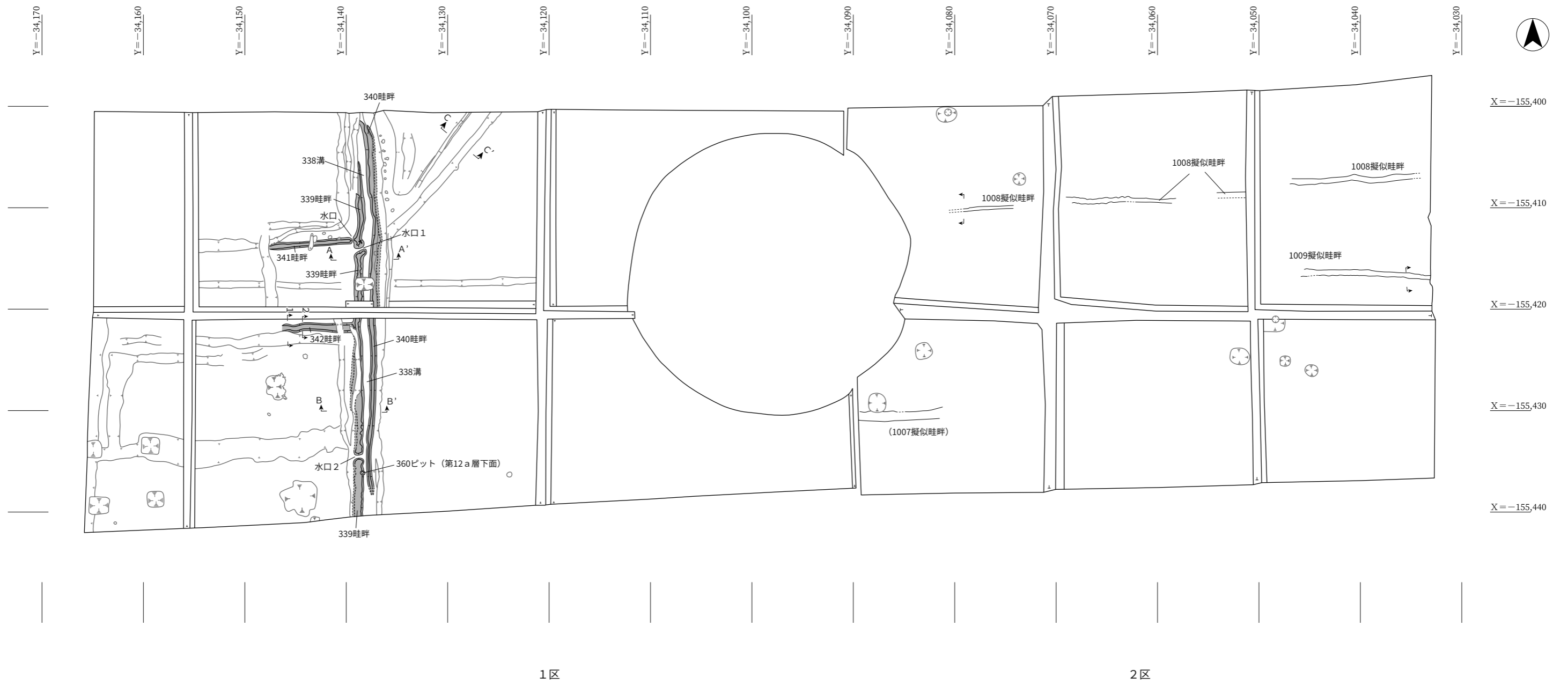
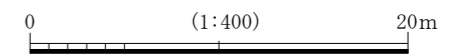


図45 第12 a層上面 平面図



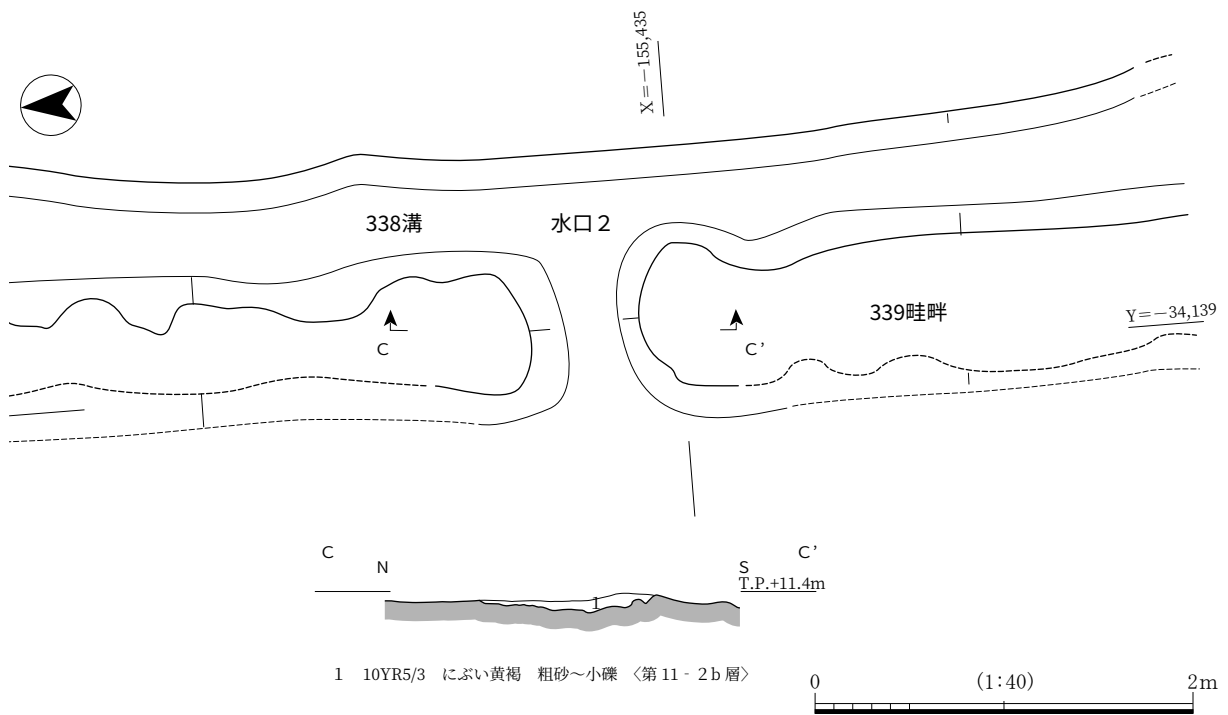
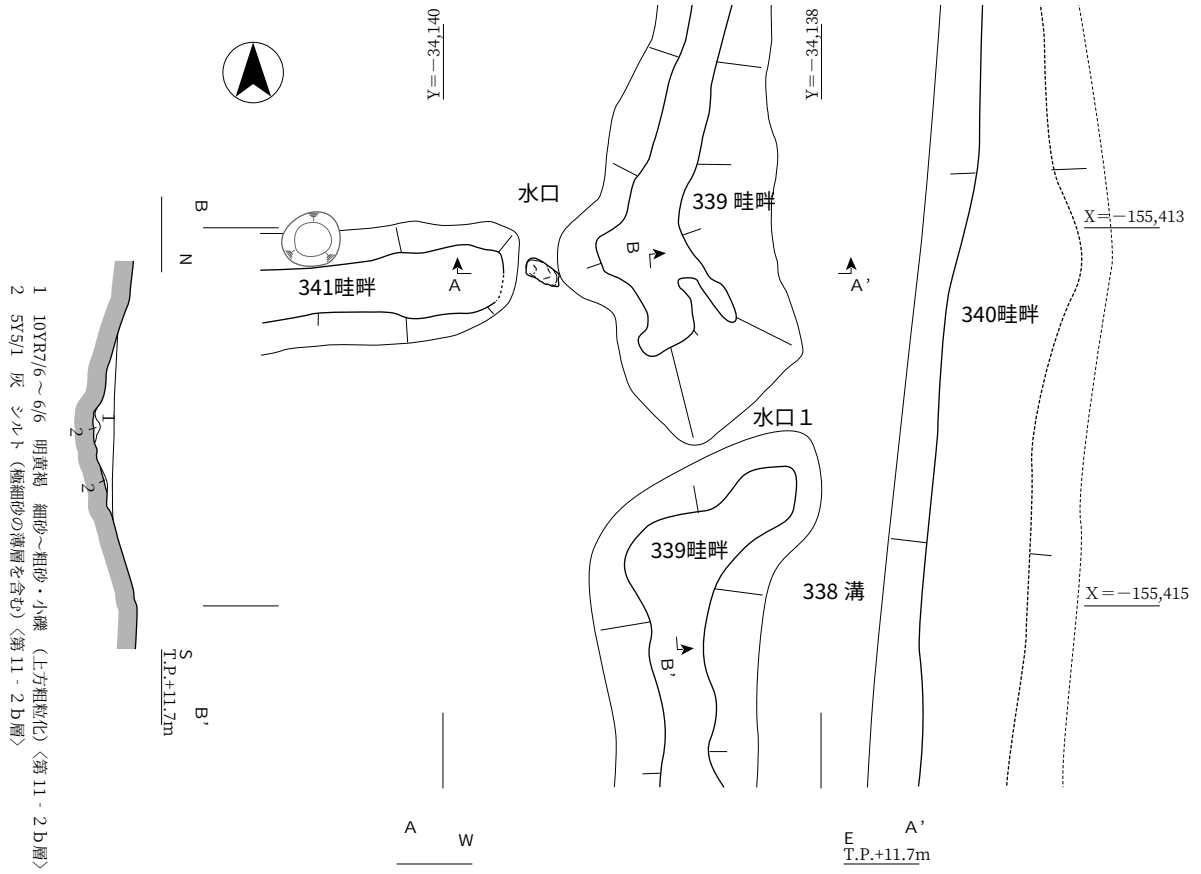
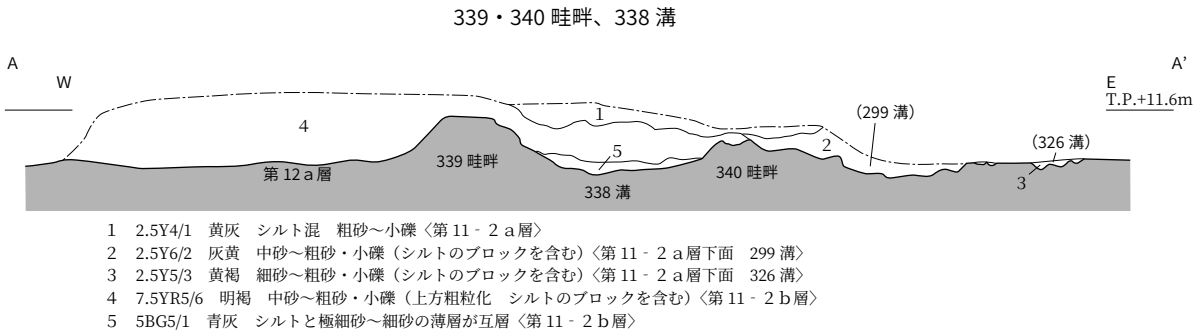
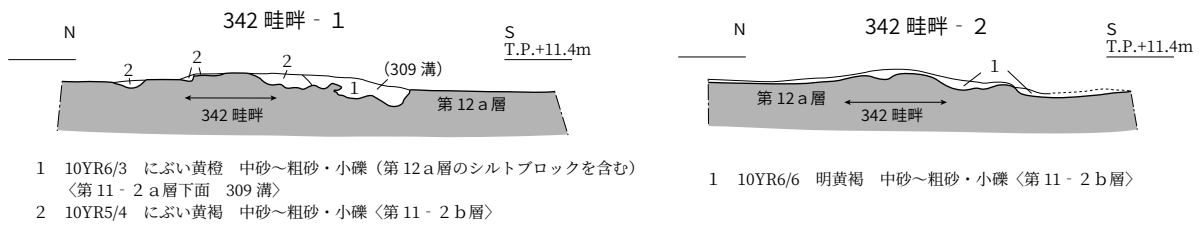
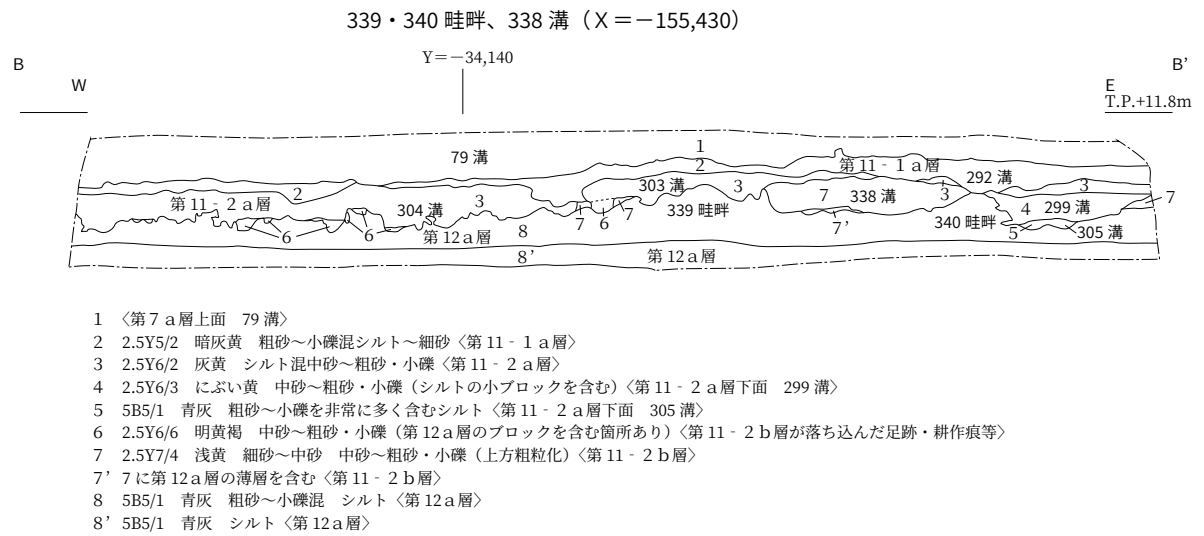


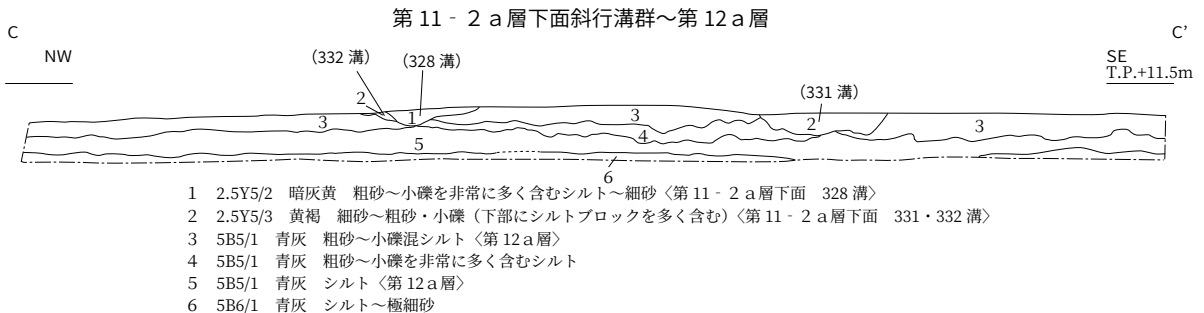
図46 第12 a層上面 畦畔水口 平面・断面図



※断面位置 図45



※断面位置 図45



※断面位置 図42・45

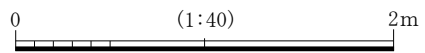


図47 第12a層上面 畦畔、溝、第11-2a層下面 溝～第12a層 断面図

ここに第11 a層段階に畦畔が存在したことを示している可能性がある。それぞれ1区の上位の遺構面において検出した、東西方向畦畔の延長線上にあたる。1008 擬似畦畔と1009 擬似畦畔の間は、約9.6 mである。なお、第11 a層上面で1007 擬似畦畔を検出した箇所でも同じ状況がみられた。東西方向に歩行したとみられる牛の足跡も確認している。

第12 a層下面の遺構 (図45)

第12 a層を除去した、第13-1 a層上面で、360ピットを検出した。埋土が第12 a層と酷似しており、第12 a層段階に掘削されたと思われる。第12 a層上面の339 畦畔 (坪境) 東肩部にあたる。径0.4 mである。遺物は出土していない。

第11 - 2 b層、第12 a層出土遺物 (図49 ~ 51 図版33・34)

第11 - 2 b層からは、土師器把手 (151)、須恵器杯蓋 (150) が出土している。338 溝 (坪境) を埋

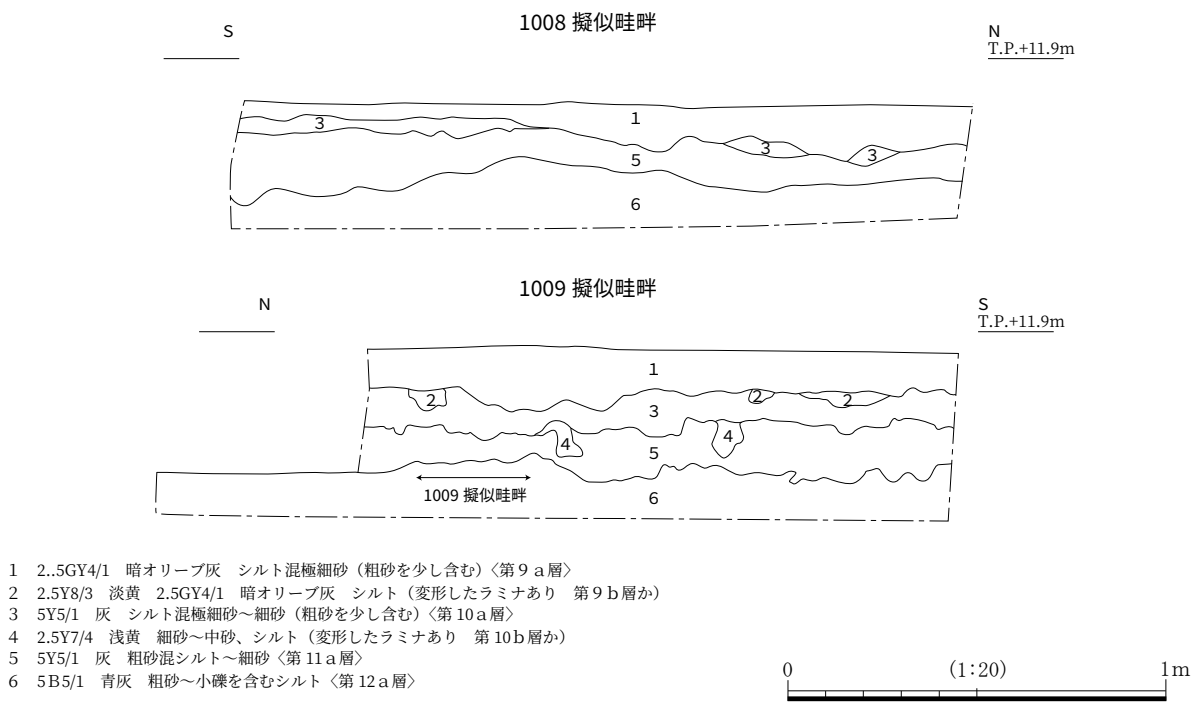


図48 第12 a層上面 擬似畦畔 断面図

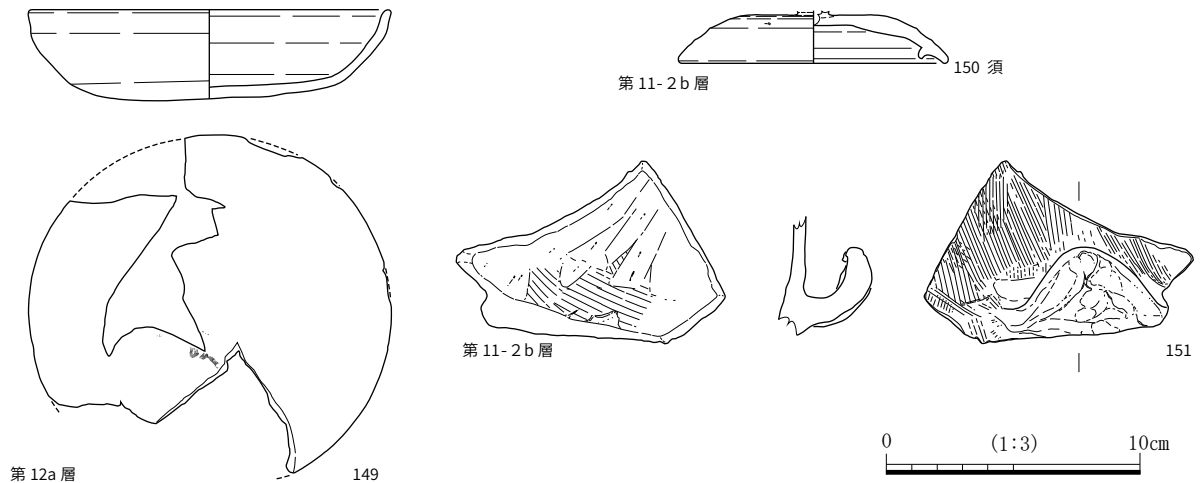
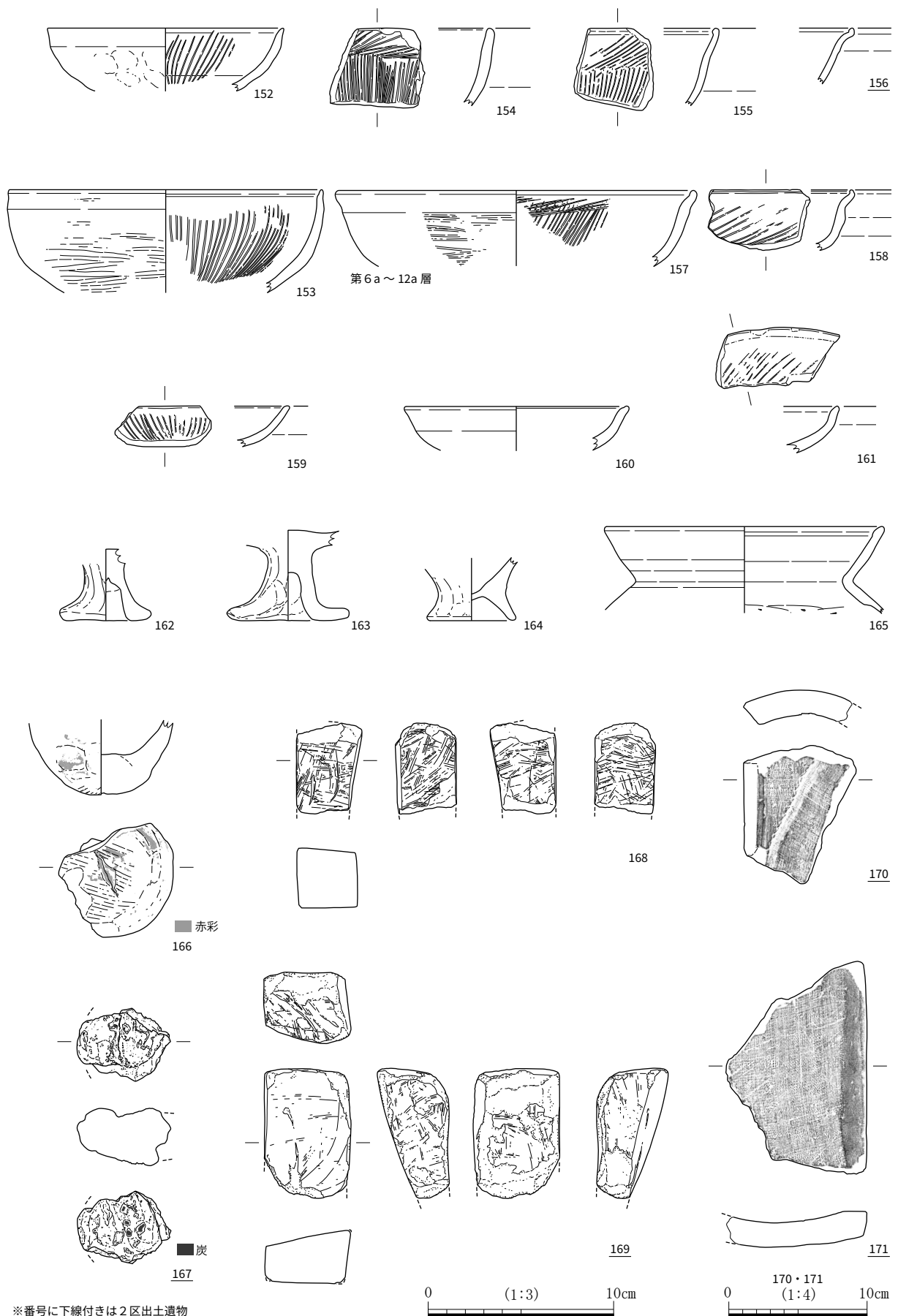


図49 第11 - 2 b層、第12 a層 出土遺物



※番号に下線付きは2区出土遺物

図50 第12a層 出土遺物(1)

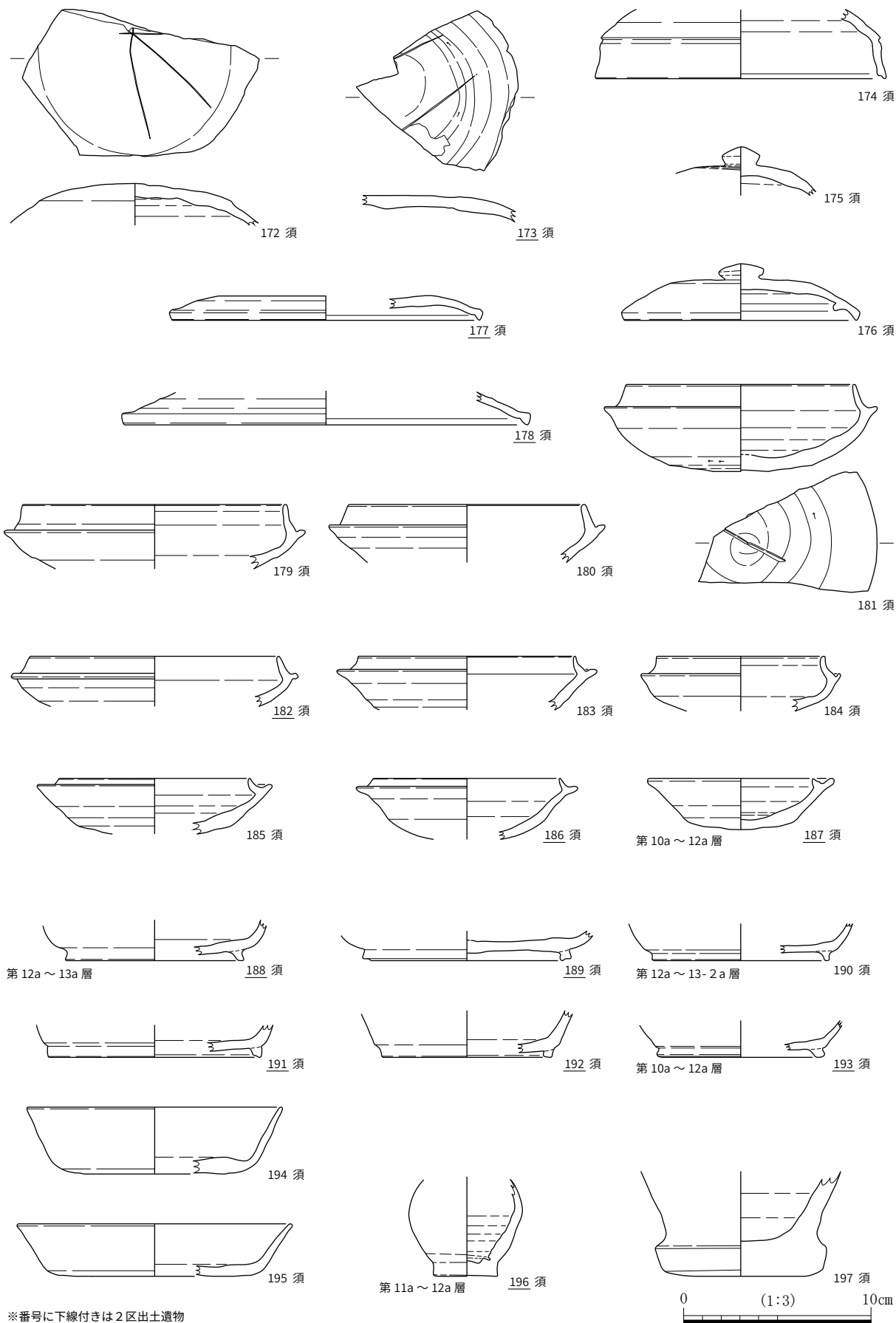


図51 第12a層 出土遺物(2)

積する第 11-2 b 層からは、土師器片が出土しているが、少量の小片で詳細な時期がわかるものはない。なお、土師器皿（149）は、墨痕が薄く判読はできないが、底部外面に墨書がある。12 世紀前葉のものであり、第 12 a 層掘削時に出土したが、上層段階のものと思われる。出土地点は、1 区北西部の 2 J - 6 b 地区で、埋納された可能性も考えられる。

1 区の第 12 a 層からは、土師器杯・皿・甕（165）・脚（162～164）、須恵器杯（179～181・183～185・190・194・195）・杯蓋（172・174～176）・高杯・甕・鉢（197）、弥生土器、砥石（168）、叩き石、サヌカイト石鏃・剥片等が出土している。土師器の破片が多く、上位の層準で散見された瓦片はみられない。土師器杯（152～155・157～160）・皿（161）には、内面に 1 段または 2 段の放射状暗紋が施されるものがみられる。土師器底部（166）の外面には色素が付着しており、赤彩の可能性がある。須恵器杯蓋（172）は天井部外面にヘラ記号を持つ。6～8 世紀のものがみられ、7 世紀、8 世紀のものが多い。

2 区の第 12 a 層からは、土師器皿・杯（156）・高杯・煮炊具、黒色土器 A 類椀、須恵器杯（182・186～189・191～193）・蓋（177・178）・高杯・壺（196）・甕、灰釉陶器、製塩土器、瓦、弥生土器、縄紋土器、鉄滓、砥石（169）、サヌカイト石鏃・剥片等が出土している。須恵器杯蓋または杯（173）は、外面にヘラ記号を持つ。丸瓦（170）と平瓦（171）は、凹面に布目がみられ、丸瓦には布の合わせ目痕がある。不定形滓（167）は、椀形滓が壊れたものの可能性がある。炭を多く含有し、非常に重量感があり、磁着度も高い。1 区とは異なり、瓦片がみられ、黒色土器 A 類椀等やや新しい時期のものが含まれている。6～9 世紀のものがみられる。

第 9 項 第 13 - 1 a 層上面、第 13 - 2 a 層上～下面

第 13 a 層は、1 区西部では、第 13 - 1 a 層、第 13 - 2 a 層の 2 層に分層した。第 13 - 1 a 層は、灰色粗砂～小礫混じりシルト、第 13 - 2 a 層は、灰色シルト～極細砂である。質は比較的似ているが、第 13 - 2 a 層の方がより暗色である。第 13 - 1 a 層上面には 1 区中央部に溝群があり、その東側では第 13 a 層を 2 層に分けることは難しくなる。

第 13 - 1 a 層、第 13 - 2 a 層、1 区東部から 2 区の第 13 a 層は、いずれも暗色を呈する土壤層で、その直下は第 13 b 層である。直上は第 12 a 層であり、堆積層に被覆されてはいない。断面観察において、それぞれの土壤層上面、または層中から掘削されたとみられる遺構が認められたが、暗色の土壤層上面での検出は難しいことが予想された。ただ、第 13 - 1 a 層上面の溝群については、特に調査区北部では比較的浅いものが多く、第 13 b 層上面まで掘り下げた段階では検出することができない。そのため、第 13 - 1 a 層上面で調査を行なった。

1 区では、続いて第 13 - 1 a 層を除去した第 13 - 2 a 層上面でも調査を行なったが、さらに暗色の強い土壤層上面における遺構検出では、有益な成果を得ることはできなかった。2 区ではそれを踏まえ、第 13 a 層上面では精査確認は実施したが、遺構掘削まではせず、第 13 a 層を除去した下面（第 13 b 層の上面）において調査を行なった。

第 13 a 層が 2 層に分かれない 2 区では、1 区の第 13 - 1 a 層段階に対応する遺構と、第 13 - 2 a 層段階に対応する遺構を、同一遺構面で検出している。第 13 - 1 a 層上面平面図に、2 区の第 13 a 層段階の平面図を接合していないのは、単に紙幅の都合である。

第 13 - 1 a 層は厚さ 0.1 m 未満で、その上面は 1 区西部で T.P. 11.0 m である。第 13 - 2 a 層は、厚

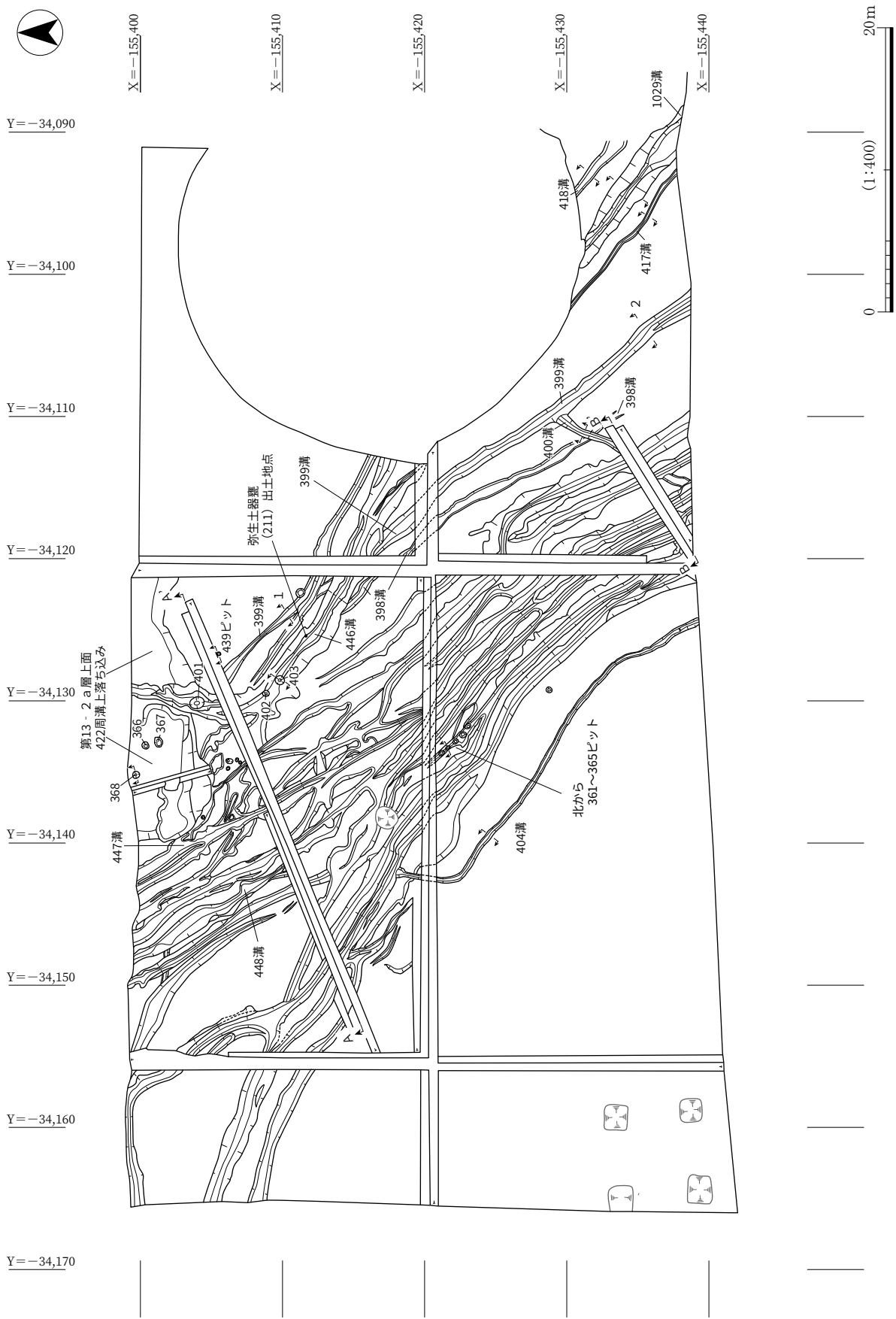


図52 第13 - 1 a層上面 平面図

さ 0.1～0.2 mで、その上面は T.P. 10.9～11.1 mである。2 区の第 13 a 層は、厚さ 0.1～0.2 mで、その上面は T.P. 11.4～11.5 mである。

第 13 - 1 a 層上面は、北側に接する（その 8）調査区の第 13 - 1 a 層上面、第 13 - 2 a 層上面は、（その 8）調査区の第 13 - 2 a 層上面と対応する。西側に接する（その 6）調査区では、第 11 a 層が第 13 a 層と対応する。

第 13 - 1 a 層上面の遺構と遺物（図 52～60・75・76 図版 18～20・34～36）

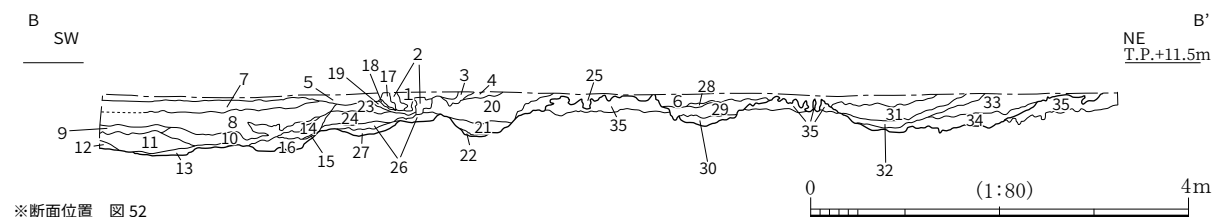
第 12 a 層を除去した、第 13 - 1 a 層上面である。1 区で、北西 - 南東方向の溝群を検出した。

1 区中央部では、北西 - 南東方向の幅 10～20 m の範囲がやや低くなっている。特に南東部は、幅約 10.4m、深さ 0.1～0.2m で、北西部に比べて狭く深い。その底面において、複数の溝が認められた。

ほとんどの溝が北西 - 南東方向を指向している。規模は様々で、幅は 0.5 m 程度から 2 m を越えるものがみられ、深さは 0.1～0.5 m である。埋土は、粗砂～小礫を多く含むシルト等で、ラミナのみられる箇所もあるが、全体として顕著ではない。溝は、南東部で深く、北西部で浅い。底面のレベルは、南東端と北西端でも大差はないが、やや北西側が低い。

溝群の上部、つまり上述の幅 10～20 m 範囲には、砂を多く含むがシルトを主体とする層群が埋積している。これらの層群を「溝群上層」とした。1 区東西断面（図 8）の 57・74・75・78～83 にあたる。さらに、その直上には、砂を主体とする層群が堆積していた。これらの層群を「溝群最上層」とした。最上層は、大きくふたつに分けられる。上部は、ラミナが顕著に認められる細砂～粗砂・小礫や、粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂等の層群で、図 8 の 50～52 にあたる。下部は、シルト～極細砂を主体とする層群で、図 8 の 58～73 にあたる。これらの層群の直上は第 12 a 層であり、その母材となっている。なお、遺物の取り上げも、「溝群上層」、「溝群最上層」として行なったが、層理面の凹凸が著しく、厳密には掘り分けられていない。

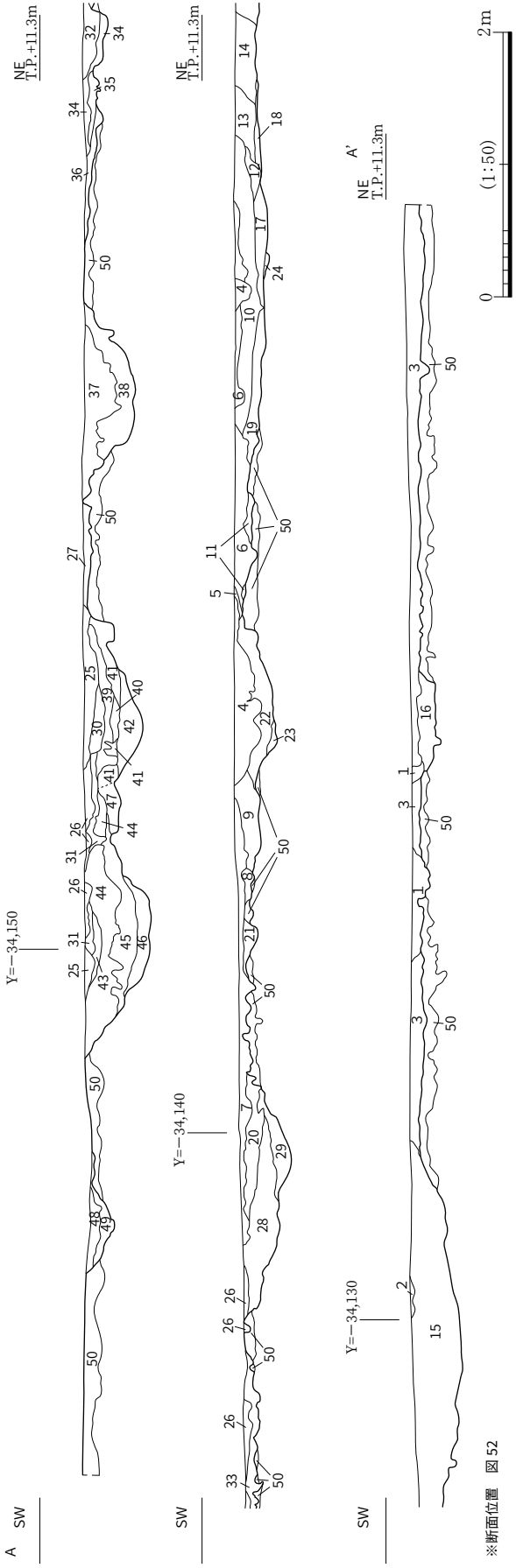
溝の新旧関係については、断面観察により一部（図 53 西部）で切りあい関係を確認したが、ほとんど認められない。特に南東部では、比較的整然と並行している。新旧関係の存在を否定することはでき



※断面位置 図 52

- | | |
|---|---|
| 1 7.5GY5/1 緑灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂 | 18 5Y7/2 灰白 極細砂（シルトを含む ラミナあり） |
| 2 10GY5/1 緑灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂 | 19 5BG5/1 青灰 粗砂～小礫混シルト |
| 3 2.5Y7/4 浅黄 中砂～粗砂・小礫（シルトのブロックを含む） | 20 10G5/1 緑灰 粗砂～小礫混シルト |
| 4 5Y4/1 灰 シルト～極細砂 | 21 7.5Y5/1 灰 粗砂～小礫を多く含むシルト |
| 5 5Y4/1 灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂 | 22 5B4/1 暗青灰 シルト |
| 6 5Y4/1 灰 粗砂～小礫を多く含むシルト | 23 5G5/1 緑灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂 |
| 7 10Y4/1 灰 粗砂～小礫混シルト | 24 10Y5/1 灰 粗砂～小礫混シルト（シルトのブロックを含む） |
| 8 10Y5/1 灰 粗砂～小礫混シルト | 25 10Y5/1 灰 粗砂～小礫を含むシルト |
| 9 10G5/1 緑灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂（5PB4/1 暗青灰
シルトの小ブロックを含む） | 26 N6/0 灰 シルト混中砂～小礫（シルトの薄層と極細砂の薄層あり） |
| 10 5Y5/1 灰 シルト混細砂～粗砂・小礫（5PB4/1 暗青灰
シルトの小ブロックを含む） | 27 5B5/1 青灰 シルト |
| 11 10BG5/1 青灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂 | 28 5Y7/2 灰白 シルト |
| 12 5B5/1 青灰 シルト | 29 7.5Y5/1 灰 粗砂～小礫を多く含むシルト |
| 13 5B5/1 青灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂（第 13b 層のブロックを含む） | 30 7.5Y6/1 灰 粗砂～小礫混シルト |
| 14 10Y5/1 灰 粗砂～小礫混シルト～細砂（シルトのブロックを含む） | 31 5B5/1 青灰 粗砂～小礫を多く含むシルト |
| 15 10BG4/1 暗青灰 シルト | 32 7.5Y6/1 灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂（炭化物を含む） |
| 16 5B5/1 青灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂（第 13b 層のブロックを含む） | 33 5B5/1 青灰 粗砂～小礫を多く含むシルト |
| 17 5BG5/1 青灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂 | 34 5B4/1 暗青灰 粗砂～小礫混シルト（第 13b 層のブロックを含む） |
| | 35 N4/0 灰 シルト～極細砂（第 13 - 2 a 層） |

図 53 第 13 - 1 a 層上面 溝群南部 断面図



- 1 10Y5/1 灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
- 2 5G5/1 緑灰 粗砂～小礫混シルト
- 3 5BG5/1 青灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂
- 4 10Y5/1 灰 粗砂～小礫を多く含むシルト混極細砂 (下層のシルトのプロックを含む)
- 5 10Y4/1 灰 シルトと極細砂の互層
- 6 10Y4/1 灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂
- 7 10Y5/1 灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
- 8 10Y5/1 灰 粗砂～小礫混シルト
- 9 5B5/1 青灰 粗砂～小礫混シルト
- 10 10GY5/1 緑灰 粗砂～小礫混シルト
- 11 10Y4/1 灰 粗砂を多く含むシルト
- 12 10GY5/1 緑灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂
- 13 2.5GY5/1 オリブ灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂
- 14 7.5GY5/1 緑灰 粗砂～小礫混シルト (極細砂のプロックを含む)
- 15 10GY4/1 暗緑灰 シルトと7.5Y8/2 灰白 極細砂と5Y7/2 灰白 中砂～粗砂・小礫の互層
- 16 7.5Y5/1 灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
- 17 10GY5/1 緑灰 粗砂を非常に多く含むシルト～極細砂
- 18 5Y5/3 灰オリブ 細砂～粗砂・小礫
- 19 5Y5/3 灰オリブ 粗砂を多く含むシルト
- 20 7.5Y5/1 灰 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト
- 21 7.5Y5/1 灰 粗砂～粗砂・小礫 (ラミナあり)
- 22 10BG4/1 暗青灰 粗砂～小礫混シルト (西肩部に粗砂～小礫を非常に多く含む)
- 23 5Y3/1 オリブ黒 シルト (第13b層のプロックを含む)
- 24 5Y3/1 オリブ黒 シルト (第13b層の小プロックを含む)
- 25 7.5Y5/1 灰 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
- 26 5Y6/3 オリブ黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
- 27 5Y6/3 オリブ黄 粗砂～小礫混シルト
- 28 7.5Y5/1 灰 粗砂～小礫混シルト
- 29 10Y5/1 灰 粗砂～小礫混シルト～細砂 (シルトのプロックを含む)
- 30 7.5Y4/1 灰 粗砂～小礫混シルト
- 31 5Y6/3 オリブ黄 シルト混細砂～粗砂・小礫
- 32 5BG5/1 青灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂
- 33 10Y5/1 灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
- 34 5BG5/1 青灰 粗砂～小礫混シルト
- 35 2.5Y7/2 灰黄 シルト混中砂～粗砂・小礫
- 36 5B5/1 青灰 粗砂～小礫混シルト
- 37 5B5/1 青灰 粗砂～小礫を多く含むシルト
- 38 5B4/1 暗青灰 粗砂～小礫混シルト (炭化物を含む)
- 39 7.5Y4/1 灰 粗砂～小礫を多く含むシルト
- 40 7.5Y5/1 灰 シルト～極細砂
- 41 10Y4/2 オリブ灰 粗砂～小礫混シルト
- 42 10Y4/1 灰 小礫混シルト
- 43 5B5/1 青灰 シルト
- 44 5B5/1 青灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂
- 45 5B5/1 青灰 粗砂～小礫混シルト (極細砂を含む)
- 46 5B4/1 暗青灰 粗砂～小礫混シルト
- 47 7.5GY5/1 緑灰 粗砂～小礫混シルト
- 48 7.5Y5/1 灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
- 49 7.5Y4/1 灰 シルトと極細砂～中砂の互層
- 50 N4/0 灰 シルト～極細砂 (第13-2a層)
- 基盤層 5Y6/4 オリブ黄 シルト 下位は極細砂を含む (第13b層)

図 54 第 13 - 1 a 層上面 溝群北部 断面図

ないが、同時期または比較的近い時期に掘削されたことが推測される。また、複数の溝の上部を同一層が埋積している状況が多くみられることから、埋没時期も同時期または比較的近い時期であったと想定できる。南東部で並行していた溝群は、北西部では、その西群が西側の（その6）調査区に、東群が北側の（その8）調査区に向かい、大きく2方向に分岐している。なお、溝の平面図は、完掘状況を示しており、切りあい関係を示してはいない。

また、調査区中央部の溝が密集している範囲の西側及び東側においても、同様に砂質の強いシルトを埋土とする溝を検出している。

「溝群最上層」から土師器甕・壺、須恵器、下駄、板材等が出土している。土師器甕（198・199）・複合口縁壺（200）は、いずれも布留式で、199は肩部に米粒形列点紋がみられる。調査区北端部（図59）で出土した。下駄（201）は、前緒穴が左に寄っており、歯の磨耗は後歯がより顕著である。ヒノキの板目材を使用しており、節が2箇所のみみられる。前緒穴が左寄りにある下駄は、大県遺跡の柏原市教育委員会による82 - 9次調査及び堅下小学校屋内運動場に伴う調査で、それぞれ1点ずつ出土している。また、図化していないが、1辺約20cmの正方形で厚さ約3cmの板材が、2J - 3b地区で出土している。樹種同定の結果は、針葉樹である。

「溝群上層」からは、弥生土器甕、土師器甕、須恵器杯（203～205）・高杯蓋（202）・甕、縄紋土器、砥石（210）、石庖丁（253）、サヌカイト石核（248）、板材等が出土している。弥生土器甕（209）は、同一個体と思われる上部と下部が接合せず、図上で合成をしている。弥生時代中期のもので、底部を穿孔している可能性がある。（その8）調査区の方形周溝墓（墳丘墓）である2号墓と同時期のものであり、出土位置が比較的近いことから、2号墓に伴うものであった可能性が考えられる。弥生土器甕（207・208）は、体部外面にタタキがみられる後期のものである。土師器甕（206）は、布留式である。須恵器杯（205）は、ヘラ記号を持つ。また、図化していないが、長さ約28cm、幅約15cm、厚さ約2cmの板材が、2J - 4b地区で出土している。樹種同定の結果は、ヒノキである。弥生時代後期のものがみられるものの、6世紀代の須恵器片が一定数認められる。なお、須恵器片に5世紀代のものはみられない。

各溝から出土した遺物は極めて少なく、小片である。図52に位置を示したが、446溝から弥生土器甕（211）が出土している。唯一、溝の底面において、ある程度形を保った状態で出土したものである。体部外面をタタキ後ナデを施しており、後期のものである。448溝からは、弥生土器壺（212）が出土している。頸部に沈線を持つ前期のものである。弥生土器壺（213）は、447溝出土のものに、404溝出土の小片が接合した。東部に位置する418溝からは、弥生土器壺（215）が出土している。同じく東部の1029溝からは、布留式の土師器直口壺（214）が出土しているが、最上部での出土であり、調査区中央部における「溝群上層」と同じ段階のものと捉えるべきであろう。なお、1029溝は、446溝と同一のものである可能性がある。

各溝の出土遺物から、掘削された時期を限定することは難しい。図化し得ない破片には、弥生時代のものがみられ、古墳時代と断定し得るものは認められない。甕（211）の存在から、弥生時代後期には機能していたと考えることができる。北側に接する（その8）調査区でも、217 = 277溝から弥生時代後期前半の土器が出土しており、溝が機能していた時期を示していると考えられている。溝群の埋没時期についても明らかにはし得ないが、「溝群上層」出土遺物の時期から、溝群が機能を終えた後もその上部が低地として残っており、6世紀頃に埋没したと考えられる。

溝の底面では、ピット、土坑を検出している。361～365ピットは、溝内に5基並ぶ。不整な円形で、

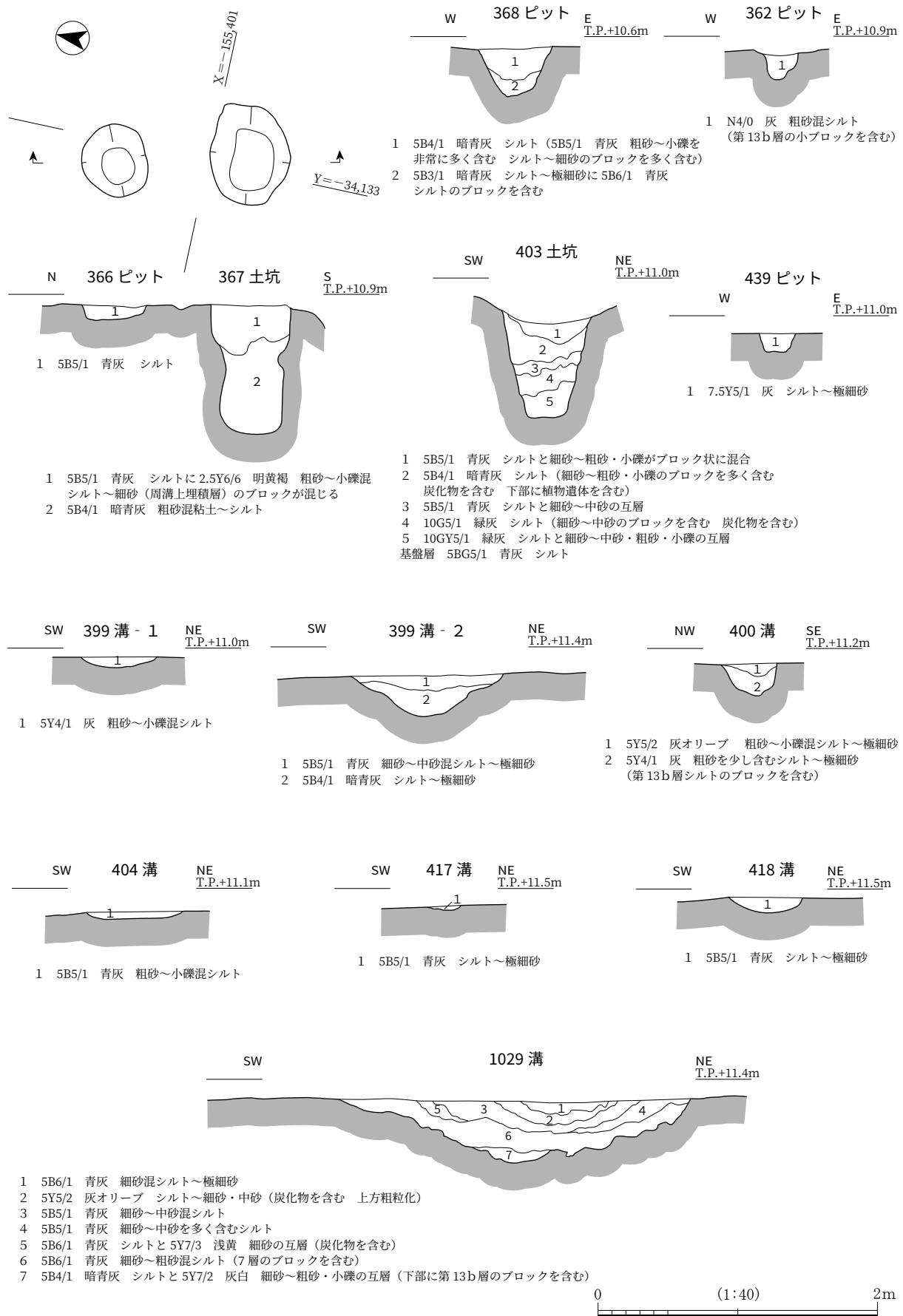
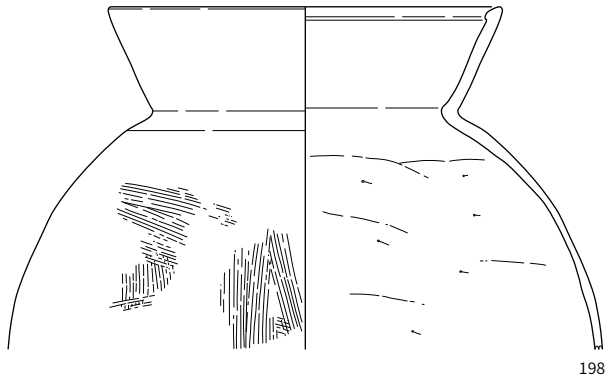
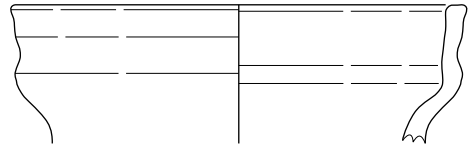


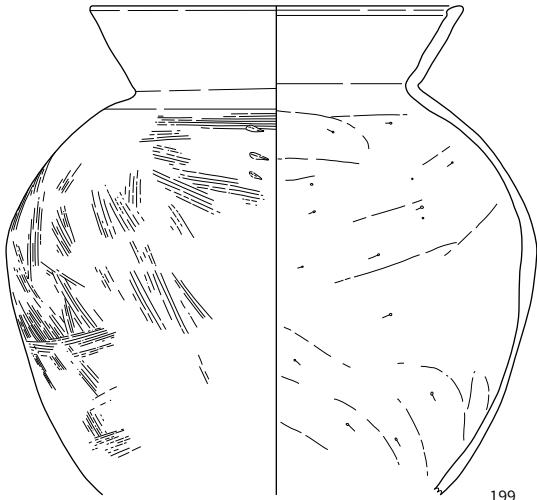
図 55 第 13 - 1 a 層上面 溝、土坑、ピット 平面・断面図



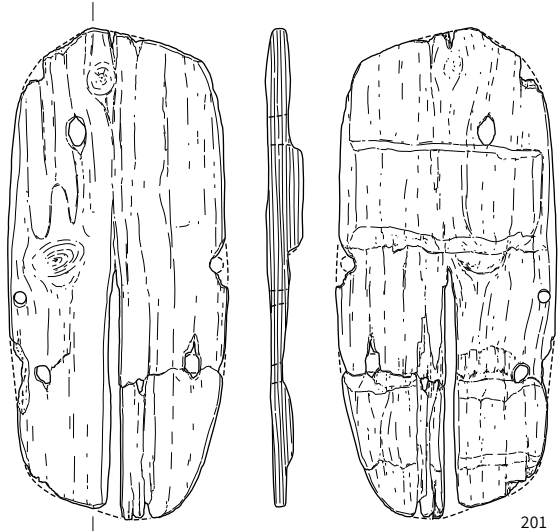
198



200



199

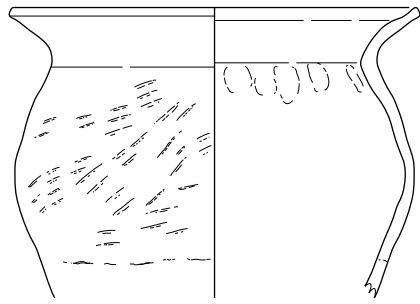


201

0 (1:3) 10cm

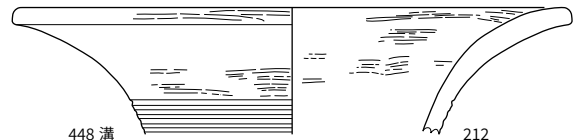
0 201 (1:4) 20cm

图 56 第 13 - 1 a 層上面 溝群最上層 出土遺物



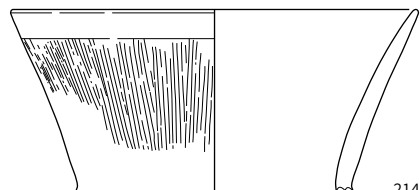
446 溝

211



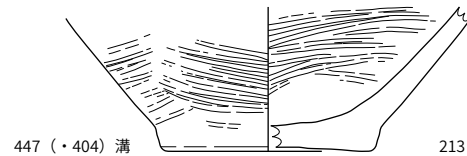
448 溝

212



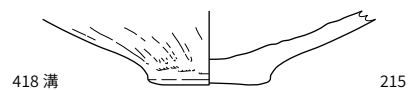
1029 溝最上部

214



447 (・404) 溝

213



418 溝

215

0 (1:3) 10cm

图 57 第 13 - 1 a 層上面 溝 出土遺物

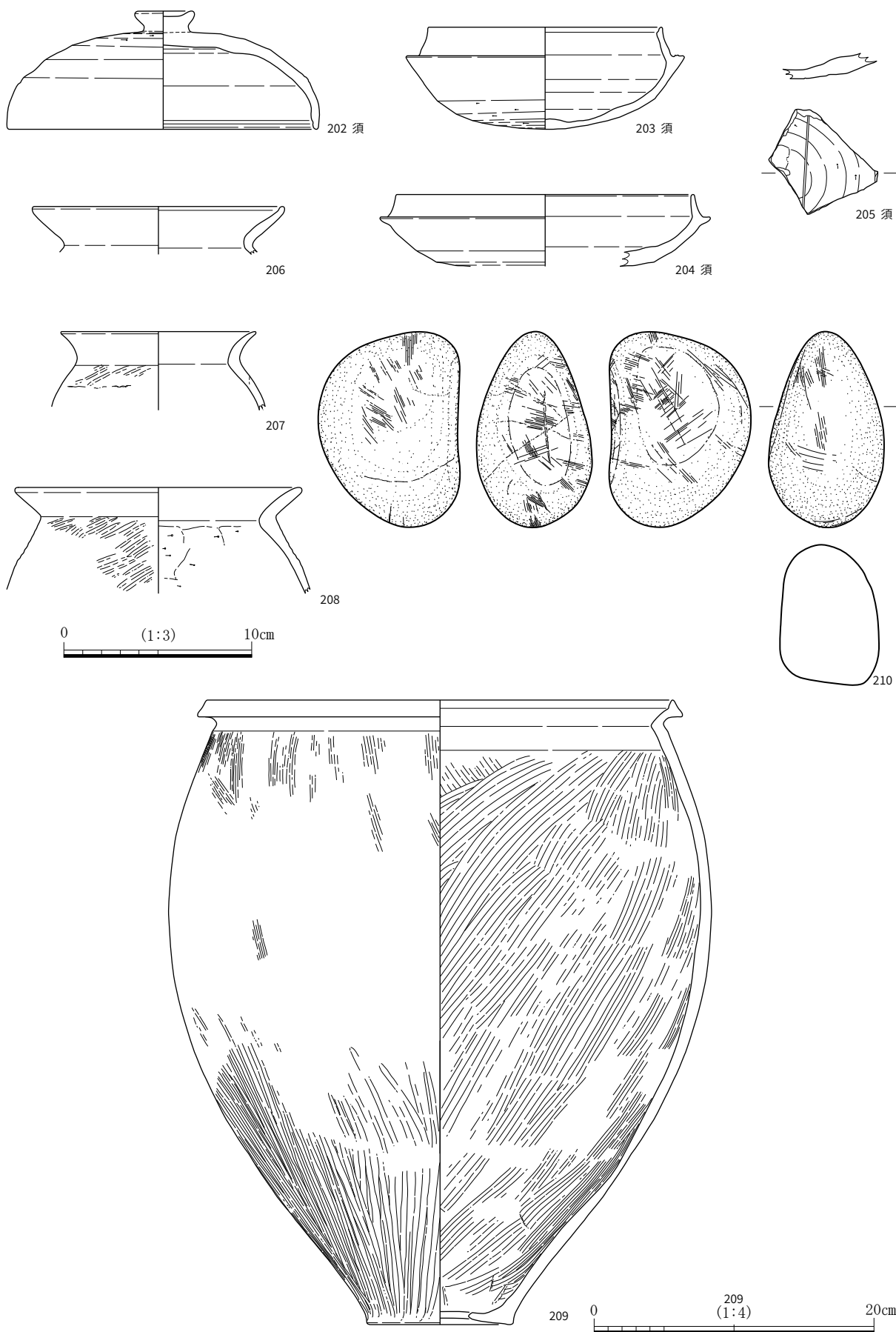


图 58 第 13 - 1 a 層上面 溝群上層 出土遺物

径約 0.2 m、深さ約 0.2 m である。埋土から、溝群と同時期のものと思われる。また、446 溝の底面では、402 ピット、401・403 土坑を検出した。401 土坑は平面楕円形で長径約 1.0 m、403 土坑は平面円形で径約 0.6 m、深さ約 0.7 m である。下層部にはラミナが認められ、上層部にはブロックを含む。

なお、1 区中央部北端では、第 13 - 2 a 層上面に帰属する 422 周溝が、完全に埋没せず落ち込みとして残っており、「溝群上層」と一連のものと思われるシルト層が堆積していた。そのシルト層掘削中に、366・368 ピット、367 土坑を検出した。いずれも平面形は不整な円形または楕円形で、366・368 ピットは径約 0.5 m、深さ 0.1～0.3 m、367 土坑は長径約 0.7 m、深さ約 0.9 m である。367 土坑、368 ピットの上面にはブロック土が目立つ。367 土坑から土師器、須恵器が出土している。周溝上を埋積するシルト層からは、土師器、弥生土器、縄紋土器、サヌカイト剥片等が出土している。

調査の時系列としては前後するが、第 12 a 層直下の「溝群最上層」を掘削した際、検出した土坑群について、ここで報告しておく。図 59 は、「溝群最上層」を除去したその下面、「溝群上層」上面の平面図である。「溝群最上層」は、層厚が箇所によって異なるが、ある程度水平に掘削し、その範囲の精査を行なった。その結果、「溝群最上層」の深い部分が北西 - 南東方向の帯状に認められたほか、土坑

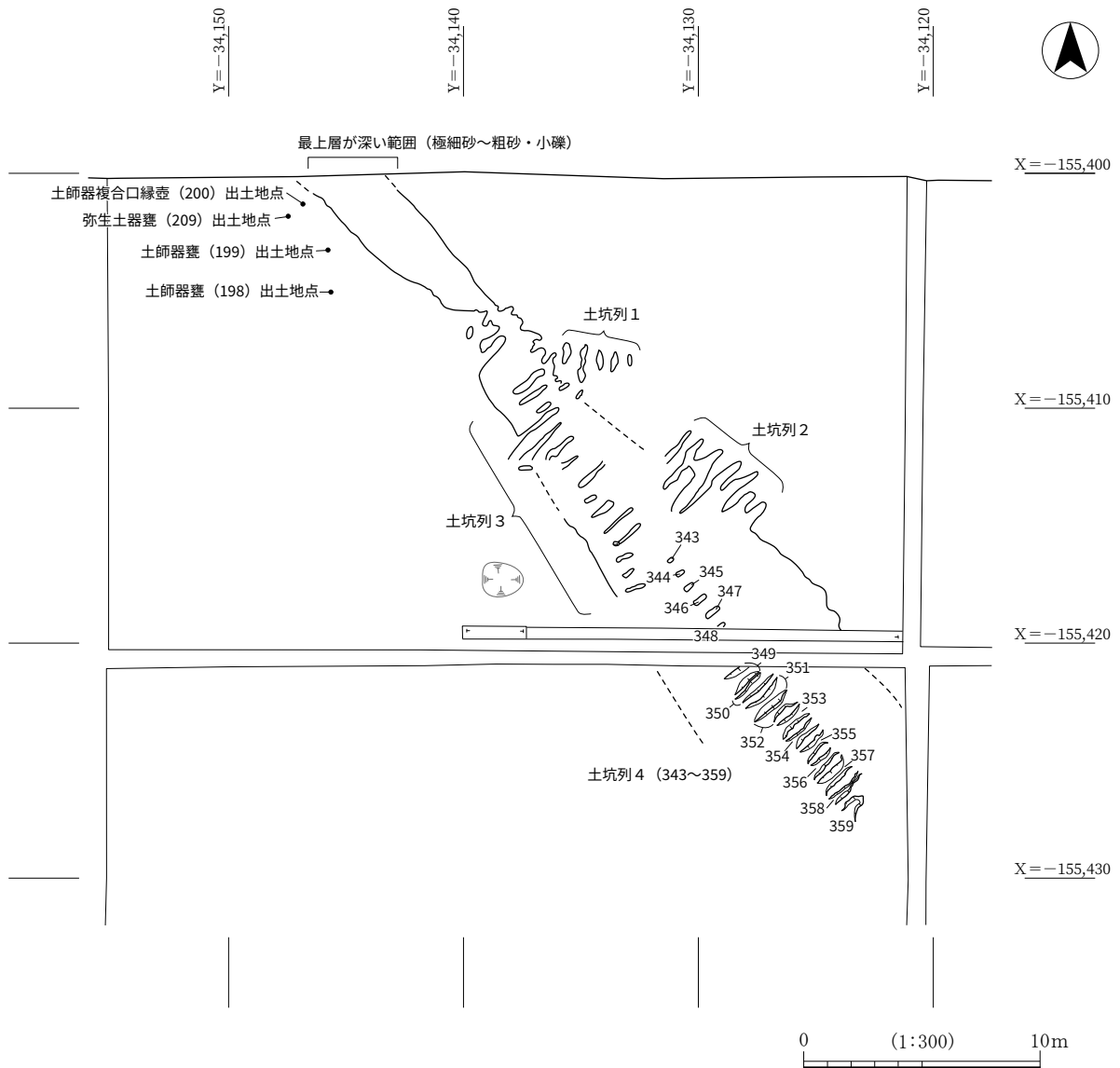


図 59 第 13 - 1 a 層上面 溝群最上層下面 平面図

群を確認した。

土坑の平面形は、北東 - 南西方向に長軸を持つことは共通しているものの、不定形であり、輪郭を明確に捉えることは難しい。長さ 0.5 ~ 3.4 m、幅 0.2 ~ 0.6 m のものがみられ、深さは 0.2 m 以内である。北西 - 南東方向に、ほぼ等間隔で並ぶ。埋土は、ブロック土を含むものの、「溝群最上層」と酷似している。

土坑群の規模は異なるものの、長軸方向が並行し、等間隔に並ぶ様は、第 7 a 層上面 79 溝東部遺構群と似ている。埋土が直上層と酷似することも共通する。土坑間の芯々距離の平均は、土坑列 1 で 69 cm、土坑列 2 で 73 cm (以上 100 分の 1 平面図で計測)、土坑列 4 (343 ~ 359 土坑) で 72.3 cm (20 分の 1 平面図で計測) である。

土坑群の形成は、溝群最上層堆積後、第 12 a 層上面に畦畔等が設けられるまでの間と考えられる。図 59 に出土地点を示したが、調査区北部の溝群最上層 ~ 上層上部には、層準の時期よりも古い土器が、割れてはいるがまとまった状態で含まれていた。この段階に、土地を改変するような何らかの開発行為があった可能性も考えられる。遺物は、345 土坑から須恵器片が出土している。なお、(その 8) 調査

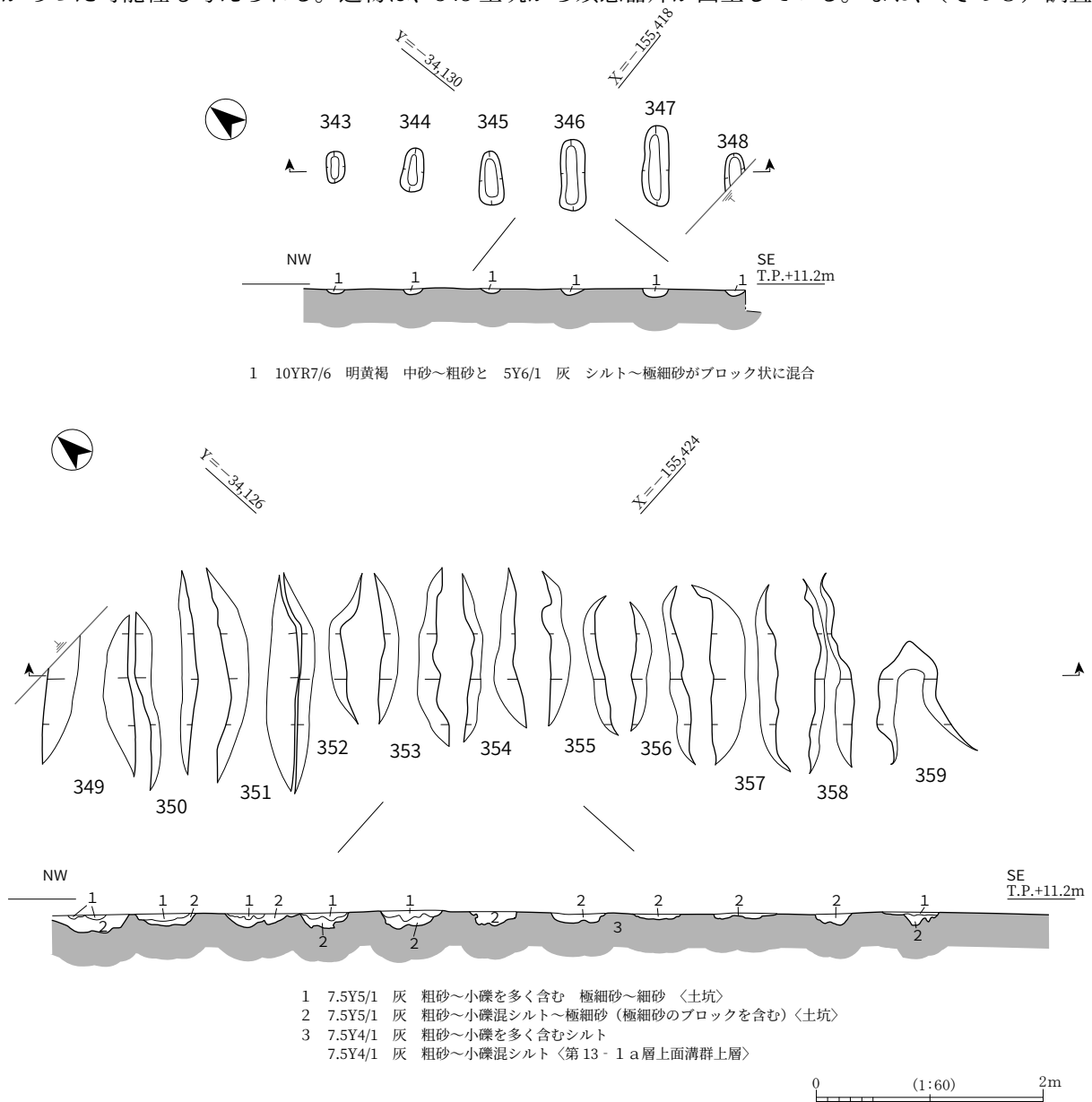


図 60 第 13 - 1 a 層上面 溝群最上層下面 土坑群 平面・断面図

区の3区でも、第13-1a層基底面において、同様の土坑列が検出されている。

第13-1a層出土遺物 (図75)

弥生土器、縄紋土器、サヌカイト石鏃(240)・剥片等が出土している。少量の小片であり、時期のわかるものは少ない。

第13a層上～下面・第13-2a層上～下面の遺構と遺物 (図61～73・75・76 図版21～29・35・36)

1区では、第13-1a層を除去した第13-2a層上面及びその下面、2区では、第12a層を除去した第13a層上面及びその下面である。方形周溝墓(墳丘墓)3基、溝、土坑、ピットを検出した。

2号墓(422周溝・埋葬施設1)(図61～64・75・76 図版22・23・36)

1区北端部に位置する422周溝は、第13-2a層上面で検出した東西方向の溝である。北側に接する(その8)調査区の2号墓(墳丘墓)南周溝の南肩部分にあたる。埋土は、粗砂～小礫混じりシルトに基盤層である第13b層のブロックを含む。上部は第13-1a層上面の「溝群上層」と同時期と思われる堆積で埋没している。

弥生土器高杯・壺(217)、縄紋土器、サヌカイト石核(249)、石棒(251)が出土している。高杯(216)は、弥生時代中期のもので、杯部の下部に穿孔がある。

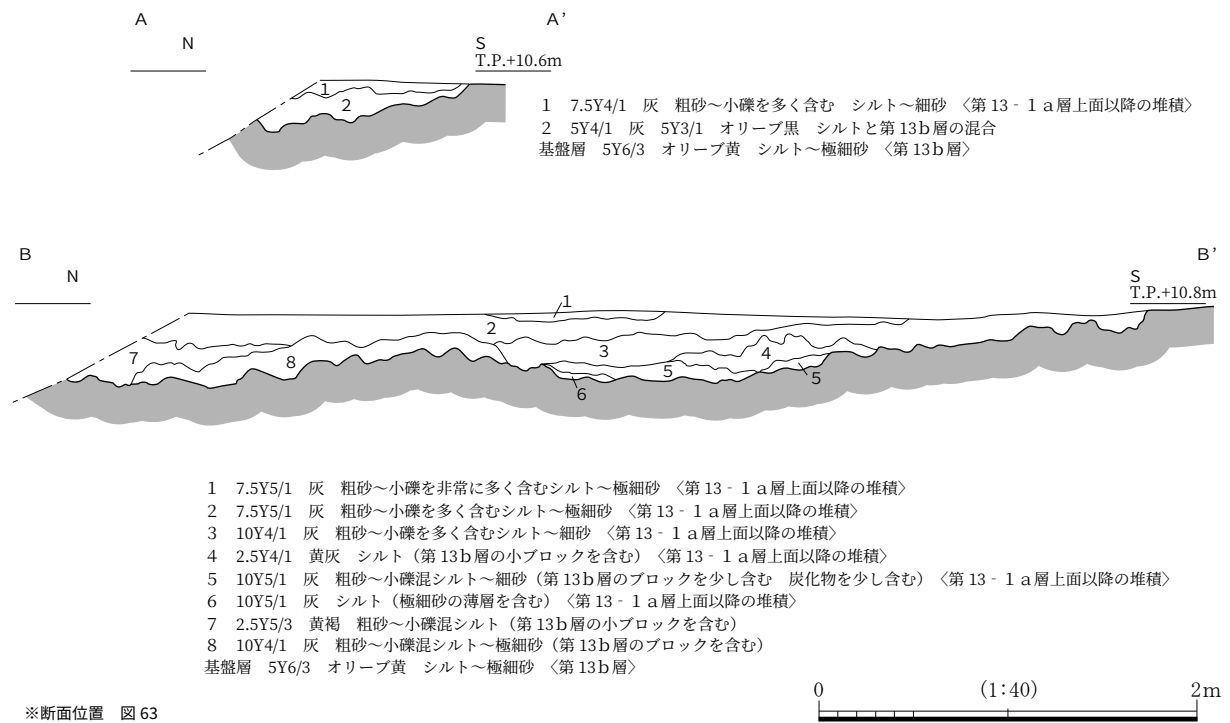


図61 第13-2a層上面 2号墓 422周溝 断面図

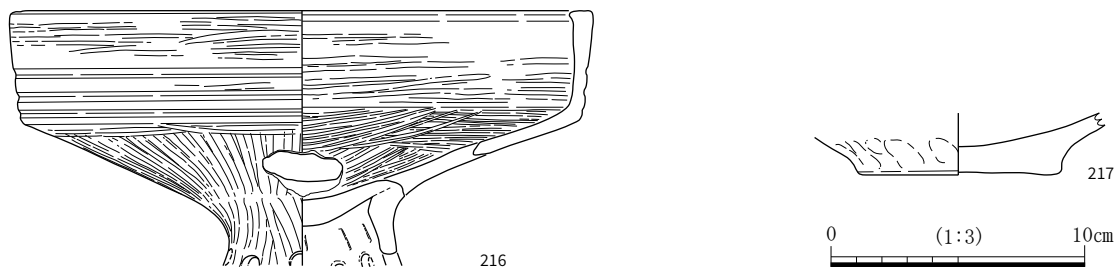


図62 第13-2a層上面 2号墓 422周溝 出土遺物

Y=-34,170

Y=-34,160

Y=-34,150

Y=-34,140

Y=-34,130

Y=-34,120

Y=-34,110

Y=-34,100

Y=-34,090

Y=-34,080

Y=-34,070

Y=-34,060

Y=-34,050

Y=-34,040

Y=-34,030

X=-155,370

X=-155,380

X=-155,390

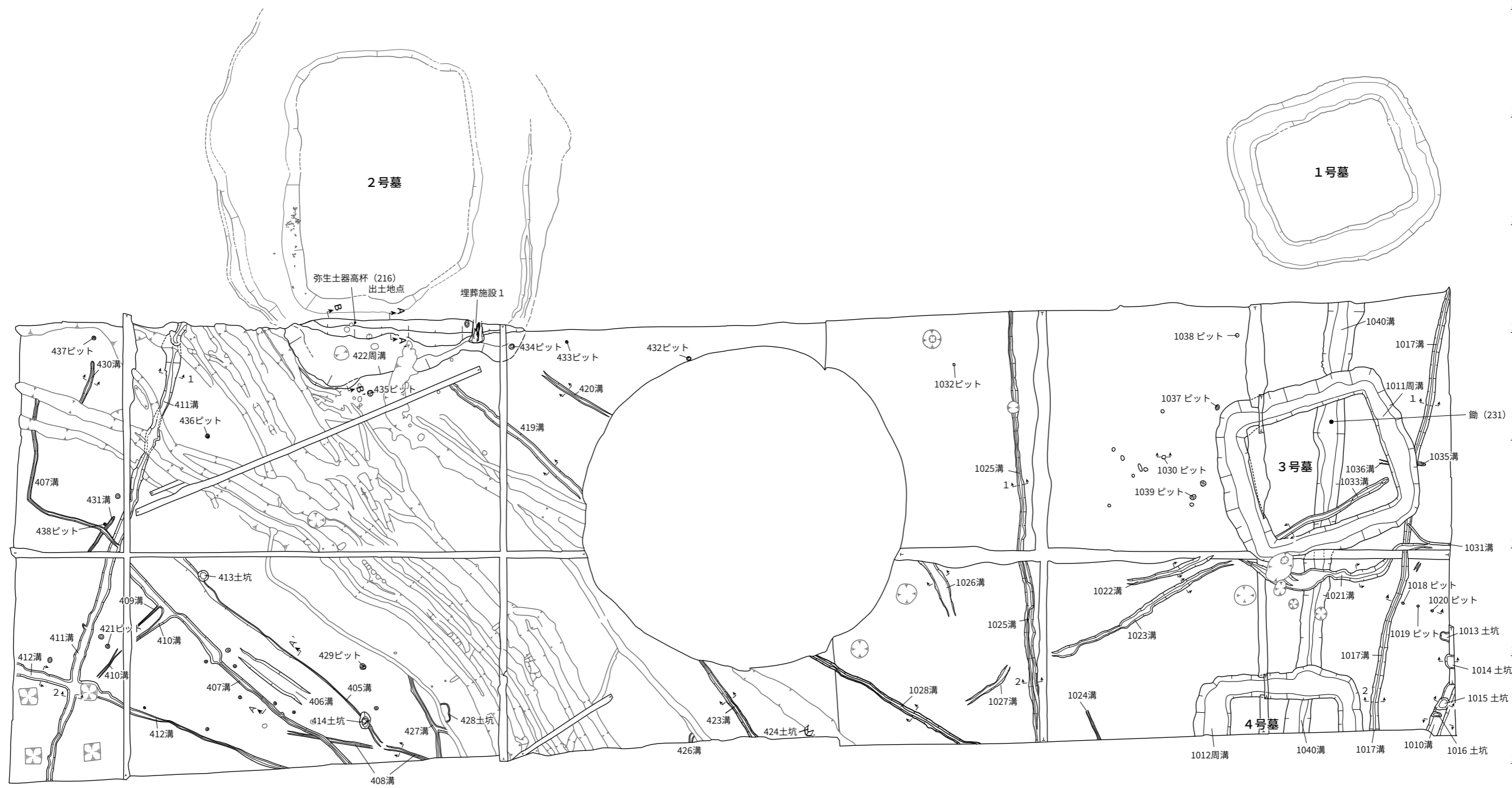
X=-155,400

X=-155,410

X=-155,420

X=-155,430

X=-155,440



1区

2区

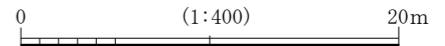


図63 第13a層・第13-2a層上～下面 平面図

422周溝東部の南肩部で、埋葬施設1を検出した。墓壇の平面形は、南北方向に長軸を持つややいびつな長方形で、検出長約2.1m、幅1.0～1.3m、深さ0.5～0.6mである。北端は調査区外で遺存していない。底面より少し上にほぼ水平に木材が据えられていた。木材は腐食が進んでいるが舟形を呈しており、残存長約1.1m、幅約0.3mである。木質の痕跡も含めると、長さ1.7m以上、幅約0.5mとなる。樹種同定の結果は、コナラ属コナラ節である。舟形の木棺を据えた、埋葬施設と考えられる。

墓壇の埋土は、木棺材が遺存していた箇所では暗色のシルトであったが、それ以外ではわずかに暗色化しているものの、基盤層である第13b層及び縄紋時代の流路堆積と酷似している。墓壇底面は、図64の東西断面で見られるように、舟形の木棺にあわせた形状に掘削されており、平坦ではない。2層が木質の痕跡である粘土～シルトであり、それ以下の層で木棺を据える前に底面が整えられたと考えられる。平面図に記した木棺周囲の輪郭線は、木棺の痕跡（2層の平面範囲）を示している。また、南北断面の木棺痕跡（2層）南端箇所において、垂直方向の幅約2cmの土質の違い（図64-4層）を確認した。上部では鉄分の沈着等もあり不明瞭であるが、下部は墓壇底面まで達している。小口板の痕跡である可

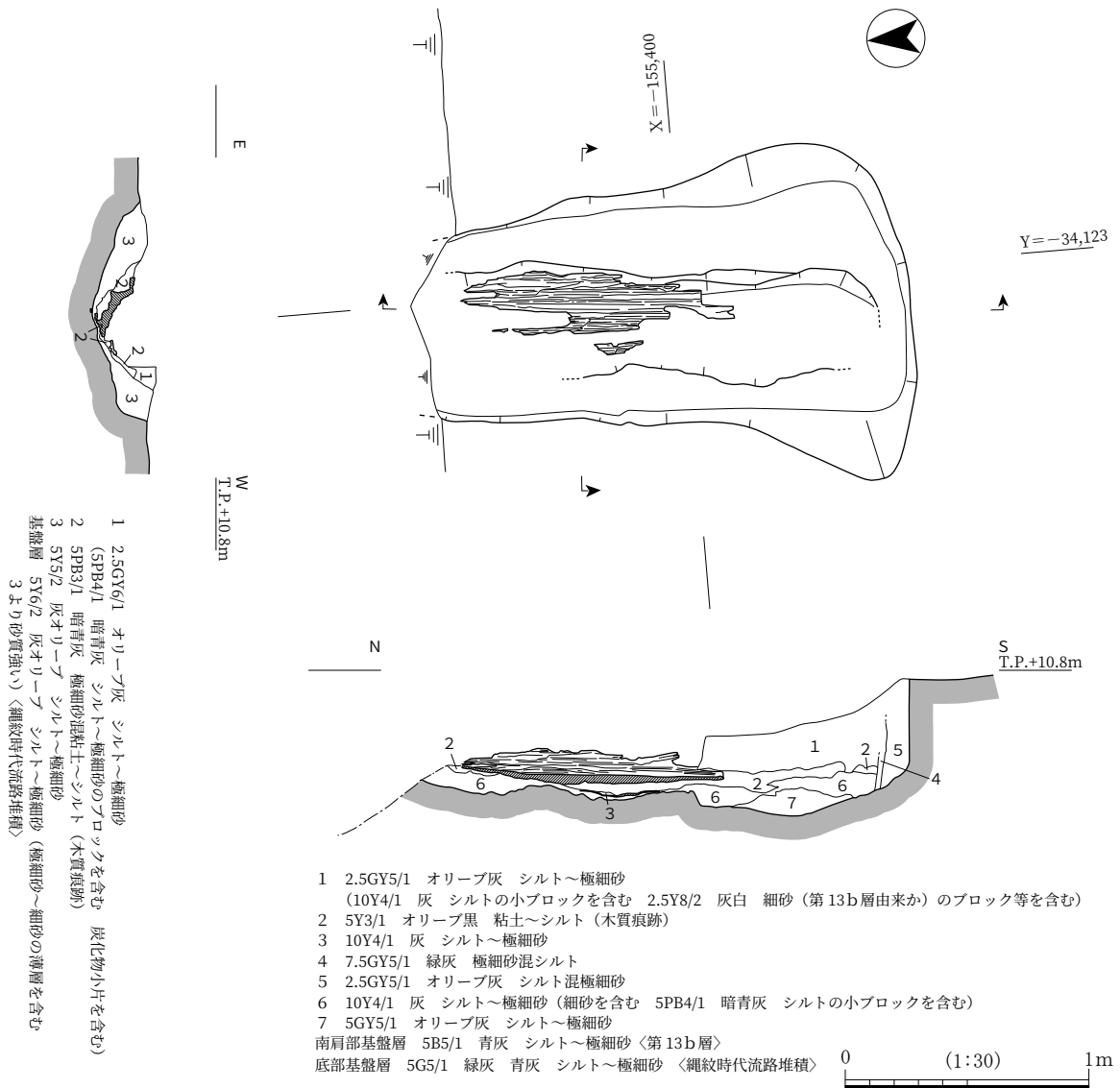


図64 第13-2a層上面 2号墓 埋葬施設1 平面・断面図

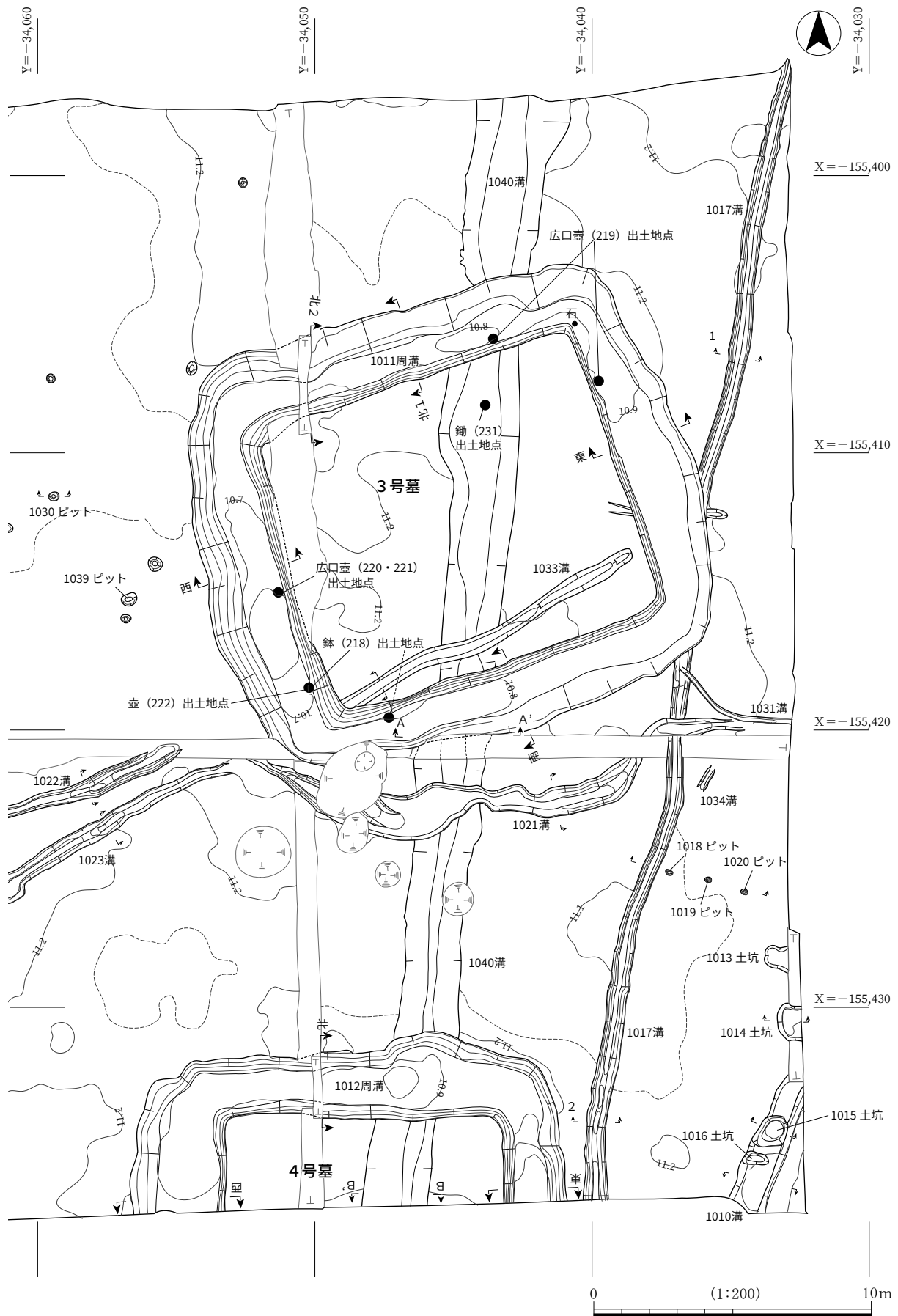


図 65 第 13 a 層上面 3・4号墓 平面図

能性が考えられる。墓壇の西肩、東肩の立ち上がりが緩やかであるのに対し、南肩は垂直に立ち上がっていることも、示唆的である。ただ、平面精査では、断面箇所付近でわずかに痕跡を確認し得たに過ぎない。墓壇内から、石鏃（236）が1点出土している。

3号墓（1011周溝）（図63・65～68 図版24～26・28・29・35）

2区東半部では、第13a層上面に帰属する方形周溝墓を2基検出した。直上の第12a層がほぼ水平であり、盛土等は遺存していない。周溝のみを検出した。なお、方形周溝墓の名称は、大県郡条里遺跡として通し番号を付すこととし、（その8）調査区の1・2号墓に続く、3・4号墓とする。

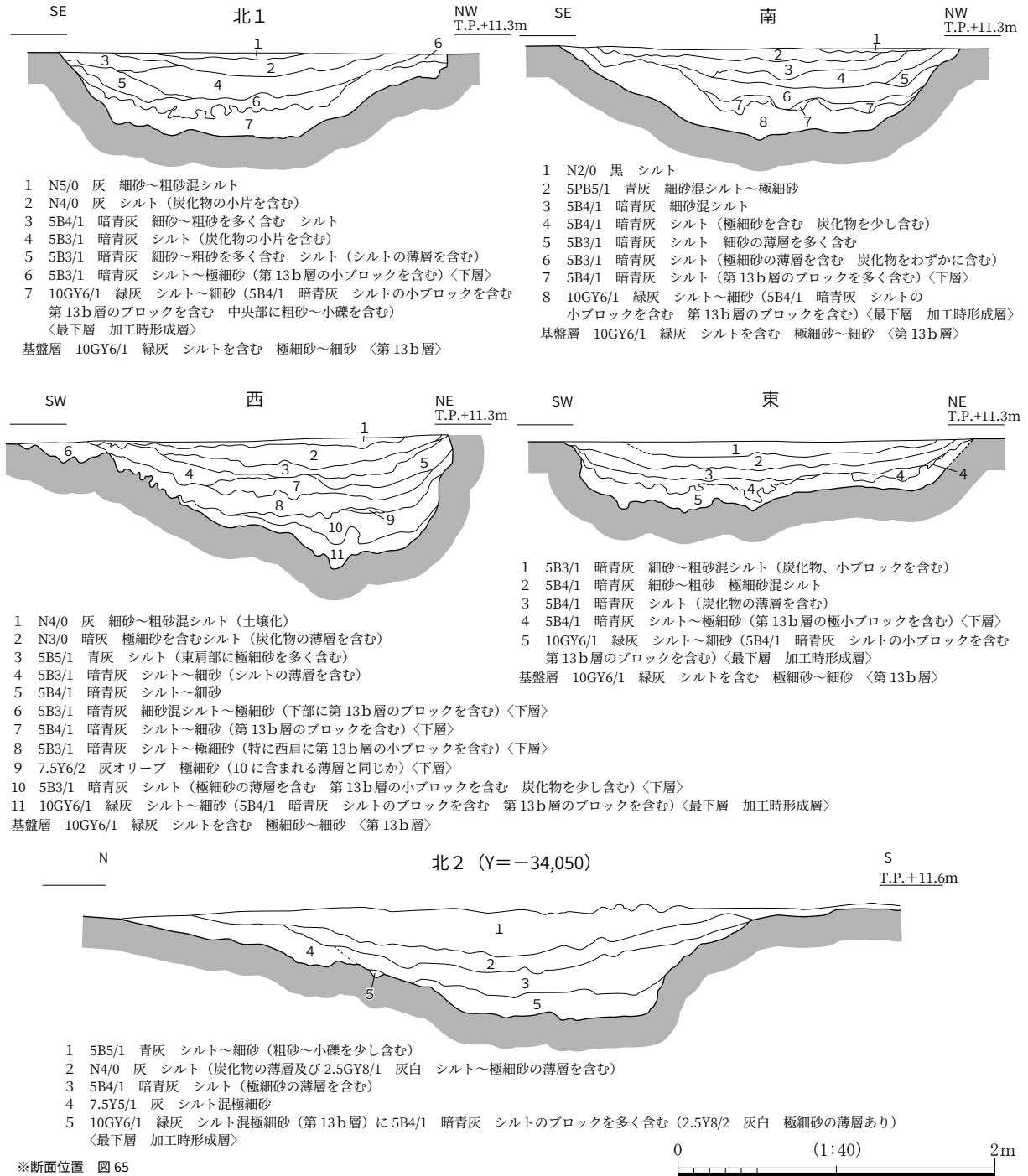


図66 第13a層上面 3号墓 1011周溝 断面図

北側の3号墓は、長軸の方向が座標北を基準としてN72°Eで、(その8)調査区の1号墓のN68°Eと近い。墳丘の規模は、北西-南東方向で約11.6m、北東-南西方向で約13.0mである。

1011周溝の幅は2.4~3.0mで、周溝の深さは約0.7mである。墳丘側の肩の立ち上がりが比較的急で、外側は比較的緩やかである。

周溝最上部には青灰色の砂粒を含むシルト層、上部には炭化物を含む暗青灰色シルト層、中部から下部にかけては暗青灰色シルト~細砂にシルト~細砂や炭化物の薄層を含む層がみられる。下層には基盤層の小ブロックを含み、最下層は基盤層である第13b層に小ブロック土を含む、加工時形成層である。加工時形成層上に基盤層(第13b層)のブロックを含む層が堆積した後は、徐々に埋まっていったことがみてとれ、上層段階においても窪みとして残っていたと考えられる。なお、図及び写真は、加工時形成層を残した状態のものであり、図版29上段の写真が加工時形成層を完掘した状態のものである。

周溝の墳丘側肩部の数箇所、弥生土器が出土した。広口壺(219)は、周溝東辺北部で出土したものに、北辺東部で出土した破片が接合した。体部外面に、焼成前に施された線刻がある。表面が摩耗しており不明瞭であるが、複数の線で表した波状紋が右下がりに表現されている。体部上半はより摩耗が著しく判別し難いが、さらに上位にも施されていた可能性がある。体部の上部には粘土の継ぎ目がみられ、口縁部までの上位と体部下半までの下位で、胎土が異なる。上位の胎土は、白色砂粒を含み、下位に比べてやや粗い。広口壺(220)は、西辺中央部で出土した。ともに出土した底部(221)は、同一個体の可能性が高いが、接合しない。口縁部内面と外面にミガキを施す。鉢(218)は、西辺南部で出土した。南辺西部でも同器種の胎土が同じものが出土しており、同一個体である可能性が高い。壺(222)は、鉢(218)と同一地点で出土した。また、北東角では、長さ18.5cm、残存幅8.0cmの割れた石が出土している。

墳丘側肩部以外では、西辺で壺底部(223)、東辺でサヌカイト剥片が出土している。最下層の加工時形成層からは、縄紋土器が出土している。

周溝肩部で出土した土器群は、墳丘上にあった可能性があり、弥生時代後期後葉の時期が与えられる。

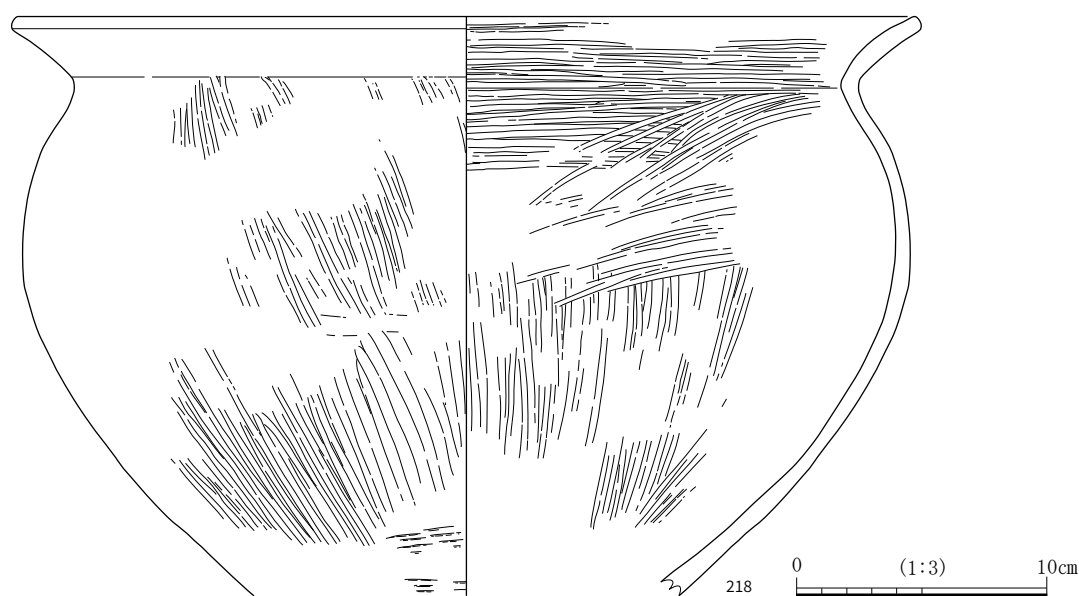
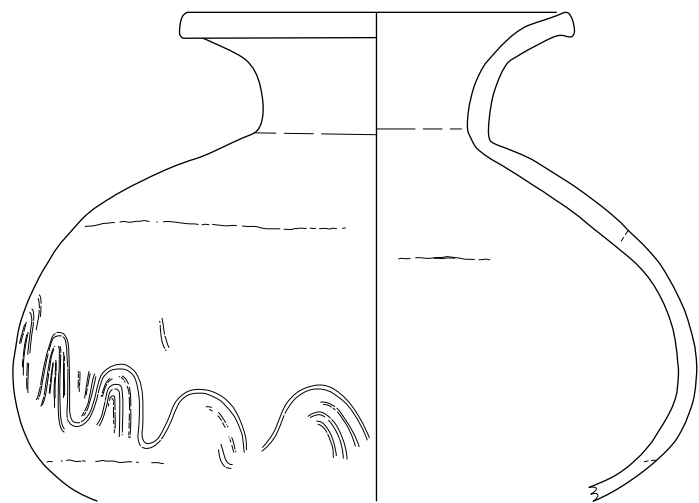
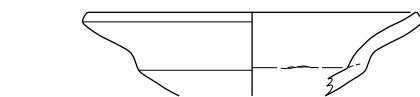


図67 第13a層上面 3号墓 1011周溝 出土遺物(1)



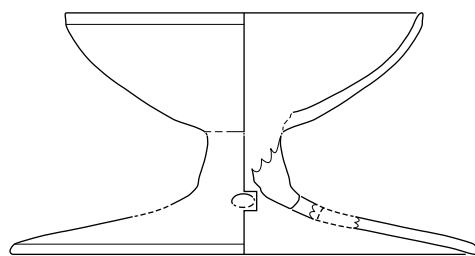
3号墓 1011 周溝

219



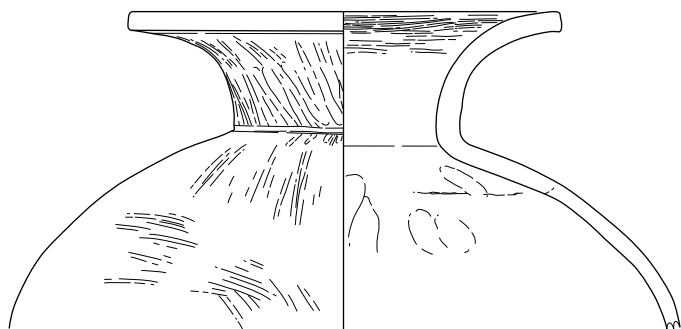
4号墓 1012 周溝

224



4号墓 1012 周溝

225



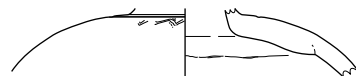
3号墓 1011 周溝

220



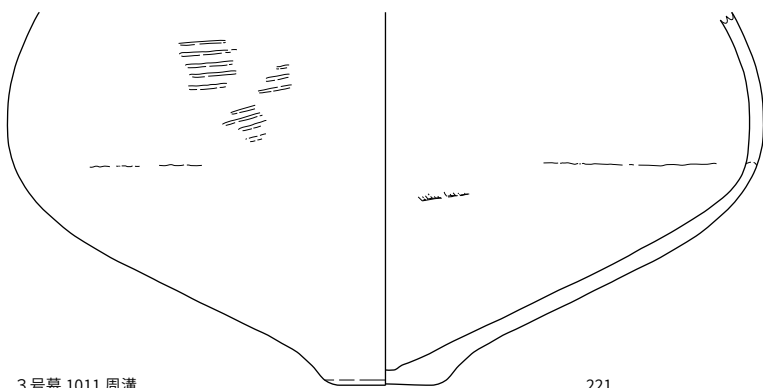
4号墓 1012 周溝

226



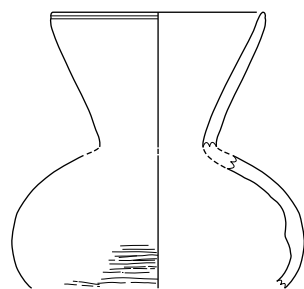
4号墓 1012 周溝

227



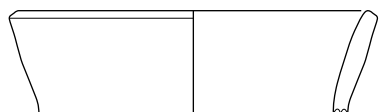
3号墓 1011 周溝

221



4号墓 1012 周溝

228



3号墓 1011 周溝

222



3号墓 1011 周溝

223

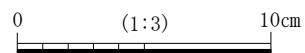


图 68 第 13 a 層上面 3 号墓 1011 周溝 出土遺物 (2) 4 号墓 1012 周溝 出土遺物

4号墓 (1012周溝) (図63・65・68・69・75 図版24・25・27～29・35)

南側の4号墓は、北部分を検出し、調査区外の南に続く。墳丘の東西長は約10.7m、南北の検出長は約3.7mである。東西長が1・2号墓の短辺に近く、南北方向が長辺の可能性もある。その場合、主軸はほぼ座標北である。1012周溝の幅は2.3～3.5mで、深さは約0.7mである。墳丘側の肩の立ち上がりりが比較的急で、外側は比較的緩やかである。

周溝上部から中部には青灰色粗砂～小礫を含むシルト層及び炭化物を含む暗青色シルト層、中部から下部には暗青灰色シルトにシルト～極細砂や炭化物の薄層を含む層がみられる。下層では、北辺と東辺の断面で、基盤層(第13b層)のブロック等を含む、墳丘側からの堆積が確認できる。最下層は、基盤層である第13b層にブロック土を含む、加工時形成層である。墳丘側からの堆積の後は、徐々に埋まっていったとみられ、上層段階においても窪みとして残っていたと考えられる。

周溝の出土遺物は、少量の小片であり、3号墓のように墓に伴う可能性がある出土状況のものはない。北辺で弥生土器二重口縁壺、石鏃(239)、西辺で弥生土器高杯(224)・椀形高杯・小形加飾壺・小形直口壺・甕、縄紋土器が出土した。椀形高杯(225)は、同一個体と思われるが接合しない破片を図上で復元している。二重口縁壺(226)は、口縁部に波状紋と竹管紋を持つ。小形加飾壺(227)は、頸部直下に

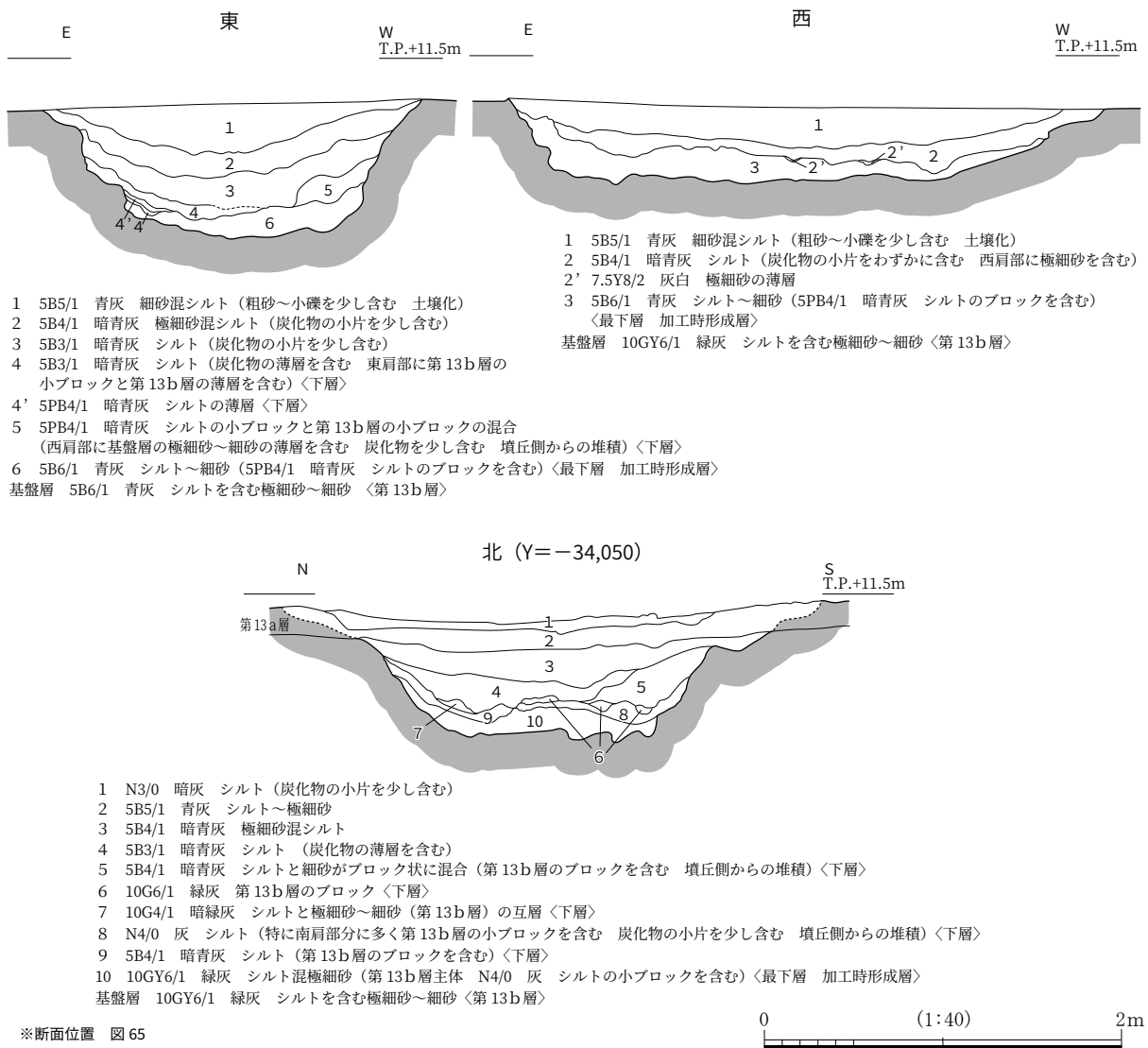


図69 第13a層上面 4号墓 1012周溝 断面図

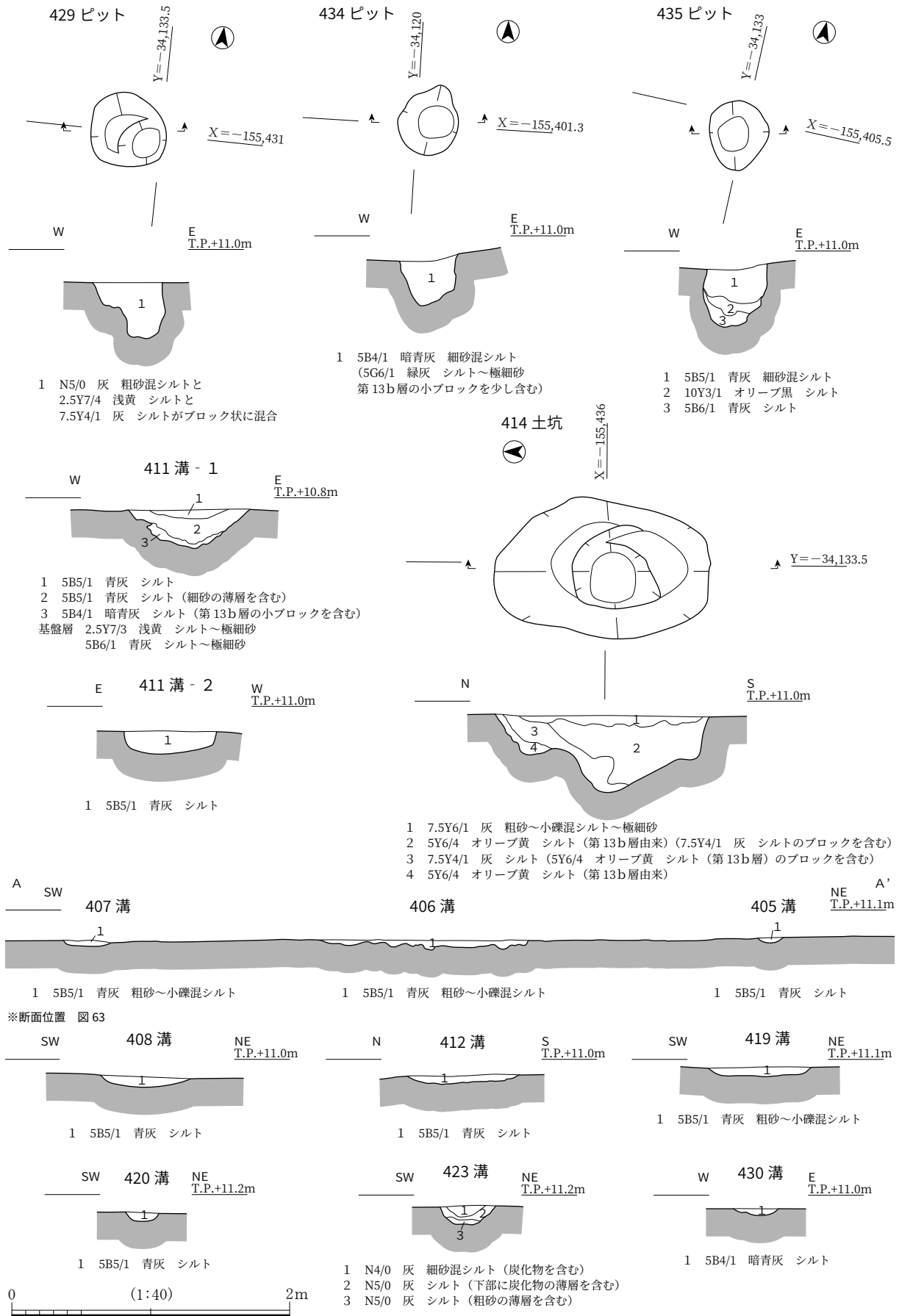


図 70 第 13 - 2 a 層上~下面 溝、土坑、ピット 平面・断面図 (1区)

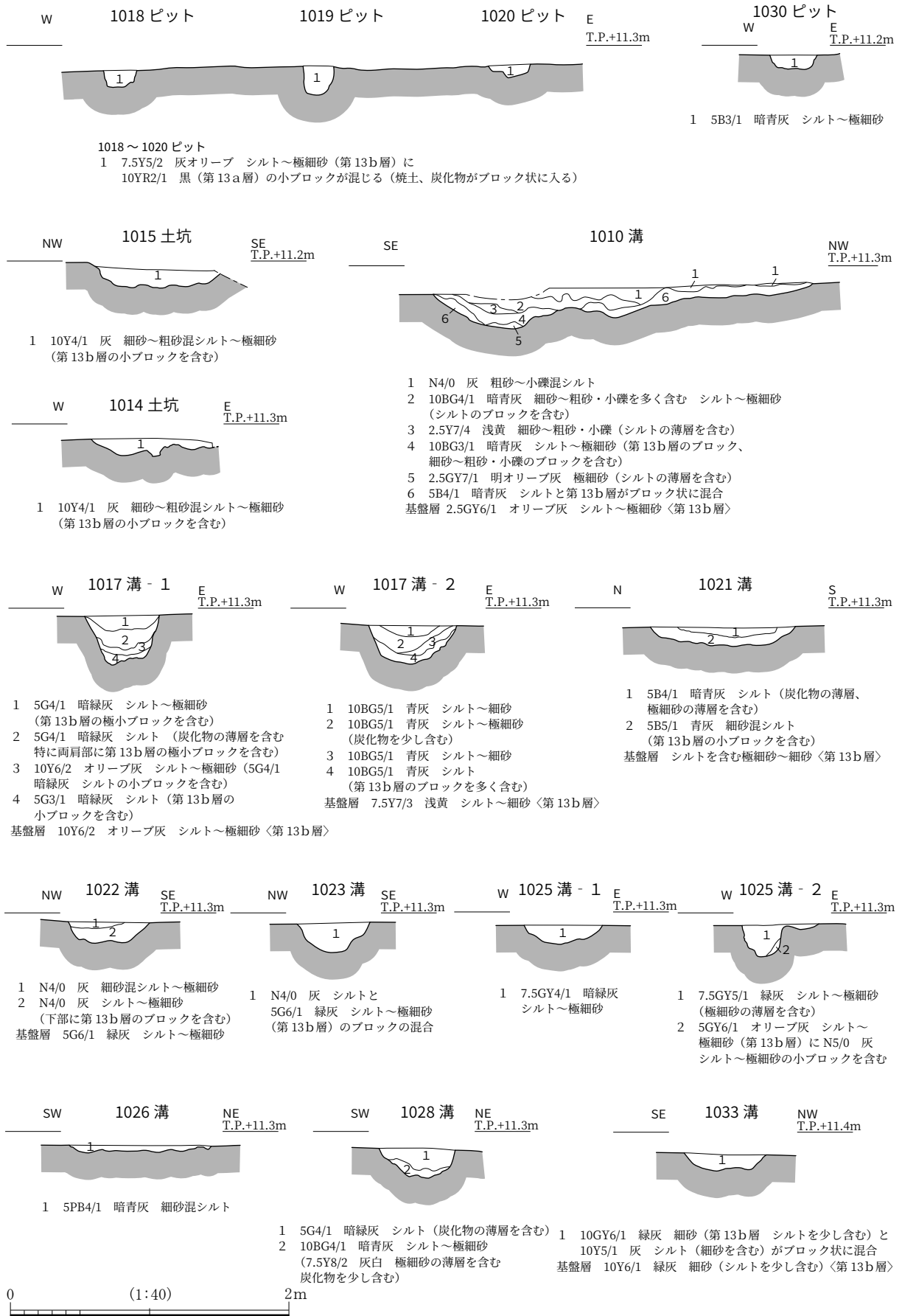


図 71 第 13 a 層上～下面 溝、土坑、ピット 断面図 (2 区)

楕円直線紋、その下の肩部に稚拙な波状紋を持つ。小形直口壺（228）は、口縁端部外面に沈線を持つ。北辺の加工時形成層からは、縄紋土器が出土している。

出土遺物はいずれも小片である。庄内式期まで下るものもみられるが、周溝の埋没状況も考慮すれば、3号墓と同時期である可能性が考えられる。

その他の遺構（図 63・65・70～73 図版 28・29・36）

第 13 - 1 a 層上面の溝群と同方向である、北西 - 南東方向の溝群を、1 区から 2 区西部において検出した。1 区の 405・408・412・419・420・423・427 溝、2 区の 1026・1028 溝である。幅は 0.2～

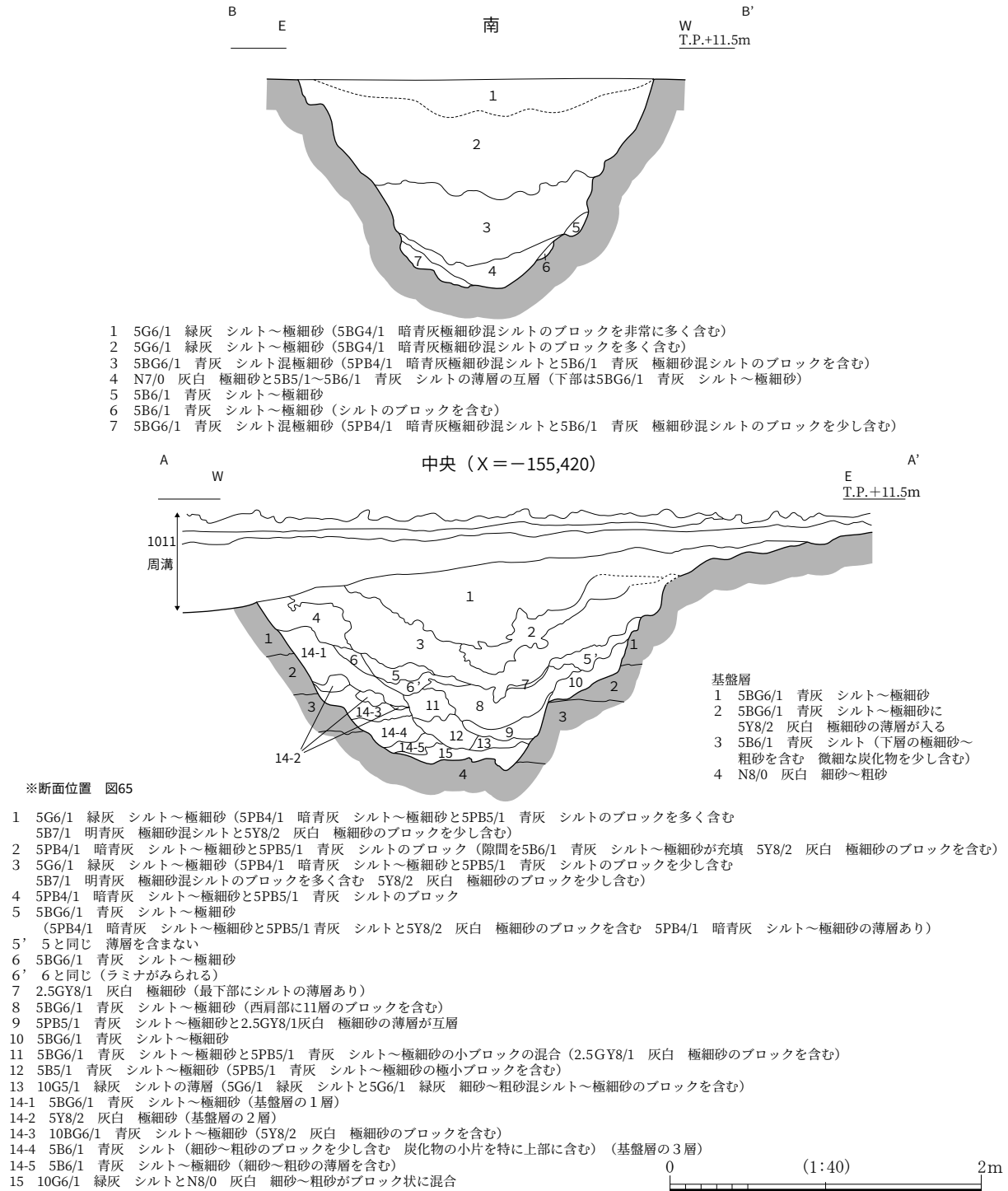


図 72 第 13 a 層下面 1040 溝 断面図

1.5 m、深さは約 0.1 m である。いずれの溝も、北西端と南東端でも底面のレベルにほとんど差がみられない。埋土の多くは、第 13 a 層と似る青灰色シルトであるが、423・1028 溝にはラミナが認められた。407 溝は、408・411・431 溝と重複しており、これらより新しい。

1 区ではほかに、北東 - 南西方向の小規模な溝群を検出した。409・410・426・430・431 溝である。幅は 0.2 ~ 0.3 m、深さは約 0.1 m である。いずれの溝も、北東端と南西端でも底面のレベルにほとんど差がみられない。埋土の多くは、第 13 a 層と似る灰色シルトである。431 溝は、407 溝と重複しており、407 溝より古い。

2 区でも、北東 - 南西方向の 1021 ~ 1023・1027・1033 溝を検出した。1021 溝は、底面に凹凸がみられ、幅約 1.0 m、深さは 0.1 ~ 0.3 m である。3 号墓の南側 1.5 ~ 2.3 m で、周溝に沿って湾曲しており、方形周溝墓と同時期または築造以降に掘削されたと考えられる。西側はトレンチで途切れるが、同様に底面に凹凸がみられる、1022 溝と同一のものである可能性がある。1017 溝及び 1040 溝よりも新しい。1023・1027・1033 溝も、トレンチ等を挟んで途切れているが、同一の溝の可能性が高い。幅約 0.6 m で、底面に凹凸が目立ち、深さは 0.1 ~ 0.2 m である。1033 溝は、3 号墓の 1011 周溝よりも古く、1040 溝よりも新しい。1023・1033 溝から縄紋土器片が出土しているが、1040 溝よりも新しい

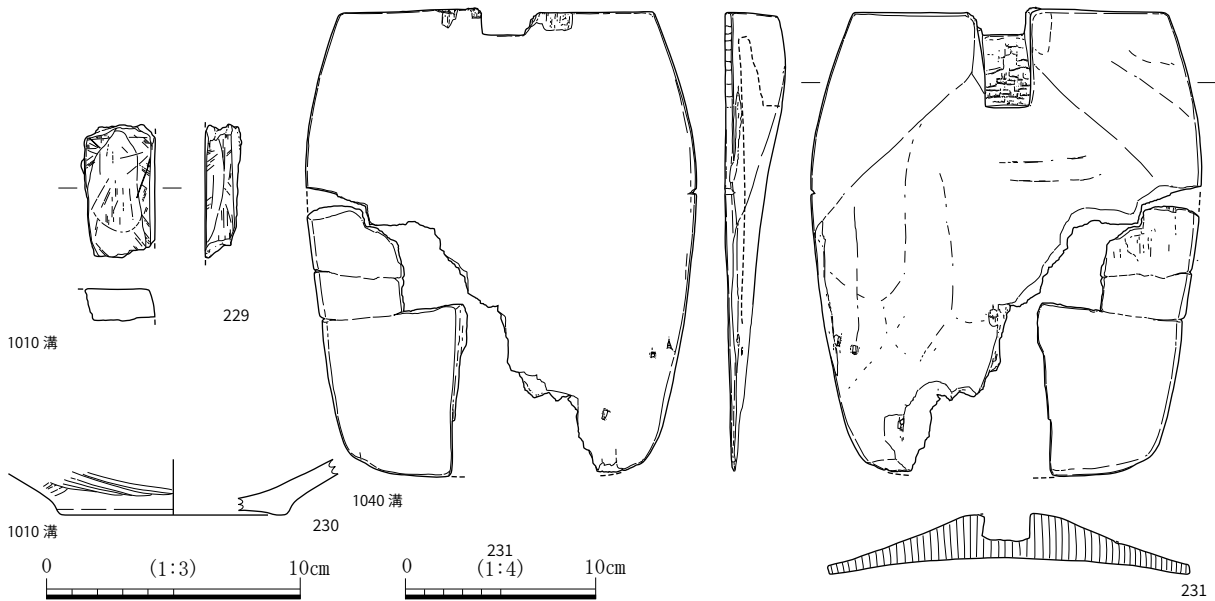


図 73 第 13 a 層下面 1010・1040 溝 出土遺物

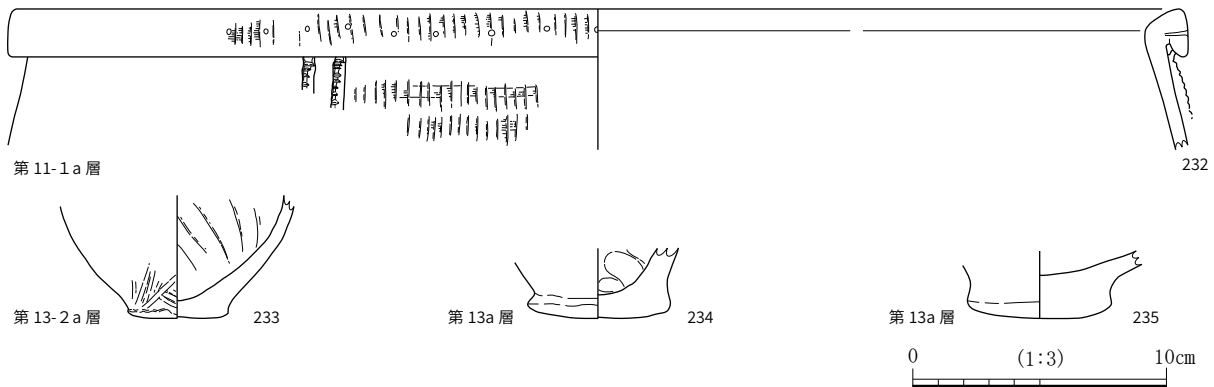


図 74 第 13 a 層 出土遺物

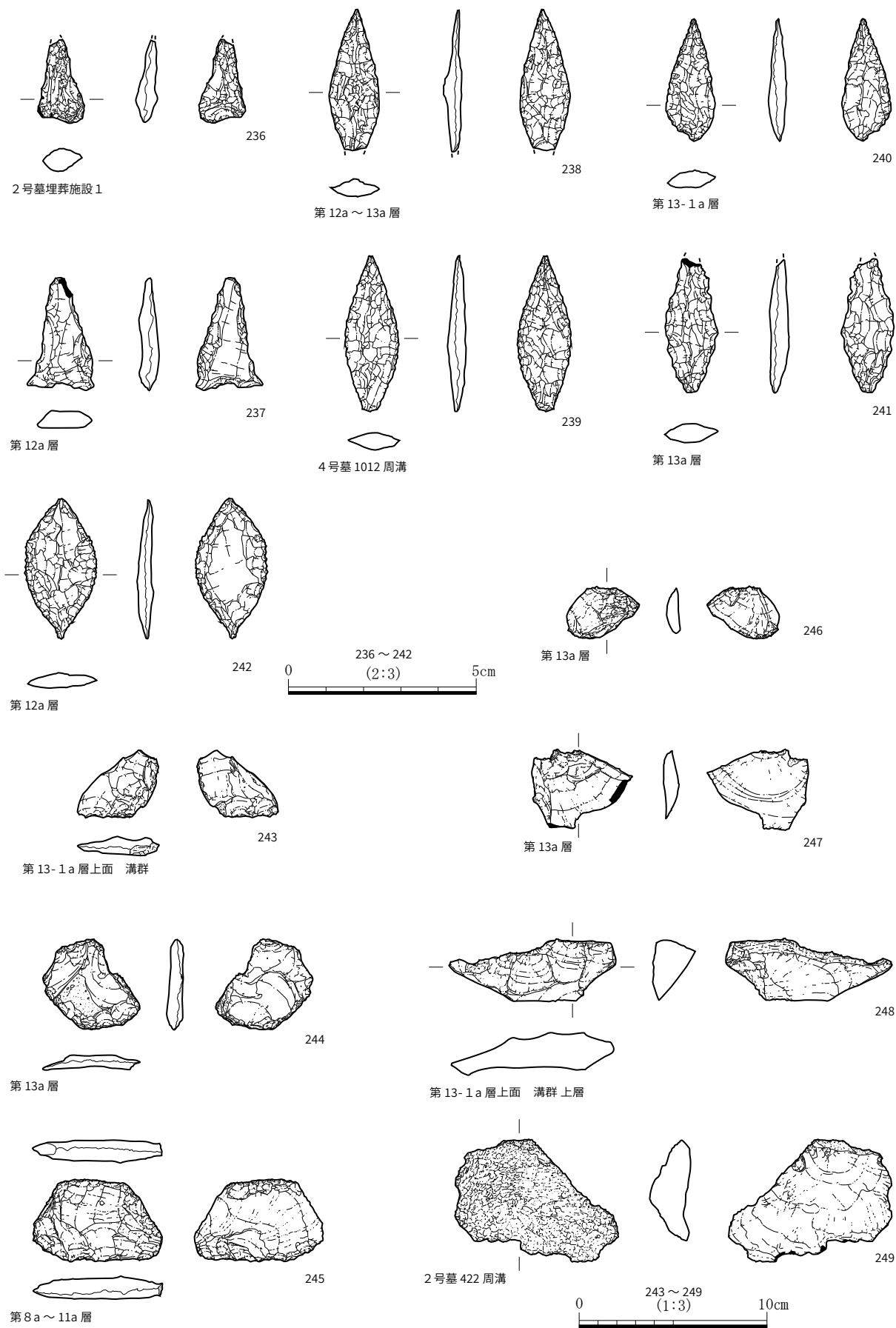


图 75 石器・石製品 (1)

ことを確認しており、弥生時代の遺構である。

1区西部の411溝、2区東部及び中央部の1017・1025溝は、やや振れてはいるものの南北方向に近い溝である。幅は0.6～0.8m、深さは411・1025溝で0.1～0.2m、1017溝で約0.3mである。ただし、411溝は北端部で0.3mと深くなっており、埋土にラミナが認められた。1017溝は、3号墓の1011周溝及び1021・1031溝と重複しており、それらより古い。411溝と1025溝は、それぞれ北側に接する（その8）調査区の245溝と78溝にあたる。1017溝から、突帯を持つ縄紋土器片が出土している。

1010溝は、2区南東隅に位置する、北東-南西方向の溝である。最下部にシルトの薄層を含む極細砂、上部に細砂～粗砂・小礫がみられる。埋土は、砂質が強く、他の遺構埋土とは異質である。西肩部で、平面不定形の1014・1015土坑を検出している。上部の粗砂～小礫混じりシルトから縄紋土器、サヌカイト剥片、砥石（229）が、下部から弥生土器壺（230）が出土している。

1040溝は、2区東部に位置する南北方向の溝である。（その8）調査区の55溝であり、南側は調査区外に続く。検出長約40.3m、幅2.1～3.3m、深さ約1.4mである。埋土には、下部から上部まで、基盤層である第13b層及び第13a層等と思われる比較的大きなブロックを多く含んでおり、埋め戻されたと考えられる。随所にラミナが認められるが、原位置を保っておらず、埋め戻しに使用された第13b層等の基盤層に伴うものと思われる。中央部の断面では、西肩部にブロックを含まない層がみられるが、肩部の基盤層が滑り崩れたものである。3号墓、4号墓、1021・1033溝と重複しており、1040溝が最も古い。遺物は極めて少量で、縄紋土器の小片のほかは、北部の底部において、組み合わせ式鋤身（231）が出土している。樹種同定の結果は、コナラ属アカガシ亜属である。

414土坑は、1区南部に位置する。平面形は不整な楕円形で、南北約1.5m、東西約1.0m、深さ約0.6mである。埋土に、基盤層である第13b層のブロックを含む。

432～437ピットは1区北部、429ピットは1区南部に位置する。いずれも径0.4～0.5m、深さ0.3～0.4mである。1018～1020ピットは、2区東部に位置する。径約0.2m、深さ0.1～0.2mで、1.1～1.2mの間隔で並んでいる。埋土に、焼土片と炭化物を含む。

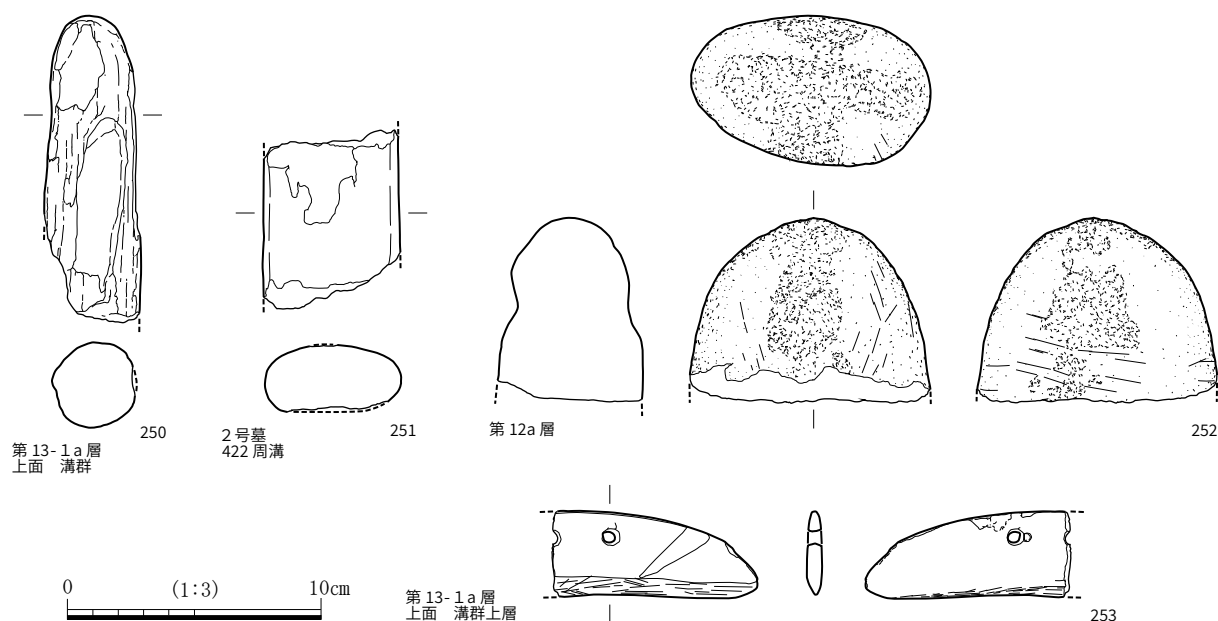
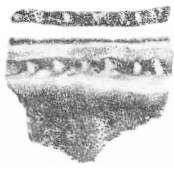
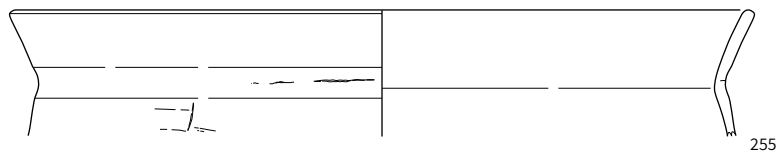
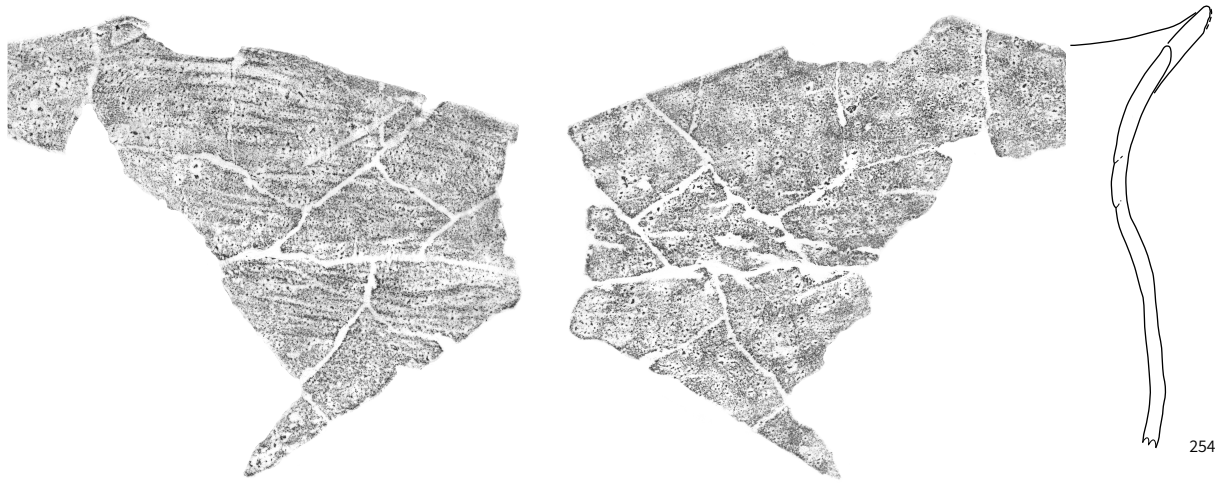
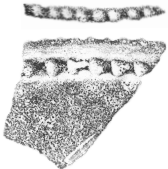


図76 石器・石製品（2）



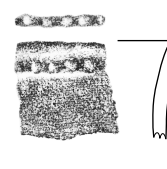
256



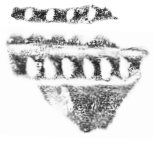
257



258



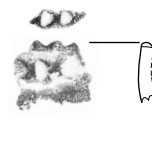
259



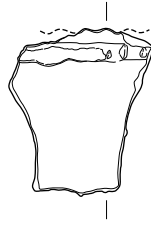
260



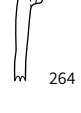
261



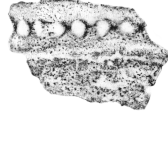
262



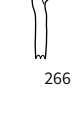
263



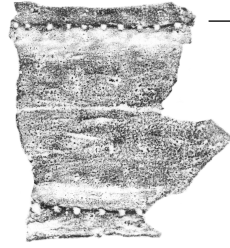
264



265



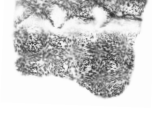
266



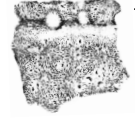
267



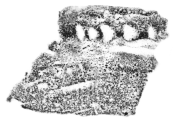
268



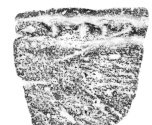
269



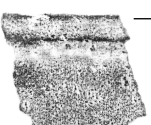
270



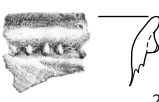
271



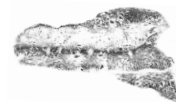
272



273



274



275



276

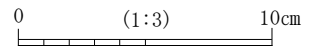


图 77 绳纹土器

第13 a層、第13 - 2 a層出土遺物他（図74～77 図版36）

2区西部の第13 a層からは、弥生土器、縄紋土器、石鏃（241）が出土している。

2区東部の第13 a層からは、弥生土器甕（234・235）、縄紋土器、サヌカイト製スクレイパー（244）・剥片（246）が出土している。甕（235）は、3号墓の墳丘下にあたる位置で出土したもので、後期のものである。

第13 - 2 a層からは、弥生土器、縄紋土器、サヌカイト剥片が出土した。弥生土器鉢（233）は、法面成形の際に出土したもので、第13 - 1 a層上面溝群に伴う可能性もある。後期のものである。

弥生土器鉢（232）は、第11 - 1 a層出土のものであるがここに掲載した。口縁部外面に簾状紋と刺突紋を、体部外面に2段以上の簾状紋と刻み目を持つ棒状浮紋がみられる。中期のものである。

図75・76に石器類を集めた。サヌカイト製の石鏃（236～242）・スクレイパー（243～245）・石核（248・249）・剥片（246・247）、石棒（250・251）、叩き石（252）、石庖丁（253）である。石鏃（236）は、2号墓埋葬施設1の墓壙内で出土した。石鏃（239）は4号墓1012周溝から、石核（249）は2号墓422周溝から出土した。石棒（250）は、1区北部の2J-4b地区の第13-1 a層上面溝から出土し、表面の剥離が著しい。石棒（251）は、2号墓422周溝の最下層から出土した。直下が北側に接する（その8）調査区で報告されている縄紋時代の流路にあたり、その堆積層に含まれていたものと考えられる。石棒はどちらも結晶片岩製である。叩き石（252）は、磨石としても使用されている。石庖丁（253）は、第13 - 1 a層上面溝群上層から出土したものである。

図77に、縄紋土器を集めた。多くが弥生時代以降の層準及び遺構から出土したものである。

2区北東部で出土した深鉢（254）は、波状口縁で、外面に貝殻条痕紋がみられる。1区北西部で出土した深鉢（255）とともに、滋賀里Ⅲa～篠原式で、晩期中葉のものである。深鉢（256～263）は、口縁端部と突帯に刻みを持つ。滋賀里Ⅳ式で、晩期後葉のものである。いずれも1区北部で出土している。1区北部で出土した深鉢（264）及び2区中央部で出土した深鉢（265）は、突帯に刻みを持つ。晩期後葉の船橋式かと思われる。深鉢（266～272）は、突帯に刻みを持つ。長原式で、晩期後葉のものである。1区北部または2区東部で出土している。深鉢（274～276）は、口縁から少し下がった位置にある突帯に、比較的小さい刻みを持つ。晩期後葉の水走タイプかと思われる。いずれも2区東部で出土している。

縄紋土器の出土は、1区北部及び2区東部に限られる。1区北部では、滋賀里Ⅲa式～篠原式、滋賀里Ⅳ式、船橋式、長原式が出土している。特に、2区ではみられない、滋賀里Ⅳ式が目立つ。2区東部では、滋賀里Ⅲa式（～篠原）式、船橋式、長原式、水走タイプが出土している。1区ではみられない水走タイプが含まれる。

第4章 総括

2～4号墓

方形周溝墓（墳丘墓）3基を検出した。調査区西部の2号墓は、（その8）調査区で大部分が検出されていたもので、第13-2a層上面段階に属し、弥生時代中期後葉の時期が与えられている。今回の調査では南周溝の南肩部を検出した。周溝東部の肩部において、舟形の木棺（コナラ属コナラ節）が据えられた、埋葬施設を確認した。

調査区東部の3・4号墓は、第13a層上面段階のもので、（その8）調査区の1号墓の南側に、3号墓、4号墓の順で、南北に並ぶ。1・3号墓は、長軸の方向がほぼ揃い、墳丘等の規模もほぼ同じである。いずれも第12a層段階に削平され、墳丘は遺存していない。3号墓の周溝内墳丘側肩部で、弥生土器広口壺・鉢等が出土しており、弥生時代後期後葉の時期が与えられる。広口壺のうち1点には、体部に波状紋の線刻がみられる。4号墓については、周溝出土遺物が少量の小片で詳細な時期は決定し得ないが、3号墓と同時期または近い時期の可能性がある。

第13-1a層上面の溝群

第13-1a層上面では、北西-南東方向の溝群を検出した。南東部で幅約10mの範囲で並行していた溝群は、北西部において大きく2方向に分かれる。北側に接する（その8）調査区から（その2）・（その1）調査区に向かう群と、西側に接する（その6）調査区から（その5）・（その7）調査区へ向かう群である。遺物が極めて少量で掘削時期は明らかにし得ないが、弥生土器甕（211）は、その出土状況から溝が機能していた時期を示している可能性がある。弥生時代後期のものである。（その8）調査区では、217=277溝出土の弥生時代後期前半の土器が、溝の機能時期を示すものとされている。溝群のなかに時期差が想定されるものの、概ね弥生時代後期には機能していたと考えられ、その後低地として残った上部が埋没するのは6世紀頃と思われる。既往の調査区も含め、検出長約190mに及ぶ長大な溝群であり、広範囲に及ぶ地域の開発に関わるものと考えられる。

条里型地割

遺跡名の通り、周辺には条里型地割が良く残る。今回の調査区内にも、坪境の水路が南北に通っていた。第4a層上面から第12a層上面まで、条里型地割を構成する畦畔、溝等を検出した。

大県郡条里遺跡における最も古い条里遺構は、これまで第11a層段階のものであった。今回の調査では、さらに下位の層準である第12a層段階の条里遺構を確認した。限られた範囲ではあるが、遺構面が第11b層堆積層に被覆されており、畦畔等の遺構群を非常に良好な状態で検出することができた。

第12a層上面の坪境は、南北方向の2条の畦畔（339・340畦畔）と、その間の水路（338溝）で構成される。坪境以西では東西畦畔（341・342畦畔）を2条検出し、その距離は8.1～8.6mである。坪境畦畔（西側）には2箇所水口があり、西側の水田に水を供給していたと思われる。東西畦畔にも石を据え置いた水口が設けられており、水田間で水をかけ流していたこともわかる。

遺構面の時期については、第11b層出土遺物にそれを示すものはない。第12a層は、上部と下部でやや土質が異なっており、堆積を繰り返しながら比較的長期間続いた土壌層と考えられる。6～8世紀の遺物が含まれており、なかでも7～8世紀のものが多い。

北側の（その8）調査区では、本調査区の坪境遺構を延長した箇所は、弥生時代の方形周溝墓墳丘が

高まりとして残っている部分にあたる。坪境延長線上付近にあたる、高まりの南端と北端において、8世紀代の土師器杯が埋納された遺構（228・256土坑）が確認されている。8世紀には、この場所が坪境として認識されていた可能性がある。

第12 a層には、8世紀の遺物とともに、7世紀の遺物も一定数含まれている。（その8）調査区では、本調査区と接する箇所、7世紀の土師器杯が重なった状態で出土している。これらのことは、この範囲の開発が7世紀まで遡る可能性も示唆している。

第12 a層段階以降については、第12 a層上面の西側畦畔（339畦畔）が、第11 - 2 a層上面以降も、坪境畦畔として踏襲される。図8断面図で、少なくとも第9 a層段階までは、周囲より高い状態であった可能性があることがわかる。さらに、その西側に沿うように、第7 a層上面79溝が掘削されていることから、その段階まで同位置が踏襲されていたと考えられる。「第7 a層上面79溝東部遺構群」の項に詳述したが、第7 a層段階の間に79溝が埋まり、その東部が道として使用される。その段階を経て、第6 a層上面では、第7 a層段階に道であった範囲の東端部分に、坪境畦畔（58畦畔）が築かれるのである。その後は、第5 - 1 a層及び第5 - 2 a層上面では溝、第4 a層上面では畦畔となるが、坪境の位置はほぼ同じ位置が踏襲され、現代の水路にいたる。

坪境の移動は、東へ約4 mである。発端は、それまで同じ位置に畦畔が踏襲されてきた坪境に、第7 a層段階に比較的大規模な79溝が掘削されたことである。この13世紀後葉を中心とする時期は、地域の開発における画期として捉え得ると考えられる。なお、坪境畦畔の方位については、各遺構面のものを測定したが大きな差は認められず、変化していない。

坪内を区画する畦畔については、第11 - 1・2 a層段階では遺構面の遺存状況が不良で確認できなかったが、第10 a層段階以降においても第12 a層段階とほぼ同じ位置を踏襲している。東西方向の長地型を基本とする。ただ、最も遺構面の遺存状況が良好であった第4 a層上面では、南北方向の畦畔もみられた。南北方向の畦畔が、恒常的に変わらない東西方向の畦畔に対してやや不安定なものであるとすれば、遺存状況の良くない遺構面では検出し得ていない可能性がある。

なお、坪境の東側については、第12 a層段階には水田ではない可能性がある。条里遺構の有無については、遺構面の遺存状況から不明といわざるを得ないが、第11 - 2 a層段階に条里に対して斜行する溝（328・331・332溝）がみられ、第12 a層段階の高まり（盛土か）の位置と対応している。溝は北側の（その8）調査区にも続いており、幅約1.5 mの道路状遺構である可能性が指摘されている。

坪境以東で、畦畔を検出した最も下位の遺構面は、第11 - 1 a層上面である。10世紀を中心として11世紀前・中葉までにあたる。この段階には調査区東部でも擬似畦畔を検出しており、畦畔が存在した可能性がある。なお、第11 - 1 a層上面で検出した擬似畦畔2条は、第10 a層段階の畦畔の存在を示す可能性があるが、遺構面を越えて踏襲される東西畦畔間をほぼ等分する位置にあたっている。地形の高い坪境東側では、古い段階においては、東西畦畔が狭い間隔で設けられていた可能性も考えられる。

条里遺構面ではほかに、第6 a層上面及び第5 - 1 a層上面において、畝間溝群を検出した。土地利用の一端を示す資料である。また、第7 a層上面79溝東部遺構群については、各地で報告されている道路状遺構に伴う「波板状凹凸面」の一例と考えられる。遺構間距離の測定結果は、一定の数値を示しており、坪境で検出された例として、興味深いものといえる。

参考文献

東 和幸 2003 「波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論」『研究紀要 縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

表1 掲載土器・土製品等一覧表(1)

遺物番号	挿図	写真 図版	種類 器種	区	出土遺構 層位・地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	調整等
1	13		土師器 皿	1	第4a層 2J-5b	(10.8)	<1.7>	—	口縁15	反転復元	外:10YR3/1 黒褐 内:5YR6/4 にぶい橙 断:5YR6/4 にぶい橙	外面スス付着
3	18		土師器 皿	1	第5-2a~2b層 2J-5a	(17.2)	<3.1>	—	口縁15	反転復元	外:10YR5/1 褐灰 内:10YR5/2 灰黄褐 断:10YR4/1 褐灰・ 10YR6/2 灰黄褐	
4	18		須恵器 鉢	1	第5-2a層下面 56溝 2J-4d	(14.8)	<4.4>	—	口縁15	反転復元	外:2.5Y6/1 黄灰 内:5Y7/1 灰白 断:5Y7/1 灰白	口縁部横ナデ 体部外面ケズリ 内面剥離著しく調整等不明
5	18		瓦質土器 甕	1	第5a~5-2b層 2J-3b	(18.8)	<4.0>	—	口縁10	反転復元	外:2.5Y5/1 黄灰 内:2.5Y7/2 灰黄 断:2.5Y7/2 灰黄	口縁部横ナデ 体部外面タタキ 内面剥離のため調整不明 焼成不良
7	18	30	軒丸瓦	2	第5a層 1J-9a	径 (19.2)	—	—	瓦当15		外:10YR6/3 にぶい黄橙 内:10YR6/3 にぶい黄橙 断:2.5Y6/3 にぶい黄	遺存状態不良、裏面全体割れまたは剥離 外縁の外側に平坦面 外区に珠紋帯、内区のY字状盛り上がりは蓮華紋の間弁か
9	22		土師器 皿	1	第5-2b~6a層 2J-2a	(10.0)	<2.1>	—	口縁20	反転復元	外:10YR6/2 灰黄褐 内:10YR6/2 灰黄褐 断:10YR6/2 灰黄褐	
10	22		瓦器 碗	1	第5-2b層 2J-6c	(8.2)	<3.1>	—	口縁20	反転復元	外:N4/0 灰 内:N4/0 灰 断:2.5Y7/1 灰白	口縁部横ナデ 内面ナデ、暗紋 外面粗い指オサエのち粗いミガキ
11	22		瓦質土器 羽釜	1	第5-2b層 2J-4c	(17.2)	<8.5>	—	口縁5以下	傾き不定 反転復元	外:2.5Y3/1 黒褐 内:2.5Y3/1 黒褐 断:2.5Y7/2 灰黄	内面ハケのち口縁部横ナデ 体部外面ケズリ、スス付着
12	22		瓦質土器 羽釜	1	第5-2b層 2J-3c	鏝 (24.5)	<4.7>	—	5以下	傾き不定 反転復元	外:N3/0 暗灰 内:N3/0 暗灰 断:2.5Y6/1 黄灰	内面ハケ 体部外面ケズリ
13	22		瓦質土器 播鉢	1	第5-2b層 2J-4d	(35.0)	<5.9>	—	口縁5	反転復元	外:2.5Y5/1 黄灰 内:2.5Y5/1 黄灰 断:10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部横ナデ 内面摩擦、播目1条7本以上 体部外面粗いケズリのち粗いナデ
19	24		土師器 皿	1	第6a層 2J-2c	(8.4)	1.2	—	口縁30	反転復元	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:10YR7/3 にぶい黄橙 断:5YR7/4 にぶい橙	外面に接合痕
20	24		土師器 皿	1	第6a層 1J-10d	(8.4)	1.2	—	口縁15	反転復元	外:2.5Y6/2 灰黄 内:2.5Y6/2 灰黄 断:2.5Y6/2 灰黄	
21	24		土師器 皿	1	第6a層 2J-2d	(7.6)	1.3	—	口縁15	反転復元	外:2.5Y6/2 灰黄 内:2.5Y6/2 灰黄 断:2.5Y6/2 灰黄	
22	24		土師器 皿	1	第6a層 2J-2e	(7.6)	1.4	—	口縁15	反転復元	外:2.5Y8/2 灰白 内:2.5Y8/2 灰白 断:2.5Y8/2 灰白	
23	24		土師器 皿	1	第6a層 2J-2c	(10.0)	2.2	—	口縁25	反転復元	外:7.5YR7/4 にぶい橙 内:10YR5/2 灰黄褐 断:5YR6/4 にぶい橙	口縁部内面に平行線状の調整痕、 ハケ状工具または布等を使用したか 体部内面及び外面摩擦
24	24		土師器 皿	1	第6a層 2J-1a・2a	12.4	1.9	—	口縁20 全体75	反転復元	外:10YR6/3 にぶい黄橙 内:10YR6/3 にぶい黄橙 断:7.5YR6/4 にぶい橙	
25	24		瓦器 碗	1	第6a層 2J-3c	(10.2)	2.7	—	口縁20 全体40	反転復元 (口縁)	外:2.5Y6/1 黄灰 内:2.5Y6/1 黄灰 断:2.5Y7/1 灰白	口縁部横ナデ 体部内面ナデのち暗紋 体部外面指オサエ
26	24		瓦器 碗	1	第6a層 2J-4c	(10.4)	<2.2>	—	口縁25	反転復元	外:N5/0 灰 内:N5/0 灰 断:5Y7/1 灰白	口縁部横ナデ 体部内面ナデのち暗紋 体部外面指オサエ
27	24		瓦器 碗	1	第6a層 2J-2c	—	<0.7>	2.4	高台 100 全体10		外:2.5Y7/1 灰白 内:2.5Y7/1 灰白 断:2.5Y7/1 灰白	全体的に摩擦気味 内面にための暗紋
28	24		瓦器 碗	1	第6a層 2J-5a	(7.8)	<3.6>	—	口縁15	反転復元	外:2.5Y7/1 灰白 内:2.5Y7/1 灰白 断:2.5Y7/1 灰白	口縁部内面に段 内面ナデのち暗紋 外面指オサエ
29	24		須恵器 鉢	1	第6a層 2J-2d	(28.0)	<5.9>	—	口縁15	反転復元	外:N5/0 灰 内:N5/0 灰 断:N5/0 灰	
30	24		土師器 鍋	1	第6a層 2J-2e	(26.0)	<4.1>	—	口縁10	反転復元	外:2.5Y7/2 灰黄 内:2.5Y7/2 灰黄 断:5Y3/1 オリーブ黒	
31	24		瓦質土器 羽釜	1	第6a層 2J-4c	(27.2)	<5.8>	—	口縁10	反転復元	外:2.5Y4/1 黄灰 内:2.5Y2/1 黒 断:7.5YR6/2 灰褐	口縁部横ナデ 体部内面ハケ スス付着
32	24		白磁 碗	1	第6a層 2J-2d	(18.0)	<4.0>	—	口縁10	反転復元	外:5Y7/1 灰白(釉) 内:5Y7/1 灰白(釉) 断:N8/0 灰白	釉薄い

表2 掲載土器・土製品等一覧表(2)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	区	出土遺構層位・地区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	調整等
33	24		青磁碗	1	第6a層 2J-3a	—	<2.0>	(4.0)	高台50 全体10	反転復元	外:7.5GY7/1 明緑灰(釉) 2.5Y6/1 黄灰(露胎) 内:7.5GY7/1 明緑灰(釉) 断:N7/0 灰白	内面見込みと体部との境に極めて緩い段見込みに花紋 高台畳付及びその内部は露胎
34	24		土師器(脚)	2	第6a~8a層 1J-7d	—	<3.8>	(3.2)	脚部80	反転復元(体部)	外:2.5Y6/2 灰黄 内:2.5Y6/2 灰黄 断:5YR5/6 明赤褐	
35	24		平瓦	1	第6a~11a層 2J-4d	長<12.3>	幅<15.0>	厚2.4	20		凹:5Y7/1 灰白 凸:N4/0 灰 断:5Y7/1 灰白	凹面糸切り痕、布目、離れ砂付着 凸面縄叩き目
36	26		土師器皿	1	第7a層上面 79 溝東部遺構群 86 ビット	(7.4)	1.4	—	口縁45	反転復元	外:2.5Y7/2 灰黄 内:2.5Y7/2 灰黄 断:2.5Y7/2 灰黄	
37	26		土師器皿	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-5d	(8.4)	1.6	—	口縁15	反転復元	外:2.5Y6/2 灰黄 内:2.5Y6/2 灰黄 断:2.5Y6/2 灰黄	
38	26		土師器皿	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-4d	(11.4)	<1.9>	—	口縁15	反転復元	外:7.5YR7/4 にぶい橙 内:7.5YR7/4 にぶい橙 断:10YR6/1 褐灰	
39	26		土師器皿	1	第7a層上面 79 溝下層 2J-4b・5b	(14.2)	<2.7>	—	口縁15	反転復元	外:10YR4/1 褐灰 内:10YR7/2 にぶい黄橙 断:10YR7/1 灰白	
40	26		土師器皿	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-4d	(13.6)	2.7	—	口縁10	反転復元	外:2.5Y6/2 灰黄 内:2.5Y6/2 灰黄 断:2.5Y6/2 灰黄	
41	26		瓦器皿	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-5d	(8.0)	1.5	—	口縁25	反転復元	外:N5/0 灰 内:5Y7/1 灰白 断:5Y7/1 灰白	
42	26		瓦器皿	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-5d	(8.2)	1.4	—	口縁30	反転復元	外:N5/0 灰 内:N5/0 灰 断:N8/0 灰白	
43	26		瓦器碗	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-5d	(14.6)	<3.8>	—	口縁15	反転復元	外:N4/0 灰 内:N4/0 灰 断:N8/0 灰白	口縁端部内面に段 内外面に細いミガキ
44	26		瓦器碗	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-4b	(9.6)	<2.8>	—	口縁30	反転復元	外:N5/0 灰 内:N5/0 灰 断:N8/0 灰白	内面の暗紋の太さ、口縁部は1mm未満、それ以外は3mm
45	26		瓦器碗	1	第7a層上面 79 溝(26層) 2J-4c	(11.2)	<2.7>	—	口縁40	反転復元	外:2.5Y7/1 灰白 内:2.5Y7/1 灰白 断:5YR7/2 明褐灰	
46	26		瓦器碗	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-4c	—	<0.8>	(2.5)	高台50	反転復元	外:N5/0 灰 内:N5/0 灰 断:5Y7/1 灰白	内面に太い暗紋
47	26		白磁皿	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-4c	(9.2)	<1.8>	—	口縁10	反転復元	外:10Y8/1 灰白(釉)・ 2.5Y7/2 灰黄(露胎) 内:10Y8/1 灰白(釉) 断:10Y8/1 灰白	内外面施釉 口縁端部の釉掻き取り
48	26		青磁碗	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-4e	(15.2)	<4.8>	—	口縁15	反転復元	外:7.5Y6/2 灰オリーブ(釉) 内:7.5Y6/2 灰オリーブ(釉) 断:N7/0 灰白	内面に紋様を片彫り、雲紋か
49	26		青磁壺等	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-4b	(6.0)	<2.6>	—	口縁15	反転復元	外:5Y6/2 灰オリーブ(釉)・ 5Y6/1 灰(露胎) 内:7.5Y7/1 灰白(釉) 断:5Y6/1 灰	口縁端面の釉掻き取り
50	26		土師器(脚)	1	第7a層上面 79 溝(26層) 2J-4b	—	<3.6>	5.3	脚部100		外:10YR6/2 灰黄褐 内:10YR6/2 灰黄褐 断:10YR7/2 にぶい黄橙	
51	26		土師器鍋	1	第7a層上面 79 溝(26層) 2J-4c	(28.8)	<3.3>	—	口縁15	反転復元	外:10YR5/2 灰黄褐 内:10YR7/2 にぶい黄橙 断:5Y8/1 灰白	口縁部横ナデ 体部内面ナデ 体部外面工具痕 スス付着
53	26	30	軒丸瓦	1	第7a層上面 79 溝上層 2J-4c	径(15.7)	—	厚2.3	瓦当50		外:2.5Y6/2 灰黄 内:2.5Y5/1 黄灰 断:5Y7/1 灰白	外区に珠紋 内区に梵字「キリク」 瓦当裏面粗いナデ、丸瓦を差し込んだ溝状のほり込み
54	26	31	平瓦	1	第7a層上面 79 溝下層 2J-4d	長<12.3>	幅<12.0>	厚2.2	20		凹:5Y6/1 灰 凸:5Y6/1 灰 断:5Y6/1 灰	凹面模骨痕、布目 凸面縄叩き目
55	30		土師器皿	1	第7a~8a層 2J-4b	(9.2)	1.7	—	口縁40	反転復元	外:2.5Y7/3 浅黄 内:2.5Y7/3 浅黄 断:10YR5/3 にぶい黄褐	
56	30		土師器皿	1	第7a~8a層 2J-2c	(9.0)	1.7	—	口縁40	反転復元	外:2.5Y6/3 にぶい黄 内:2.5Y6/3 にぶい黄 断:2.5Y6/3 にぶい黄	
57	30		土師器皿	1	第7a~8a層 2J-6a	(10.0)	2.3	—	口縁15	反転復元	外:10YR5/2 灰黄褐 内:10YR5/2 灰黄褐 断:10YR6/3 にぶい黄橙	

表3 掲載土器・土製品等一覧表(3)

遺物 番号	挿図	写真 図版	種類 器種	区	出土遺構 層位・地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	調整等
58	30		土師器 皿	1	第7a～8a層 2J-3a	(8.4)	1.3	—	口縁15	反転復元	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:10YR7/3 にぶい黄橙 断:5YR7/4 にぶい橙	
59	30		土師器 皿	1	第7a～8a層 2J-4d	(8.2)	1.3	—	口縁30	反転復元	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:10YR7/3 にぶい黄橙 断:10YR7/3 にぶい黄橙	
60	30		土師器 皿	1	第7a～8a層 2J-5e	(8.8)	1.3	—	口縁40	反転復元	外:5Y7/2 灰白 内:5Y7/2 灰白 断:5Y7/2 灰白	
61	30		土師器 皿	1	第7a～8a層 2J-2c	(8.0)	1.5	—	口縁25	反転復元	外:10YR6/2 灰黄褐 内:10YR6/2 灰黄褐 断:7.5YR5/3 にぶい褐	
62	30		土師器 皿	1	第7a～8a層 2J-5c	(13.4)	<2.8>	—	口縁10	反転復元	外:2.5Y7/2 灰黄 内:2.5Y7/2 灰黄 断:2.5Y7/2 灰黄	
63	30		土師器 皿	1	第7a～8a層 2J-2b	(13.2)	<2.1>	—	口縁10	反転復元	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:10YR7/3 にぶい黄橙 断:10YR7/3 にぶい黄橙	
64	30		瓦器 皿	1	第7a～8a層 2J-5c	(9.0)	1.5	—	口縁25	反転復元	外:N4/0 灰 内:N4/0 灰 断:N8/0 灰白	摩耗しておりミガキ不明瞭
65	30		瓦器 皿	1	第7a～8a層 2J-6b	(8.2)	1.8	—	口縁20	反転復元	外:N5/0 灰 内:N5/0 灰 断:5Y7/1 灰白	
66	30		瓦器 碗	1	第7a～8a層 2J-3a	(14.2)	<4.8>	—	口縁15	反転復元	外:N4/0 灰 内:N4/0 灰 断:2.5Y8/1 灰白	口縁端部内面に段 内外面に細いミガキ
67	30		瓦器 碗	1	第7a～8a層 2J-5c	(10.4)	<2.9>	—	口縁20	反転復元	外:2.5Y7/1 灰白・ N4/0 灰 内:2.5Y7/1 灰白・ N4/0 灰 断:N8/0 灰白	ミガキため(2mm)
68	30		白磁 皿	1	第7a～8a層 2J-5c	(10.6)	<1.8>	—	口縁10	反転復元	外:5Y6/2 灰オリーブ(釉)・ 5Y6/1 灰(露胎) 内:5Y6/2 灰オリーブ(釉) 断:5Y7/1 灰白	
69	30		白磁 碗	1	第7a～8a層 2J-6d	(15.8)	<3.5>	—	口縁15	反転復元	外:2.5Y8/2 灰白(釉)・ 2.5Y7/1 灰白(露胎) 内:2.5Y8/2 灰白(釉) 断:2.5Y8/2 灰白	
70	30		白磁 碗	1	第7a～8a層 2J-5b	—	<2.1>	(6.4)	高台30	反転復元	外:5Y7/2 灰白(釉)・ 2.5Y7/1 灰白(露胎) 内:5Y7/2 灰白(釉) 断:2.5Y7/1 灰白	畳付平滑
73	30	31	平瓦	1	第7a～8a層 2J-7c	長 <12.5>	幅 <7.9>	厚 1.9			凹:10YR6/2 灰黄褐 凸:10YR7/2 にぶい黄橙 断:2.5Y7/1 灰白	凹面摩耗、布目 凸面綾杉叩き目
74	33		土師器 皿	1	第9a層 2J-4b	(8.2)	1.6	—	口縁20	反転復元	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:10YR7/3 にぶい黄橙 断:10YR5/3 にぶい黄褐	
75	33		土師器 皿	2	第9a層 1J-6b	(8.2)	<1.5>	—	口縁30	反転復元	外:2.5YR6/4 にぶい橙 内:2.5Y6/2 灰黄 断:2.5Y6/3 にぶい黄	
76	33		土師器 皿	2	第9a層 1J-8b	(8.0)	1.5	—	口縁20	反転復元	外:2.5Y6/2 灰黄 内:2.5Y6/2 灰黄 断:2.5Y6/2 灰黄	
77	33		土師器 皿	1	第9a層 2J-5d	(8.2)	1.4	—	口縁20	反転復元	外:10YR6/2 灰黄褐 内:10YR6/2 灰黄褐 断:7.5YR6/3 にぶい褐	
78	33		土師器 皿	1	第9a層 2J-3d	(8.2)	1.1	—	口縁25	反転復元	外:2.5Y7/3 浅黄 内:2.5Y7/3 浅黄 断:2.5Y7/3 浅黄	
79	33		土師器 皿	1	第9a層 2J-5d	(10.4)	1.0	—	口縁10	反転復元	外:5Y7/2 灰白 内:5Y7/2 灰白 断:10YR6/2 灰黄褐	
80	33		土師器 皿	2	第9a層 1J-8b	(8.0)	1.4	—	口縁20	反転復元	外:2.5Y7/2 灰黄 内:2.5Y7/2 灰黄 断:2.5Y6/2 灰黄	
81	33		土師器 皿	2	第9a層 1J-9a	(8.0)	1.8	—	口縁15	反転復元	外:10YR6/3 にぶい黄橙 内:10YR6/3 にぶい黄橙 断:10YR5/3 にぶい黄褐	
82	33		土師器 皿	2	第9a層 1J-6b	(8.2)	1.2	—	口縁15	反転復元	外:10YR6/2 灰黄褐 内:10YR6/2 灰黄褐 断:10YR6/2 灰黄褐	
83	33		土師器 皿	1	第9a層 2J-6b	(8.4)	1.5	—	口縁30	反転復元	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:10YR7/3 にぶい黄橙 断:10YR7/3 にぶい黄橙	粘土接合痕

表4 掲載土器・土製品等一覧表(4)

遺物番号	挿図	写真 図版	種類 器種	区	出土遺構 層位・地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	調整等
84	33		土師器 皿	1	第9a層 2J-5d	(16.0)	<2.5>	—	口縁15	反転復元	外: 7.5YR7/4 にぶい橙 内: 7.5YR7/4 にぶい橙 断: 5Y6/1 灰	
85	33		土師器 皿	1	第9a層 2J-5a	(13.6)	2.4	—	口縁10	反転復元	外: 10YR7/3 にぶい黄橙 内: 10YR7/3 にぶい黄橙 断: 2.5Y5/1 黄灰	
86	33		土師器 皿	1	第9a層 2J-4d	(17.4)	<2.4>	—	口縁10	反転復元	外: 2.5Y5/2 暗灰黄 内: 2.5Y5/2 暗灰黄 断: 2.5Y5/2 暗灰黄	
87	33		土師器 皿	2	第9a層 1J-8b	(13.2)	<2.9>	—	口縁15	反転復元	外: 10YR7/3 にぶい黄橙 内: 2.5Y7/1 灰白 断: 2.5Y5/1 黄灰	
88	33		瓦器 碗	1	第9a層 2J-4d	(14.4)	<4.3>	—	口縁20	反転復元	外: 2.5Y7/1 灰白・ N4/0 灰 内: 2.5Y7/1 灰白 断: 5Y8/1 灰白	外面分割ミガキ
89	33		瓦器 碗	2	第9a層 1J-4b	(11.2)	<2.7>	—	口縁20	反転復元	外: 7.5Y5/1 灰 内: 7.5Y5/1 灰 断: 5Y7/1 灰白	
90	33		瓦器 碗	1	第9a層 2J-5a	(12.0)	<2.4>	—	口縁15	反転復元	外: 5Y7/1 灰白 内: 5Y7/1 灰白 断: 5Y7/1 灰白	
91	33		瓦器 碗	1	第9a層 2J-6a	—	<1.6>	(4.6)	高台50	反転復元 (体部)	外: N4/0 灰 内: N4/0 灰 断: N7/0 灰白	
92	33		瓦器 碗	1	第9a層 2J-4d	—	<1.4>	5.4	高台60		外: N4/0 灰 内: N4/0 灰 断: 2.5Y7/1 灰白	
93	33		瓦器 碗	1	第9a層 2J-5d	—	<1.7>	(5.0)	高台40	反転復元	外: 5Y7/1 灰白 内: 5Y7/1 灰白 断: 5Y7/1 灰白	
94	33		瓦器 碗	2	第9a層 1J-9d	—	<0.8>	3.0	高台70		外: 2.5Y7/1 灰白 内: 5Y4/1 灰 断: 2.5Y7/1 灰白	
95	33		平瓦	1	第9a層 2J-7c	長 <11.7>	幅 <8.1>	厚 2.3			凹: N5/0 灰 凸: N5/0 灰 断: 5Y6/1 灰	凹面布目 凸面縄叩き目、離れ砂付着
96	33		平瓦	1	第9a～13a層 2J-5e	長 <9.0>	幅 <15.0>	厚2.6 ～2.9			凹: 10YR6/2 灰黄褐 凸: 2.5Y7/1 灰白 断: 2.5Y6/1 黄灰	凹面布目、模骨痕 凸面摩耗、叩き目なし
99	36		土師器 皿	1	第10a層 2J-4b	(9.2)	1.4	—	口縁45	反転復元	外: 10YR7/3 にぶい黄橙 内: 10YR7/3 にぶい黄橙 断: 10YR7/3 にぶい黄橙	
100	36		土師器 皿	1	第10a層 2J-3a	(9.4)	1.6	—	口縁25	反転復元	外: 10YR7/3 にぶい黄橙 内: 10YR7/3 にぶい黄橙 断: 7.5YR6/4 にぶい橙	
101	36		土師器 皿	2	第10a層 1J-7b	(7.0)	1.1	—	口縁25	反転復元	外: 2.5Y6/2 灰黄 内: 2.5Y6/2 灰黄 断: 2.5Y6/2 灰黄	
102	36		土師器 皿	1	第10a層 2J-4d	(10.2)	<1.7>	—	口縁20	反転復元	外: 2.5Y6/3 にぶい黄 内: 2.5Y6/3 にぶい黄 断: 2.5Y6/3 にぶい黄	
103	36		土師器 皿	1	第10a層 2J-5a	(9.6)	<1.4>	—	口縁15	反転復元	外: 2.5Y7/2 灰黄 内: 2.5Y7/2 灰黄 断: 2.5Y7/2 灰黄	
104	36		土師器 皿	1	第10a層 2J-5c	(13.2)	<2.3>	—	口縁10	反転復元	外: 7.5YR7/3 にぶい橙 内: 7.5YR6/4 にぶい橙 断: N6/0 灰	
105	36		土師器 皿	1	第10a層 2J-5b	(15.0)	3.4	—	口縁30	反転復元	外: 7.5YR8/3 浅黄橙 内: 7.5YR8/3 浅黄橙 断: 2.5Y7/2 灰黄	
106	36		回転台 土師器 皿か	1	第10a層 2J-6a	—	—	—			外: 7.5YR7/4 にぶい橙 内: 7.5YR7/4 にぶい橙 断: 10YR7/2 にぶい黄橙	底部片 内面回転ナデ 外面糸切り離し
107	36		黒色土器 A類 碗	1	第10a層 2J-5d	(16.2)	<5.3>	—	口縁10	反転復元	外: 10YR6/4 にぶい黄橙 内: N3/0 暗灰 断: 2.5Y6/2 灰黄	器壁厚い 外面摩耗しており調整等不明
108	36		瓦器 碗	2	第10a層 1J-6c	—	<1.6>	5.4	高台80	反転復元 (高台以外)	外: N4/0 灰 内: N4/0 灰 断: 5Y7/1 灰白	体部外面下部(高台近く)までミ ガキあり
109	36		瓦器 碗	1	第10a～13-2a層 2J-7e	(15.3)	6.0	7.1	口縁25 高台90 全体30	反転復元 (高台以外)	外: N3/0 暗灰 内: N3/0 暗灰 断: 5Y8/1 灰白	内面のミガキは体部(圏線)、体 部下半から見込み(ジグザグか)、 口縁から体部上部(圏線)の順に 施す 外面は分割ミガキ、のち口縁から 体部上部に施す

表5 掲載土器・土製品等一覧表(5)

遺物番号	挿図	写真 図版	種類 器種	区	出土遺構 層位・地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	調整等
110	36	32	瓦器 碗	1	第10a層 2J-5d	(15.2)	<4.6>	—	口縁20	反転復元	外：N3/0 暗灰 内：N3/0 暗灰 断：5Y7/1 灰白	口縁端部内面にわずかに段あり 内外面に細いミガキを密に施す 外面分割ミガキ
111	36	32	瓦器 碗	2	第10a層 1J-9d	(15.8)	5.7	(5.4)	口縁10 高台25 全体20	反転復元	外：N4/0 灰 内：N4/0 灰 断：2.5Y7/1 灰白	内外面に比較的太いミガキ
112	36		白磁 碗	1	第10a層 2J-2a	—	<2.7>	(6.6)	高台10	反転復元	外：5Y7/2 灰白(釉)・ 5Y8/1 灰白(露胎) 内：5Y7/2 灰白(釉) 断：5Y8/1 灰白	体部外面下半まで施釉
113	36		白磁 碗	1	第10a層 2J-2a	—	<4.1>	(7.8)	高台15	反転復元	外：5Y7/2 灰白(釉)・ 5Y8/1 灰白(露胎) 内：5Y7/2 灰白(釉) 断：5Y8/1 灰白	見込みに沈線 体部外面下半まで施釉 畳付平滑
114	36		須恵器 鉢	2	第10a層 1J-6b	(29.0)	<3.3>	—	口縁10	反転復元	外：N6/0 灰 内：N6/0 灰 断：N6/0 灰	
115	36		土師器 (脚)	2	第10a層 1J-6c	—	<3.4>	3.8	脚部80		外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：10YR7/3 にぶい黄橙	
116	36	32	土製品 珠	2	第10a層 1J-4c	径1.8 ~2.0	高 1.8	—	100		2.5Y7/2 灰黄	上下両面やや窪み気味に平坦 側面緩やかな面取り
120	41	32	土師器 皿	1	第11-1a層 2J-3b	(8.6)	1.4	—	口縁20	反転復元	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：10YR7/3 にぶい黄橙	外面に接合痕
121	41		土師器 (脚)	1	第11-1a層 2J-5b	—	<4.3>	4.5	脚部95		外：2.5Y7/2 灰黄 内：2.5Y7/2 灰黄 断：5Y4/1 灰	
122	41		黒色土器 A類 碗	1	第11-1a層 2J-3b	—	—	—	口縁10	傾き不定	外：10YR7/4 にぶい黄橙・ 2.5Y2/1 黒 内：2.5Y2/1 黒 断：10YR8/3 浅黄橙	器壁厚い
123	41		黒色土器 A類 碗	1	第11-1a層下面 293溝 2J-4c	—	<1.6>	6.9	高台50		外：2.5Y6/2 灰黄 内：N3/0 暗灰 断：2.5Y6/2 灰黄	見込みに暗紋、のち体部に圏線ミ ガキを施す
124	41	32	土師器 皿	2	第11a~12a層 1J-7c	(9.4)	<1.4>	—	口縁25	反転復元	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：10YR7/3 にぶい黄橙	
125	41		土師器 皿	2	第11a層 1J-7c	(10.4)	1.3	—	口縁10	反転復元	外：7.5YR7/3 にぶい橙 内：7.5YR7/3 にぶい橙 断：2.5Y7/1 灰白	
126	41	32	土師器 皿	2	第11a~13a層 1J-6c	(9.4)	1.4	—	口縁30	反転復元	外：7.5YR8/3 浅黄橙 内：7.5YR8/3 浅黄橙 断：7.5YR8/3 浅黄橙	
127	41		土師器 皿	2	第11a層 1J-8d	(9.2)	<1.7>	—	口縁15	反転復元	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：2.5Y6/2 灰黄	
128	41		土師器 (高台)	2	第11a層 1J-9a	—	<2.6>	7.0	高台80		外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR3/1 黒褐 断：7.5YR7/4 にぶい橙	鉢等の高台か 全体的に表面に淡く炭素吸着 見込み摩耗しており調整等不明
129	41		黒色土器 A類 碗	2	第11a層 1J-5d	—	<1.4>	(6.6)	高台30	反転復元	外：2.5Y7/2 灰黄 内：N3/0 暗灰 断：2.5Y7/2 灰黄	内面にミガキ
130	41	32	瓦器 皿	2	第11a層 1J-4a	(10.4)	1.9	—	口縁25	反転復元	外：N5/0 灰 内：N5/0 灰 断：5Y7/1 灰白	見込みに暗紋、のち体部に圏線ミ ガキを施す 底部外面にミガキ(ジグザグ状か) あり 全体的にミガキ細め
132	41		土師器 皿	1	第11-2a層 2J-1a	(8.0)	<2.0>	—	口縁20	反転復元	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR5/2 灰黄褐 断：10YR6/2 灰黄褐	内外面とも摩耗気味
133	41		土師器 杯	1	第11-2a層 2J-3c	(11.8)	3.4	—	口縁20	反転復元	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：10YR7/3 にぶい黄橙	内外面とも表面剥離しており、調 整等不明
134	41		土師器 杯	1	第11-2a層 2J-4b	—	<3.6>	—	口縁10		外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙 断：10YR5/3 にぶい黄褐	内面2段斜放射状暗紋 外面ミガキ
135	41		土師器 (高台)	1	第11-2a層 2J-6d	—	<1.9>	(10.6)	高台30	反転復元	外：2.5Y7/4 浅黄 内：2.5Y7/4 浅黄 断：7.5YR5/4 にぶい褐	剥離しており調整等不明
136	41		土師器 (高台)	1	第11-2a層 2J-7c	—	<1.8>	(18.5)	高台10	反転復元	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：7.5YR5/4 にぶい褐	摩耗しており調整等不明
137	41		須恵器 杯	1	第11-2a層 2J-4a	(14.8)	<3.8>	—	口縁15	反転復元	外：N6/0 灰 内：N6/0 灰 断：N6/0 灰	

表6 掲載土器・土製品等一覧表(6)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	区	出土遺構層位・地区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	調整等
138	41		須恵器杯	1	第11-2a層2J-5b	(13.4)	<3.9>	—	口縁25	反転復元	外：N6/0 灰 内：N6/0 灰 断：N6/0 灰	底部外面ヘラ切り離し後不調整
139	41		須恵器杯	1	第11-2a層2J-4d	(14.8)	<3.7>	—	口縁15	反転復元	外：2.5GY7/1 明オリブ灰 内：2.5GY7/1 明オリブ灰 断：N5/0 灰	
140	41		須恵器杯	1	第11-2a層2J-6c	—	<1.8>	(9.0)	高台15	反転復元	外：N6/0 灰 内：N6/0 灰 断：N6/0 灰	
141	41		須恵器杯	1	第11-2a層2J-4c	—	<1.5>	10.1	高台20		外：2.5GY7/1 明オリブ灰 内：2.5GY7/1 明オリブ灰 断：2.5GY7/1 明オリブ灰	底部内面静止ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整
142	41		須恵器蓋	1	第11-2a層2J-5b	(15.2)	<1.2>	—	口縁15	反転復元	外：N8/0 灰白 内：2.5GY6/1 オリブ灰～N2/0 黒 断：N8/0 灰白	内面黒色の付着物あり、硯に転用したか
143	41		須恵器壺	1	第11-2a層2J-2a	—	<5.4>	—	20	反転復元	外：N7/0 灰白 内：N7/0 灰白 断：N7/0 灰白	
144	41		須恵器短頸壺	1	第11-2a層2J-6c	(10.0)	<3.7>	—	口縁20	反転復元	外：N7/0 灰白 内：N7/0 灰白 断：N6/0 灰・N7/0 灰白	
145	41		須恵器甕	1	第11-2a層2J-3d	(10.0)	<3.6>	—	口縁25	反転復元	外：N7/0 灰白 内：N7/0 灰白 断：N7/0 灰白	
146	41		須恵器甕	1	第11-2a～2b層2J-4b	(15.7)	<3.8>	—	口縁15	反転復元	外：N7/0 灰白 内：N7/0 灰白 断：N7/0 灰白・N4/0 灰・5RP6/1 紫灰	
147	41	32	土師器甕	1	第11-2a層下面303溝2J-4d	(15.4)	<9.7>	—	口縁40	反転復元	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR6/4 にぶい黄橙 断：10YR6/4 にぶい黄橙	口縁部横ナデ 体部内面ナデか 体部外面指オサエ
148	41		土師器甕	1	第11-2a層下面299溝2J-4d・4e	(24.8)	<8.7>	—	口縁25	反転復元	外：2.5Y7/4 浅黄 内：10YR5/3 にぶい黄橙 断：10YR6/4 にぶい黄橙	口縁端部摩耗 体部内面指オサエ、ナデ(工具使用か) 体部外面ハケ
149	49	33	土師器皿	1	第12a層2J-6b	14.2	3.6	—	口縁60		外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：5YR5/4 にぶい赤褐	底部外面に墨書、墨痕薄く判読できない
150	49	33	須恵器杯蓋	1	第11-2b層2J-4b・4c	受部径(10.5)	<2.1>	—	口縁20	反転復元	外：N6/0 灰 内：N6/0 灰 断：N6/0 灰	回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
151	49	33	土師器(把手)	1	第11-2b層2J-5b	—	—	—	5以下	傾き不定	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：10YR6/2 灰黄褐 断：10YR8/2 灰白	
152	50		土師器杯	1	第12a層2J-3c	(12.8)	<3.4>	—	口縁10	反転復元	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：7.5YR6/4 にぶい橙	内面放射状暗紋 外面摩耗
153	50	33	土師器杯	1	第12a層2J-2d	(17.0)	<5.6>	—	口縁5以下	傾き不定 反転復元	外：5YR6/4 にぶい橙 内：5YR6/6 橙 断：5YR5/6 明赤褐	傾き不定 内面放射状暗紋 外面剥離、ミガキあり
154	50	33	土師器杯	1	第12a層(340畦畔)2J-3a	—	—	—	口縁10	傾き不定	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙 断：5YR6/4 にぶい橙	口縁端部内面摩耗 内面2段放射状暗紋 外面摩耗気味
155	50	33	土師器杯	1	第12a層2J-4c	—	—	—	口縁10	傾き不定	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR7/2 にぶい黄橙	内面2段放射状暗紋 外面摩耗気味
156	50		土師器杯	2	第12a層1J-4d	—	<3.0>	—	口縁10		外：2.5Y7/3 浅黄 内：2.5Y7/3 浅黄 断：2.5Y6/3 にぶい黄	摩耗しており、暗紋等の有無不明
157	50	33	土師器杯	1	第6a～12a層2J-4e	(19.2)	<4.1>	—	口縁10	反転復元	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR7/2 にぶい黄橙	内面2段放射状暗紋 外面ミガキ
158	50		土師器杯	1	第12a層2J-4a	—	<3.3>	—	口縁10		外：2.5Y7/2 灰黄 内：2.5Y7/2 灰黄 断：2.5Y6/2 灰黄	内面斜放射状暗紋(摩耗気味) 外面横ナデ
159	50		土師器杯	1	第12a層2J-3c	—	<2.2>	—	口縁10		外：7.5YR7/3 にぶい橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：10YR7/3 にぶい黄橙	内面放射状暗紋 外面横ナデ
160	50		土師器杯	1	第12a層2J-4b	(12.0)	<2.4>	—	口縁10	反転復元	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙 断：10YR7/3 にぶい黄橙	暗紋なし
161	50		土師器皿	1	第12a層2J-4a	—	<2.5>	—	口縁10		外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR7/2 にぶい黄橙	内外面とも摩耗気味 内面斜放射状暗紋

表7 掲載土器・土製品等一覧表(7)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	区	出土遺構層位・地区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	調整等
162	50	33	土師器(脚)	1	第12a層2J-3d	—	<3.9>	5.0	脚部90		外:2.5Y7/2 灰黄 内:2.5Y7/2 灰黄 断:5YR6/6 橙	
163	50	33	土師器(脚)	1	第12a層2J-3d	—	<4.9>	6.6	脚部70		外:7.5YR6/4 にぶい橙 内:7.5YR6/4 にぶい橙 断:7.5YR6/4 にぶい橙	
164	50	33	土師器(脚)	1	第12a層2J-3d	—	<3.4>	4.6	脚部80		外:2.5Y7/2 灰黄 内:2.5Y7/2 灰黄 断:2.5Y3/1 黒褐	
165	50		土師器(費)	1	第12a層2J-5a	(15.0)	<4.7>	—	口縁30	反転復元	外:2.5Y7/2 灰黄 内:2.5Y7/2 灰黄 断:10YR5/3 にぶい黄橙	口縁部横ナデ 体部内面ケズリ
166	50		土師器(底部)	1	第12a層2J-4d	—	<4.1>	—	底部50	反転復元	外:10YR6/3 にぶい黄橙 内:10YR6/3 にぶい黄橙 断:2.5Y4/1 黄灰	外面に赤彩か
170	50	34	丸瓦	2	第12a層1J-8c	長<9.9>	幅<8.1>	厚1.9			凸:10YR7/3 にぶい黄橙 凹:10YR7/3 にぶい黄橙 断:5YR7/6 橙	凹面布の合わせ目痕 凸面工具によるナデ
171	50		平瓦	2	第12a層1J-6c	長<15.3>	幅<10.2>	厚1.8			凹:10YR5/2 灰黄褐 凸:10YR7/3 にぶい黄橙 断:10YR7/3 にぶい黄橙	凹面布目
172	51		須恵器杯蓋か	1	第12a層2J-7a	—	<2.3>	—	40	傾き不定 反転復元(一部)	外:N7/0 灰白 内:N7/0 灰白 断:N7/0 灰白	回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ 天井部外面にヘラ記号
173	51		須恵器杯蓋または杯	2	第12a層1J-5d・6d	—	—	—	15	傾き不定	外:N8/0 灰白 内:N8/0 灰白 断:N8/0 灰白・N6/0 灰	回転ナデ 内面中央静止ナデ 外面回転ヘラケズリ 外面にヘラ記号
174	51		須恵器杯蓋	1	第12a層2J-6a	(15.6)	<3.7>	—	口縁10	反転復元	外:N6/0 灰 内:N7/0 灰白 断:N7/0 灰白	
175	51		須恵器杯蓋	1	第12a層2J-3b	—	<2.7>	—	20		外:N7/0 灰白 内:N7/0 灰白 断:N8/0 灰白	内面回転ナデ 外面回転ヘラケズリ
176	51		須恵器杯蓋	1	第12a層2J-3d	受部径(12.5)	3.0	—	口縁15	反転復元(ツマミ以外)	外:N7/0 灰白 内:N7/0 灰白 断:N7/0 灰白	回転ナデ 天井部内面静止ナデか 天井部外面切り離し後不調整、ツマミ周囲のみ静止ナデ
177	51		須恵器蓋	2	第12a層1J-4a	(16.5)	<1.3>	—	口縁10	反転復元	外:N6/0 灰 内:N6/0 灰 断:N6/0 灰	回転ナデ
178	51		須恵器蓋	2	第12a層1J-4a	(21.6)	<1.8>	—	口縁10	反転復元	外:N6/0 灰 内:N6/0 灰 断:N6/0 灰	回転ナデ
179	51		須恵器杯	1	第12a層2J-6a	(14.1)	<3.5>	—	受部15	反転復元	外:N6/0 灰 内:N6/0 灰 断:N7/0 灰白	回転ナデ 底部外面回転ヘラケズリ
180	51		須恵器杯	1	第12a層2J-4a	(12.6)	<3.1>	—	受部20	反転復元	外:N7/0 灰白 内:N7/0 灰白 断:N7/0 灰白	回転ナデ
181	51		須恵器杯	1	第12a層2J-5a	(12.2)	4.7	—	受部15	反転復元	外:N6/0 灰 内:N7/0 灰白 断:10R6/1 赤灰	回転ナデ 底部内面静止ナデ 底部外面回転ヘラケズリ 底部外面にヘラ記号
182	51		須恵器杯	2	第12a層1I-4j	(13.3)	<2.7>	—	口縁15	反転復元	外:5Y7/1 灰白 内:N5/0 灰 断:7.5YR7/3 にぶい橙・N5/0 灰	回転ナデ
183	51		須恵器杯	1	第12a層2J-6a	(11.6)	<2.9>	—	受部15	反転復元	外:N6/0 灰 内:N6/0 灰 断:7.5YR6/1 褐灰	回転ナデ
184	51		須恵器杯	1	第12a層2J-5b	(9.0)	<2.9>	—	口縁20	反転復元	外:N7/0 灰白 内:2.5GY7/1 明オリーブ灰 断:2.5GY7/1 明オリーブ灰	回転ナデ 底部外面回転ヘラケズリ
185	51		須恵器杯	1	第12a層2J-6d	(10.2)	<3.0>	—	口縁30	反転復元	外:N7/0 灰白・N5/0 灰 内:N7/0 灰白 断:N7/0 灰白	回転ナデ 底部内面静止ナデ 底部外面切り離し後非常に粗いナデ
186	51		須恵器杯	2	第12a層1J-7b	(10.0)	<3.2>	—	口縁40	反転復元	外:7.5Y7/1 灰白 内:N8/0 灰白 断:N8/0 灰白・N6/0 灰	回転ナデ 底部内面静止ナデ 外面剥離気味
187	51		須恵器杯	2	第10a～12a層1J-7b・7c	(7.8)	2.7	—	口縁25	反転復元	外:N7/0 灰白 内:N7/0 灰白 断:N8/0 灰白・N6/0 灰	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面切り離し後不調整または粗いナデ

表8 掲載土器・土製品等一覧表(8)

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	区	出土遺構層位・地区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	調整等
188	51		須恵器杯	2	第12a～13a層1J-4a	—	<2.2>	(9.5)	高台20	反転復元	外：5B7/1 明青灰 内：5B7/1 明青灰 断：5B7/1 明青灰	回転ナデ 底部内面静止ナデ
189	51		須恵器杯	2	第12a層1J-4d	—	<1.6>	(11.1)	高台25	反転復元	外：5PB7/1 明青灰 内：5PB7/1 明青灰 断：5PB7/1 明青灰	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整
190	51		須恵器杯	1	第12a～13-2a層2J-6b	—	<2.0>	(9.4)	高台15	反転復元	外：5B6/1 青灰 内：5B7/1 明青灰 断：5B6/1 青灰	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整
191	51		須恵器杯	2	第12a層1J-4a	—	<1.8>	(11.2)	高台15	傾き不安定 反転復元	外：5Y8/1 灰白 内：5Y8/1 灰白 断：5Y8/1 灰白	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整
192	51		須恵器杯	2	第12a層1J-5a	—	<2.5>	(9.0)	高台15	反転復元	外：N6/0 灰 内：N7/0 灰白 断：N7/0 灰白	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整
193	51		須恵器杯	2	第10a～12a層1J-5b・6b	—	<2.0>	(8.9)	高台15	傾き不安定 反転復元	外：5B6/1 青灰 内：5B6/1 青灰 断：5B6/1 青灰	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整
194	51		須恵器杯	1	第12a層2J-6b	(13.7)	3.6	—	20	反転復元	外：5Y8/1 灰白 内：5Y8/1 灰白 断：5Y8/1 灰白	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整
195	51		須恵器杯	1	第12a層2J-7b	(14.6)	2.8	—	口縁20	反転復元	外：5B7/1 明青灰 内：5B7/1 明青灰 断：5B7/1 明青灰・N4/0 灰	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整
196	51	34	須恵器壺	2	第11a～12a層1J-9a	—	<5.2>	3.5～3.9	底部100	反転復元(肩部)	外：5B6/1 青灰 内：5B6/1 青灰 断：5B6/1 青灰	回転ナデ 底部外面静止糸切り離し
197	51		須恵器鉢	1	第12a層2J-4a	—	<5.6>	8.5	底部100	反転復元(体部)	外：2.5Y8/1 灰白 内：2.5Y8/1 灰白 断：2.5Y8/1 灰白	全体的に摩耗
198	56		土師器甕	1	第13-1a層上面溝群最上層2J-5a	(15.4)	<13.5>	—	口縁15	反転復元	外：7.5YR7/3 にぶい橙 内：2.5Y4/1 黄灰 断：7.5YR6/4 にぶい橙	全体的に摩耗気味 体部外面ハケ 体部内面ケズリか
199	56	35	土師器甕	1	第13-1a層上面溝群最上層2J-5a	14.4	<19.4>	—	口縁100 全体40	反転復元(体部)	外：10YR8/3 浅黄橙 内：2.5Y4/1 黄灰 断：7.5YR7/3 にぶい橙	摩耗気味 体部外面ハケ、肩部米粒形列点紋 体部内面ケズリ
200	56		土師器複合口縁壺	1	第13-1a層上面溝群最上層2J-5a	外径(18.0)	<5.5>	—	口縁5	反転復元	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：10YR5/2 灰黄褐 断：7.5YR7/4 にぶい橙	全体的に摩耗しており調整等不明
202	58		須恵器高杯蓋	1	第13-1a層上面溝群上層2J-3c	(16.5)	6.3	—	40	転用復元(口縁)	外：10Y7/1 灰白 内：10Y7/1 灰白 断：10Y7/1 灰白	回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
203	58	34	須恵器杯	1	第13-1a層上面溝群上層2J-6b	(12.4)	5.5	—	口縁20 全体70	反転復元(口縁)	外：N4/0 灰 内：N6/0 灰 断：N7/0 灰白	回転ナデ 底部外面回転ヘラケズリ
204	58		須恵器杯	1	第13-1a層上面溝群上層2J-4b	(15.8)	<3.9>	—	受部15	反転復元	外：N7/0 灰白 内：N7/0 灰白 断：N7/0 灰白	回転ナデ 底部外面回転ヘラケズリ
205	58		須恵器杯または杯蓋	1	第13-1a層上面溝群上層2J-4b	—	—	—	5	傾き不定	外：N6/0 灰 内：N6/0 灰 断：N6/0 灰	内面回転ナデのち中央静止ナデ 外面回転ヘラケズリ 外面にヘラ記号
206	58		土師器甕	1	第13-1a層上面溝群上層2J-3b	(13.4)	<2.6>	—	口縁10	反転復元	外：7.5YR7/3 にぶい橙 内：7.5YR7/3 にぶい橙 断：2.5Y5/1 黄灰	
207	58		弥生土器甕	1	第13-1a層上面溝群上層2J-5a	(10.4)	<4.2>	—	口縁25	反転復元	外：2.5Y6/2 灰黄 内：2.5Y6/2 灰黄 断：2.5Y6/2 灰黄	体部外面タタキ
208	58		弥生土器甕	1	第13-1a層上面溝群上層2J-3c	(15.0)	<5.7>	—	口縁25	反転復元	外：5YR6/6 橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙 断：2.5YR5/6 明赤褐	体部外面タタキ 内面摩耗気味、体部ケズリ
209	58	35	弥生土器甕	1	第13-1a層上面溝群上層2J-5a	(33.2)	(44.6)	(10.4)	口縁50 底部40 全体30	図上接合 反転復元	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR6/4 にぶい黄橙 断：5Y6/1 灰	体部外面ミガキ 体部内面ハケ 底部に穿孔(焼成後外面から)
211	57	35	弥生土器甕	1	第13-1a層上面446溝2J-3b	(16.0)	<11.5>	—	口縁20	反転復元	外：10YR4/1 褐灰 内：5YR5/4 にぶい赤褐 断：5YR5/4 にぶい赤褐	体部外面タタキのちナデ 内面摩耗
212	57		弥生土器壺	1	第13-1a層上面448溝2J-5a	(21.6)	<5.0>	—	口縁10	反転復元	外：10YR5/2 灰黄褐 内：2.5Y6/2 灰黄 断：2.5Y6/2 灰黄	頸部に沈線4条以上 内外面摩耗気味、ミガキ
213	57		弥生土器壺	1	第13-1a層上面447溝2J-4a(404溝2J-5b)	—	<5.7>	(8.2)	底部50	反転復元	外：2.5Y3/1 黒褐(黒斑部) 内：10YR8/3 浅黄橙 断：2.5Y6/1 黄灰	体部内外面ミガキ
214	57		土師器直口壺	1	第13-1a層上面1029溝最上部1J-10d	(16.0)	<7.2>	—	口縁20	反転復元	外：2.5Y5/2 暗灰黄 内：2.5Y5/2 暗灰黄 断：2.5Y4/1 黄灰	摩耗気味 外面ハケ

表9 掲載土器・土製品等一覧表(9)

遺物番号	挿図	写真 図版	種類 器種	区	出土遺構 層位・地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	調整等
215	57		弥生土器 壺	1	第13-1a層上面 418溝 1J-10d	—	<2.9>	(4.8)	底部50	反転復元	外:2.5Y5/2暗灰黄 内:2.5Y4/1黄灰 断:2.5Y4/1黄灰	摩耗 外面ハケのちミガキ
216	62	36	弥生土器 高杯	1	第13-2a層上面 2号墓422周溝 2J-3a	23.0	<10.1>	—	杯部 100		外:10YR6/4にぶい黄橙 内:10YR6/4にぶい黄橙 断:10YR6/4にぶい黄橙	内外面ミガキ 杯部下部に穿孔(焼成後外面から)
217	62		弥生土器 壺	1	第13-2a層上面 2号墓422周溝 2J-3a	—	<2.5>	8.1	底部 100		外:2.5Y5/3黄褐 内:2.5Y5/3黄褐 断:2.5Y5/3黄褐	
218	67		弥生土器 鉢	2	第13a層上面 3号墓 1011周溝(西)	(36.0)	<23.2>	—	口縁20	反転復元	外:10YR5/3にぶい黄褐 内:10YR5/3にぶい黄褐 断:10YR5/3にぶい黄褐	体部外面タタキのちミガキ 体部内面ミガキ
219	68	35	弥生土器 広口壺	2	第13a層上面 3号墓 1011周溝 (東・北)	15.0	<19.3>	—	口縁75 全体50	転用復元 (一部)	外:7.5YR7/4にぶい橙・ 10YR6/3にぶい黄橙 内:2.5Y5/1黄灰 断:7.5YR7/4にぶい橙・ 10YR6/3にぶい黄橙	全体的に摩耗しており不明瞭だが 体部に右下がりの波状紋の線刻、 複数段あるか 口縁から肩部にかけてと、それ 以下で胎土の違い明瞭、 上位の胎土に白色中心の礫を多く 含む
220	68	35	弥生土器 広口壺	2	第13a層上面 3号墓 1011周溝(西)	16.9	<12.8>	—	口縁80	反転復元 (体部)	外:2.5Y6/3にぶい黄 内:2.5Y6/3にぶい黄 断:2.5Y6/3にぶい黄	外面ミガキ 口縁部内面ミガキ 221と同一個体か
221	68		弥生土器 壺	2	第13a層上面 3号墓 1011周溝(西)	—	<14.8>	(4.8)	底部50	反転復元 転用復元	外:2.5Y6/2灰黄 内:2.5Y6/2灰黄 断:7.5YR5/3にぶい褐	内外面とも表面剥離 220と同一個体か
222	68		弥生土器 壺	2	第13a層上面 3号墓 1011周溝(西)	(13.8)	<4.1>	—	口縁20	反転復元	外:10YR6/3にぶい黄橙 内:10YR6/3にぶい黄橙 断:10YR6/3にぶい黄橙	
223	68		弥生土器 壺	2	第13a層上面 3号墓 1011周溝(西)	—	<1.7>	(6.6)	底部10	反転復元	外:2.5Y3/1黒褐 内:2.5Y4/1黄灰 断:2.5Y5/2暗灰黄	摩耗気味
224	68		弥生土器 高杯	2	第13a層上面 4号墓 1012周溝(西)	(13.0)	<3.3>	—	口縁10	反転復元	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:10YR6/3にぶい黄橙 断:7.5YR5/3にぶい褐	摩耗気味
225	68		弥生土器 椀形高杯	2	第13a層上面 4号墓 1012周溝(西)	(14.2)	(9.6)	(18.4)	口縁15 脚裾10 全体15	図上接合 反転復元	外:5YR6/6橙 内:5YR5/6明赤褐・ 5YR6/6橙 断:10YR7/2にぶい黄橙	摩耗気味
226	68	35	弥生土器 二重口縁壺	2	第13a層上面 4号墓 1012周溝(北)	(15.4)	<2.6>	—	口縁10	反転復元	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR7/2にぶい黄橙 断:7.5YR6/4にぶい橙	外面摩耗気味、波状紋と竹管紋 内面摩耗、波状紋
227	68		弥生土器 小形加飾壺	2	第13a層上面 4号墓 1012周溝(西)	—	<2.7>	—	肩部40	反転復元	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:10YR5/1褐灰 断:7.5YR5/4にぶい褐	摩耗 頸部直下に櫛描直線紋、その下の 肩部に稚拙な波状紋
228	68		弥生土器 小形直口壺	2	第13a層上面 4号墓 1012周溝(西)	(8.4)	<11.0>	—	口縁25	図上接合 反転復元	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR6/4にぶい橙・ 2.5Y5/2暗灰黄 断:5YR5/4にぶい赤褐	口縁端部外面に沈線 摩耗気味
230	73		弥生土器 壺	2	第13a層下面 1010溝(下層) 1J-4d	—	<2.2>	(9.0)	底部20	反転復元	外:10YR5/3にぶい黄褐 内:10YR5/3にぶい黄褐 断:10YR5/3にぶい黄褐	体部外面と底部外面にミガキ
232	74		弥生土器 鉢	1	第11-1a層 2J-3c	(46.2)	<5.6>	—	口縁10	反転復元	外:10YR5/3にぶい黄褐 内:10YR5/3にぶい黄褐 断:5Y4/1灰	口縁部外面に簾状紋のち刺突紋 体部外面に2段以上の簾状紋、刻 み目を持つ棒状浮紋
233	74		弥生土器 鉢	1	第13-2a層 1J-10d	—	<4.9>	4.0	底部 100	反転復元 (一部)	外:10YR5/3にぶい黄褐 内:10YR5/3にぶい黄褐 断:10YR5/3にぶい黄褐	
234	74		弥生土器 甕	2	第13a層 1J-5a	—	<2.8>	5.7	底部90		外:10YR5/2灰黄褐 内:2.5Y6/2灰黄 断:2.5Y5/1黄灰	摩耗気味
235	74		弥生土器 甕	2	第13a層 1J-5b	—	<2.7>	(5.7)	底部90		外:10YR6/4にぶい黄橙 内:2.5Y5/1黄灰 断:7.5YR5/4にぶい褐	
254	77	36	縄紋土器 深鉢	2	第13a層 1J-4a	—	<17.5>	—	口縁 20か	傾き不定	外:10YR5/2灰黄褐 内:10YR5/2灰黄褐 断:10YR5/2灰黄褐	外面貝殻条痕紋 内面摩耗 滋賀里III a~(篠原)
255	77	36	縄紋土器 深鉢	1	第13-1a層上面 溝群上層 2J-5b	(29.2)	<5.0>	—	口縁25	反転復元	外:10YR5/3にぶい黄褐 内:2.5Y3/1黒褐 断:10YR5/3にぶい黄褐	滋賀里III a~篠原
256	77	36	縄紋土器 深鉢	1	第13-1a層 2J-6b・7b	—	<4.6>	—	5以下	傾き不定	外:10YR3/2黒褐 内:2.5Y3/1黒褐 断:2.5Y2/1黒	口縁端部と突帯に刻み 滋賀里IV
257	77		縄紋土器 深鉢	1	第13-2a層 2J-2a	—	<5.0>	—	5以下	傾き不定	外:10YR5/3にぶい黄褐 内:10YR5/3にぶい黄褐 断:2.5Y3/2黒褐	口縁端部と突帯に刻み 滋賀里IV

表 10 掲載土器・土製品等一覧表 (10)

遺物 番号	挿 図	写真 図版	種類 器種	区	出土遺構 層位・地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	作図方法	色調	調整等
258	77		縄紋土器 深鉢	1	第 13- 1 a 層上面 溝群上層 2J-3b	—	<4.4>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐 断：2.5Y3/1 黒褐	口縁端部と突帯に刻み 滋賀里IV
259	77		縄紋土器 深鉢	1	第 13- 1 a 層上面 溝群上層 2J-3b	—	<3.9>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：2.5Y3/1 黒褐 断：2.5Y5/3 黄褐	口縁端部と突帯に刻み 滋賀里IV
260	77	36	縄紋土器 深鉢	1	第 13- 1 a 層上面 447 溝 2J-4a	—	<3.5>	—	5 以下	傾き不定	外：2.5Y3/1 黒褐・ 10YR5/3 にぶい黄褐 内：2.5Y3/1 黒褐 断：2.5Y4/1 黄灰	口縁端部と突帯に刻み 滋賀里IV
261	77		縄紋土器 深鉢	1	第 13- 1 a 層上面 422 周溝上落ち込み 2J-4a	—	<2.7>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR4/2 灰黄褐 内：10YR3/1 黒褐 断：10YR3/1 黒褐	口縁端部と突帯に刻み 滋賀里IV
262	77		縄紋土器 深鉢	1	第 13- 1 a 層上面 溝群上層 2J-4b	—	<2.4>	—	5 以下	傾き不定	外：2.5Y3/1 黒褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐 断：2.5Y4/1 黄灰	口縁端部と突帯に刻み 滋賀里IV
263	77		縄紋土器 深鉢	1	第 13- 1 a 層 2J-6c	—	<6.3>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR4/2 灰黄褐 内：10YR4/2 灰黄褐 断：10YR4/2 灰黄褐	口縁端部と突帯に刻み 滋賀里IVか
264	77	36	縄紋土器 深鉢	1	第 13- 2 a 層上面 2 号墓 422 周溝 2J-4a	—	<4.2>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR4/2 灰黄褐 内：10YR4/2 灰黄褐 断：10YR4/2 灰黄褐	突帯に刻み 船橋か
265	77		縄紋土器 深鉢	2	第 13a 層 1J-7b	—	<3.6>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR3/2 黒褐 内：10YR4/3 にぶい黄褐 断：2.5Y4/1 黄灰	突帯に刻み 船橋か
266	77	36	縄紋土器 深鉢	1	第 13- 1 a 層上面 溝群上層 2J-3b・4b	—	<3.3>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR4/2 灰黄褐 内：2.5Y3/1 黒褐 断：2.5Y3/1 黒褐	突帯に刻み 長原 (船橋か)
267	77	36	縄紋土器 深鉢	2	第 13a 層 1J-6b	—	<7.7>	—	5 以下	傾き不定	外：2.5Y5/2 暗灰黄 内：10YR5/3 にぶい黄褐 断：5Y4/1 灰	突帯に刻み 長原
268	77		縄紋土器 深鉢	1	第 13- 2 a 層 2J-6a	—	<3.4>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR6/3 にぶい黄橙 内：2.5Y5/2 暗灰黄 断：2.5Y3/1 黒褐	突帯に刻み 長原
269	77	36	縄紋土器 深鉢	1	第 13- 1 a 層上面 溝群 2J-6a	—	<3.3>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐 断：10YR5/3 にぶい黄褐	突帯に刻み 長原
270	77		縄紋土器 深鉢	2	第 12a 層 1J-6b	—	<3.8>	—	5 以下	傾き不定	外：2.5Y4/1 黄灰 内：10YR5/3 にぶい黄褐 断：2.5Y4/1 黄灰	突帯に刻み 長原
271	77		縄紋土器 深鉢	2	第 13a 層上面 1011 周溝 (北) (最下層) 1J-5a	—	<3.8>	—	5 以下	傾き不定	外：2.5Y6/2 灰黄 内：2.5Y6/2 灰黄 断：2.5Y4/1 黄灰	突帯に刻み 長原
272	77		縄紋土器 深鉢	1	第 13- 1 a 層 2J-3a	—	<4.1>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐 断：2.5Y4/1 黄灰	突帯に刻み 外面ケズリ 長原 (～水走) か
273	77		縄紋土器 深鉢	2	第 13a 層上面 1012 周溝 (北) (最下層) 1J-5d	—	<4.9>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR4/2 灰黄褐 内：2.5Y4/1 黄灰 断：2.5Y3/1 黒褐	長原 (～水走)
274	77		縄紋土器 深鉢	2	第 13a 層下面 1040 溝 1J-5a	—	<2.8>	—	5 以下	傾き不定	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：10YR5/2 灰黄褐 断：10YR5/2 灰黄褐	突帯に刻み 水走
275	77		縄紋土器 深鉢	2	第 12a 層 1J-5b	—	<3.4>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐 断：2.5Y3/1 黒褐	全体的に摩耗 突帯に刻み 水走か
276	77		縄紋土器 深鉢	2	第 13a 層 1J-7c	—	<2.7>	—	5 以下	傾き不定	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐 断：10YR5/3 にぶい黄褐	摩耗気味 突帯に刻み 水走か

表 11 掲載木製品一覧表

遺物番号	挿図	写真図版	種類	区	出土遺構層位・地区	長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	特徴
2	13	30	部品か	1	第 4a 層 (1 畦畔) 2J-4e	<10.4>	1.7	1.7	スギ	天地左右不明 頂部加工痕明瞭 下部欠損
14	22		呪符木筒	1	第 5 - 2b 層 2J-3b	<9.1>	3.0	0.4	スギ	表面「急々如律 [令カ]」墨痕薄い 裏面墨痕なし 下端折れ、右辺上部欠損 上端左角を削り落とし、上部左に三角形の切り込み (右辺は欠損のため不明) 表裏ともに平滑 板目
52	26		蓋・底板等	1	第 7a 層上面 79 溝上層 2J-4c	径 (10.2)	<4.3>	1.3	ヒノキ	
71	30	31	漆器椀	1	第 7a ~ 8a 層 2J-5a	—	器高 <3.3>	—	ケヤキ	内外面とも黒色で、赤色紋様 特に外面漆膜脱落 傾き不定
97	33	31	下駄	1	第 9a 層 2J-4d	21.6	11.4	0.4 ~ 2.3	スギ	前緒穴 3 箇所、うち 2 箇所破損、破損箇所が平滑で、破損後、新たな穴を開け、継続使用したと思われる 表面に足の圧痕、特に前緒穴位置より前方が深い 裏面に刃痕複数残る 後歯の方が摩耗著しい
117	36		板状 (折敷か)	1	第 10a 層 2J-5b	<10.4>	<4.3>	0.5	アスナロ属	両面平滑、片面に刃痕 板目
131	41	32	棒状	2	第 11a 層 1J-4d	<9.1>	1.2	0.8	ヒノキ	先端わずかに欠損、下部欠損 幅広面が板目
201	56	34	下駄	1	第 13- 1a 層上面 溝群最上層 2J-4b	25.9	11.6	0.6 ~ 2.0	ヒノキ	遺存状態不良、右側後部破損 前緒穴左に寄る 後歯の方が摩耗著しい 板目、節 2 箇所
231	73	36	組み合わせ式 鋤身	2	第 13a 層下面 1040 溝 1J-5a	<24.6>	20.7	3.2	コナラ属 アカガシ亜属	

表 12 掲載金属製品・金属製品生産関係遺物一覧表

遺物番号	挿図	写真図版	種類	区	出土遺構層位・地区	長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	残存率 (%)	特徴
8	18		筭	1	第 5- 2a ~ 2b 層 2J-3e	変形 <16.2>	1.3	0.07 ~ 0.17	100	
17	23	30	鞆羽口	1	第 6a 層 2J-4a	<6.8>	長径 6.8 (先端側) 7.1 (基部側)	短径 5.9 (先端側) 6.3 (基部側)		断面縦長楕円形の羽口、両端欠損 基部側の割れ面比較的滑らかで、粘土接合部か 先端側外面にやや黒みを帯びた灰色のガラス質滓が薄く付着、径 1mm 以下の気孔あり 胎土に白色粗砂 ~ 小礫を含む 挿入角度 25 度
18	23		釘	1	第 6a 層 2J-6e	<10.6>	基部 0.9	基部 0.7	85	先端欠損
72	30		銭貨	1	第 7a ~ 9a 層 2J-6b	径 2.6	—	0.14	65	万年通寶
167	50	34	不定形滓	2	第 12a 層 1I-4j	<5.1>	<3.9>	<3.1>		80.32g 椀形滓が壊れたものか 表面周縁部が土手状に盛り上がる 表裏面ともに気孔あり 炭片としては裏面に 4 箇所認められるが、全体的に炭の含有が多い 非常に重量感あり、磁着度高

表 13 掲載石器・石製品一覧表

遺物 番号	挿図	写真 図版	種類	区	出土遺構 層位・地区	長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
6	18		砥石	1	第 5- 2 a 層上面 52 溝 2J-4c	<4.9>	<3.8>	1.2		4 面使用、小口不使用、一端折れ
15	23		砥石	1	第 6 a 層 2J-4b	<5.9>	<5.1>	1.5		4 面使用、小口不使用、一端折れ
16	23		砥石	1	第 6 a 層 2J-3c	<5.9>	3.5	0.2 ~ 0.9		5 面使用、一端折れ 側面と小口面の擦痕比較的粗い
98	33		砥石	1	第 9 a 層 2J-4c	8.3	4.8	1.9 ~ 2.8		4 面使用、両小口欠けまたは折れ 小口の縁に沿って使用痕あり、欠損後も使用して いたと思われる
118	36		砥石	1	第 10 a ~ 13- 2 a 層 2J-5e	7.0	<3.3>	<4.9>		1 面使用、2 面欠損
119	36		砥石	1	第 10 a 層 2J-5a	<11.7>	<3.3>	5.3		2 面使用、1 面欠損、両小口欠けまたは折れ
168	50		砥石	1	第 12 a 層 2J-3b	<4.9>	3.6	3.3		4 面使用、小口不使用か、一端折れ 太く深い擦痕と細く浅い擦痕
169	50		砥石	2	第 12 a 層 1J-4b	<7.0>	4.7	3.6		5 面使用、一端折れ
210	58		砥石	1	第 13- 1 a 層上面 溝群上層 2J-5a	10.6	7.6	6.2		4 面使用
229	73		砥石	2	第 13 a 層下面 1010 溝 (上層) 1J-4d	<5.3>	<2.9>	<1.3>		残存する 2 面使用
236	75		石鏃	1	第 13- 2 a 層上面 2 号墓 埋葬施設 1 2J-3a	<2.2>	1.2	0.6	1.21	サヌカイト
237	75		石鏃	2	第 12 a 層 1J-6c	3.0	1.8	0.5	2.31	サヌカイト
238	75		石鏃	2	第 12 a ~ 13 a 層 1J-5a	<3.7>	1.3	0.5	1.68	サヌカイト
239	75		石鏃	2	第 13 a 層上面 4 号墓 1012 周溝 (北)	4.2	1.4	0.5	2.37	サヌカイト
240	75		石鏃	1	第 13- 1 a 層 2J-3e	3.2	1.3	0.5	1.63	サヌカイト
241	75		石鏃	2	第 13 a 層 1I-9j	<3.6>	1.4	0.5	2.26	サヌカイト
242	75	36	石鏃	1	第 12 a 層 2J-3d	3.7	1.9	0.5	2.40	サヌカイト
243	75		スクレイパー	1	第 13- 1 a 層上面 溝群 2J-3a	4.4	3.6	1.0	11.65	サヌカイト
244	75		スクレイパー	2	第 13 a 層 1J-5a	5.2	4.8	0.9	16.95	サヌカイト
245	75		スクレイパー	1	第 8 a ~ 11 a 層 2J-6a	6.9	4.4	1.2	40.14	サヌカイト
246	75		剥片	2	第 13 a 層 1J-5c	3.9	2.7	0.7	7.40	サヌカイト
247	75		剥片	1	第 13 a 層 2J-5b	5.4	4.2	0.8	17.79	サヌカイト
248	75		石核	1	第 13- 1 a 層上面 溝群上層 2J-3b	8.9	3.3	2.3	50.87	サヌカイト
249	75		石核	1	第 13- 2 a 層上面 2 号墓 422 周溝 2J-3a	8.7	6.5	1.9	94.23	サヌカイト
250	76	36	石棒	1	第 13- 1 a 層上面 溝群 2J-4b	<12.1>	<3.7>	<3.4>	210.34	結晶片岩
251	76	36	石棒	1	第 13- 2 a 層上面 2 号墓 422 周溝 (最 下部) 2J-3a	<7.0>	5.4	<2.6>	157.97	結晶片岩
252	76		叩き石	1	第 12 a 層 (340 畦畔) 2J-3a	<7.3>	<9.5>	5.8	498.92	磨石としても使用
253	76		石庖丁	1	第 13- 1 a 層上面 溝群上層 2J-5b	<8.1>	3.4	0.6	26.93	